

青島の歴史

398
444



始



189

特 234
790



赤世入男

カクマ





當世五人男



はしがき

當世五人男

はしがき

雁金の初聲に葦が散る浪華の里の五人男にあらず、そも丹波の山奥より保津の流れを傳うて都大路を荒せし五人男にあらず、濱千鳥の跡ふみつけし鳴海の五人男にあらず、東海道の驛路を名乗りあげたる五人男にあらず、むらさき匂ふ江戸の五人男、越路の雪を跳ねて躍りし五人男、草の中より飛び出でて白河の關に墓を竝べし奥州の五人男、上總下總に諸羽を伸せし飯岡横根の五人男、さては岩鼻あたりの秋風に烏川の肌寒かりし上州の五人男にあらず、されば何處いかなる里の五人男ぞ、

當世五人男

これは明治の今日このごろ、いづこよりか集りし五人男とて、阿彌陀かつぎの古帽子を明珍の兜にいただき、年を経し絲の亂れの苦しさに質屋も受けぬ破れ布子一枚を鎧として、足には俎形の下駄の齒も抜けて頤に土喰ふ浅ましさに更に憂しとも思はず、いづる時は破邪顯正のステッキを

つきならして飢ゑたる矜羯羅童子の如く、入れば居家處世を三寸の舌頭に演じて泡を吹くさま蟹の如く瘦馬の如く、豆に似たる兩眼を光らして乃公たゞ獨り英雄となり、猪に似たる鼻息あらして天下また掌上の物たる當世書生の五人男なり、
読んで面白いか面白くないかは讀者の御勝手、さらに著者のあづかり知ることにあらずといふ、はしがき依而如件、

某の狂歌をかりて五人男の面影をうつす

紅葉する山みな酔へり其中に獨り醒めたる松はすねもの
山の端に花ちや雲ちやと争ひの中へ出る日や埒をあけほの
おしつめし年のしりがひ外れてや春の野道にかけいだす駒
ながき日を一日ふりし行列に草臥れもせぬ春雨のあし
まだ春の寒さにとけぬ花の先梅さへ雪の頬かぶりして

川上三吉
倉橋幸藏
黒田健次
上田力
吉田雄藏

諺に曰く、貧は諸道の支障、金なきは足なきに等しと、さればこゝに嵐の夜半も雪の日も布子

一點寒晒し、あはれの不具に生れたる五人の書生を捉へて、またしても例の亂脈亂取めちや／＼のなぐりがきに、こんなものが出来て我ながら持て餘しぬ、
時これ明治二十九年九月、中旬、ちやうど五十一年目とやらの水害に遭うて竈中に蛙を生ずる古語を眼前に見る向島白鬚の森陰、二階住居の燈下、幸ひに流れざりし禿筆を採つて浪六しるす

其 一

むかし百里の旅行には十日前より親類知己を駈け廻つての暇乞ひ、さては平生無沙汰の氏神鎮守へ俄の願かけて、向三軒兩隣家へは朝夕の後見、馴染甲斐の町内衆へは不在を頼みの挨拶、もし二百三百乃至五百里の旅行ともなれば、知らぬ他國の空に人間の生身ちや、もとの零末の露なほさら用心さつしやれと、檀那寺の和尚に抹香の匂ひ吹かれて、何とやら心細さの行李の底に經帷子を押し入れ、連れ添ふ妻子へは餘所ながらの水盃、いさ立出づる首途の曉を多くの人に送られて、おさらば、さらばの聲きく時は流石の大の男しを／＼として、うまれ故郷の有難味を今ぞ此身に知らるゝとは、わづか人ひとりの定命こゝ五十年ほど前なりとぞ、

それに引かへ廣き世界も狭く縮まりし明治の今は、汽笛一聲、一瞬幾里、夢を乗せて寝ながら山河を奔る世の中なれば、湯歸りの濡手拭を肩に引掛けたるまゝ、野心ふらふらとして三十里外の月に酔ひ戯れ、また忽ち取つて返して元の巢に寝る姿を妻君さらに悟らねば、何事も天下太平無事息災、江戸長崎の間に日和下駄の齒音を數へ、東海道五十三驛は鳴昔の茶代と草鞋錢もて行かるゝさへ、なほ遅しとて電光石火に乗る工夫しきりの眞最中を、風雅でもなく洒落でもなき二本の脛に山河越えて行く旅は、いづれ人知れぬ苦勞重荷の涙の中に、かくても驚かぬ勇氣の顔色は流石に書生といふ二字の冥加なりけり、

ころは七月の末つかた、綠蔭水樓に美人の深草團扇もて煽がるゝさへ、なほ堪へ難く照り續いたる乾蒸の暑炎には、人間の身の皮一枚たしかに焦げ付く夏の猛威を、東海道の切所、箱根なだれの大しぐれ小しぐれ津花阪、草木も葉を捲いて水の音さへ濁るゝを事もせず、あはれ汽車汽船といふものを不知顔なる足ふみしめて、一本のステッキをつきならし、肩にも餘る麥藁帽子を冠きつゝ、湧き出づる青汗たら／＼と總身を濡らせど顔色さらに屈せず、悠々として小唄の一つも呻り出さん勢ひに、阪の上より降り来る書生二十六七、また折しも阪の下より息もきれ／＼杖を力に上りゆく書生十八九、互に見上げ見下して流石に同じ境涯、おもはず笑を含んで帽子に手を

かけぬ、

火輪の海に浮びしころは時に猶ほ弔古風流の客あつて渡りしかど、鐵路の一たび通じてよりは關道空しく荆棘に埋もれて、さらに人影なき函嶺なだれの大阪を、照りつゞいたる乾蒸の夏の猛威に、見れば思へば同じ艱苦の旅の姿、餘所ならぬ心地して年長の書生まづ言葉をかけぬ、

「やア君、暑いですな」

頭上より聲かけられし上り阪の書生は、田舎生育の岩疊に生れて骨太く肉逞しけれど、まだ浮世の風に當らぬ風情、しかも心の一物は細く優しかりけん、杖をとめて疲れ果てたる腰を伸べながら、さらに途上の師に逢ふが如く、懇懇に禮を返して額の汗を拭ひつゝ、

「よほど暑う御座います、別して私は始めての上京、不案内の上り阪で、少々ばかり足を痛めました、この阪の上に休憩茶屋のやうな家は御座いませんか」

「ないです、絶えてありませんな、むかし天下の三百諸侯が全盛を極めて往來した當時すら、箱根八里は馬でもと唄うた東海第一の峻峻、まして今は霜換り星移りて古道苔滑かに關嵐ふかく閉し、わづかに草を焼いて路傍の斷碣を看るといふ古詩の趣、あはれ物凄しい景況です、なか／＼ひどいですよ、全體ここは東京の失敗書生が轍轍の歴史を荷うて生命から／＼國に歸るか、

但しは文明の徳に漏れたる獵夫樵人の通ふ外は、いやしくも尋常まじめの人間らしいものを通る筈のない今日、まだ年少の君が初めての上京に此慘澹を取らるゝは、いかなる事情です、幸ひ五の足休め氣休めに、その邊の綠蔭風清きところを擇んで一場の快談いかゞです、ちと瘦我慢に似たれど、乃ち茲が三四五十何錢で夢を乗せて行く奴等の知らぬ東海道です、
いひつゝから／＼と高く笑ふ聲に、鬱蒼たる樹木の間より鳥の羽影おどろいて地に印しぬ、歩む焦熱地獄の艱苦に引代へて、綠蔭ふかく風清く、谷間を落つる水の音さへ幽に耳を洗へば、滿身の大汗さつと消えて清涼の別世界、あゝ天の賜物は公平ですと呟きながら、當世富貴の人の知らぬ岩根に腰うちかけつゝ、年長の書生まづ口を開いて語る言葉は豪にして加之も洒落なるところ、さすがに經驗者と見えたり、

「今もいふ通り、十年の苦學むなく水泡となつて、失敗さん／＼の履歴を雙肩に荷ひながら、手に一片の土産もなく面を掩うて國に歸る僕の如きものが、今日この函嶺を越ゆるは周よりの覺悟、いはゞ當然の結果ですが、君、年少いまだ君の如く無邪氣に見ゆる人が、始めての上京に斯る困苦の膝栗毛とは、全體どういふ事情です、差支ないかぎり承つた上、近ごろ失敬ですが、唐突ですが、いさゝか僕が經驗の注意を捧げたいと思ふのです、乃ち東京は或點に於て身を

立つるより寧ろ身を亡すべき魔力の集合せる怖しい土地ですからね、
年少の書生ます／＼慇懃に禮を正して、世にも人にも馴れざる言葉ぼつ／＼と答へぬ、
「有難う御坐います、御禮を申します、私は大分縣豊後國南海部郡のうち、因部の産で御坐います、およばずながら此度思ひ立ちました」

「む、豊後の因部ですか、それでは何です、あの白米を食ふ人間の居らぬ土地ですな」

「はい、盆と正月の二度に、やう／＼白米の味を知る位の者で御坐いますが、やはり同じ人間、一心の勉強と志節に依つては」

「いや、こりやア失敬な事をいひました、多罪々々、決して、さういふ意味で言つたのではない、たゞ御不自由な遠國と申しただけですから」

「遠國も遠國、猪猿と一緒に育つた田舎者が、はじめての上京で御坐いますから、萬事の不案内、盲目も同然の私、何卒、身のために御教訓を願ひます」

「さう慇懃に出られては此先生ちと困る、いや大に困ります、乃ち先生みづから失敗を重ねて故郷に逃げ歸る途中ですから、しかし、失敗は成業の師といふ點から割り出して、お見掛け申せば、あまり質朴なる初旅の御様子に、いさゝか老婆心が起つたのです、全體、君が上京の目

「何を修學なさるのですか」

「何とて、まだ其邊に及びませんが、兎も角も上京した上で」

「ふん、兎も角も御上京ですか、して學資は」

「學資は御坐いません」

「それでは、東京に誰か一家をなした知人でも」

「それも御坐いません」

「學資の料もなく、よるべき知人もない、それぢやア全體どうして、御勉強なさる目的です」

「勞働して土に喰ひ付いても、一所懸命に」

「きくより年長の書生おもはず空を仰いで、」

「あゝ痛ましいかな、なるほど思想は御立派ですが、無効です、およしなさい、徒勞です、君の思想は殆ど十五六年ばかり遅れて居ます」

「いひつゝ首を傾けて年少書生の顔面しみく」と哀れげに見詰めぬ、

「半文の學資を取るべき道もなく、一人の便るべき知己もなく、修學の目的また何をするともなく、唯ともかくも上京して後のこと、衣食は勞働もて支へん、よしや不幸にして半途に躓くとも、」

「文物の淵源たる東京なれば一日の見聞たしかに山中百日の讀書に勝るべしと、此時さらに一段の勇を鼓して旅の疲勞も忘るゝ年少の意氣を、さながら哀れげに見遣りて靜に其肩を撫でつゝ、」
「壯なるかな君、往けよ君、往いて大に奮ふべしと、膝を打って感歎賞揚したいところですが、今もいふ通り、それはこゝ十四五年も前のこと、東洋悲歌的の豪傑の卵子が羽を生して闇雲に飛び歩いた時のことです、今日の時勢、すでに出来上った學問すら、これに添ふの金力なくんば更に何の効もないほどの世の中、その一例は帝國大學を卒業して新に學士號をうくると共に、忽ち菓子折を荷いで東西南北に奔走せねば、翌日から衣食の道に事缺くといふ淺ましい景況です、まして君の如く、これからの學問修行、しかも漢として秩序なき學問の首途といふに、一日の學資もなく一人の依るべき知己もないとは、殆ど舵なき小舟を大海の風浪にまかすが如く、到底だめです、およしなさい、また君が人に過ぎたる強健で人に過ぎたる勞働に堪へ得るならば、その勞働を以て成就の見込みもない學問に代へるよりは、むしろ直接の金錢に代へて十年の蓄財を國に持ち歸る方が遙に得策です」

「いひつゝ眼を斜めにして少年の起居を窺へば、なんとやらん滿腹の不平を額に現して、なほ屈せず更に服せぬ顔色いよゝ哀れに思ひけん、年長の書生また説き出して語りぬ、」

「昔日の僕は恰も今日の君に等しき勢ひで、男兒立志出鄉關、學若不成就不還の吟聲もろとも勇ましく國を飛び出し、わづか十餘圓の金を懐中にして上京してみれば、滿目の風物すべて想像とは大反對の結果で、今日まで無事に生命を保つたが、せめてもの出来です、その間の苦勞艱難は殆ど言語に盡し難く、また其間の孜々勉強も敢て人に譲らず、いはゞ今日通常學生の夢にも思ひ及ばぬほどでしたが、さて十年の結果を打算し來れば、憐れむべし屍の如く水の如く、かつては爪弾きして我黨に齒せざりし鼻ツ垂れの馬鹿者が、怖るべし學資に不自由なく順序の教育に進みしがため、飢ゑたる駿馬と飢ゑざる鈍牛の比喩、いつの間にやら我等の頭上を飛び越えて、今は天上界から冷かに笑はるゝ無念心外、君いかゞです、何と思ひますか、今日の世の中は學問と金力の相應が尤も肝要です、勞働の傍ら苦學の功を收めんとする奴は指頭で大磐石を掘るも同然、學資に事缺かで順序の學問する奴は器械を以て掘るも同然、難易輕重得失利害、なか／＼天地の差どころでは無いです、故にとはチト大業ですが、只管君に忠告します、勞して功なき學問に可憐ら人間の半生を潰すよりも、此まゝ國に歸つて晝は田を耕し夜は一家團聚の快樂をお取りなさい、僕の如きは十年の苦學その甲斐なかりしも、まだ幸福の部分、十年の苦學に一朝の大覺悟を得て三人の同志と激論の末、袖を拂ふて國に歸るのです、乃ち故山の風月に嘯いて

悠々寛々と天の賜物に浴し、かの帝國大學の卒業生が小學校の屈教師となつて、僕の山間に流れる結果を見てやる覺悟です」
 おのが半生の徒勞失敗を眼前に曝して、事實の上より理論の上より説けども論せども、あらたに羽を伸して巢を出でし隼の眼光、さらに屈せぬのみか、果は反動の猛勢むら／＼と立つ田舎氣質の一徹に、年長の書生も今は我を折りて俄に言葉を改めつゝ、
 「それぢやア君、もはや僕は口を閉ぢます、たゞ願はくば、君が前途に於て今日の僕の言を思ふの不幸ないやうに祈ります」
 「はからぬ御縁に段々の御教訓、有難う御座いますが、私も一たん志した上京に、まだ東京の地も踏まず此まゝ函嶺から引ツ返すことは」
 「御尤も、至極の御尤もです、なアに其御決心なら出来ませう、精神一到金石亦透だ、全體、おのれが失敗の愚を證として他人の業を阻むは僕の無禮です、が君、わるく取らないやうに願ひます、眞實に僕が老婆心であつた證據として、君に一葉の名刺を獻じます、轅轅落魄の失敗書生が古名刺一枚、屑屋の籠に入ることも覺束ないですが、これを東京市街の片外れ、隅田川に添うて千住の橋場の間に當る汐入村といふ所へ御持參になれば、時に聊か君の無聊を慰する事もあらう

當世五人男
かと考へます、乃ち汐入村の二十三番地に僕の同志の苦學生三人が自炊して居りますから、おついでに訪うて御覽なさい、いづれも面に似合はぬ優しい奴等です。いひつゝ懷中より一葉の名刺を取出して其裏面に鉛筆の文字を連ねぬ、少年いとゞ今更に嬉しく、頭を下げ腰を屈め、うやうやしく取つて見れば

公等の論を破つて函嶺を越ゆるの途上、たま／＼斯人に逢ふ、年少いまだ風塵を解せずと雖も、驕々たる苦學の志は正に公等の徒なり、もし我を失ふの憾あらば、宜しく取つて我席を與ふべし、

七月念九

函嶺古道の緑ふかく風清き處にて

川上三吉

倉橋幸藏
上田力
黒田健次

三兄貴下

其二

千軍萬馬の戦場に抜け駆けの功名を覘ひし甲斐もなく、さん／＼の疵を負うて無念ながらに引返す古兵が、あはれや鎧つきさへ整はぬ若武者の駆け出づるを見て、危し危し、心は猛くとも初陣者の立つべきところにあらずと、最後の利害を説き勝敗の數を説いて諭せども、はやり逸りし一念の勇氣いかでか止むべき、討死は固より覺悟の前と叫んで猶も走せ出す勢ひに、古兵おもはず一滴の涙こぼして、さらば往け、かはいや今のうちに屍となるべき露の生命の唯一時、さても痛ましもの者ぞと後姿みおくるに似たるは、箱根なだれの大阪に逢ひし二人の書生が風情なりけり、

當世五人男

大分縣豊後國南海部郡のうち、白米しらぬ土地とて世に聞えたる山中の片田舎、因部の里の草叢に生れしかど、不具ならぬ無事息災の男一貫、吉田雄藏當年こゝに十七歳、かくも思ひ立ちて國を出でしからは、古今東西の先哲が手を連ねて此函嶺を遮るとも、いかで聞くべく、押し破り突き付しても進まんほどの我を、まして一人凡夫の失敗履歴に驚いて踵を返すべきや、くれ／＼の

老婆心、さまざまの忠告、それは身に徹へて嬉しけれども、前途の成敗禍福は我たゞ一人の成敗禍福、あかの他人のあづかり知るところならずと、今まで疲れ果てたる身體ぐツと更に押し伸ばし、むら／＼と立つ一段の勇を鼓して日夜の差別もなく、野に臥し山に臥し、雨に打たれ風に吹かれても、幸ひの山家生育に兎の毛の末の痕もなく、すゝみ進みて八月三日といふ東天の曉に、この少年さながら豆の如き五體を躍らして日本一の大都會へ着きぬ。

隣家といへば峰を越え谷を涉りて近きを半里とし、白米は一年二度の盆と正月とを待ち兼ねて舌鼓うち、鶏犬の聲は無くとも猪猿の啼く音に依つて家あるを知るといふ、豊後因部の生れ其まゝを捉へて東京の中央に放てば、満目の繁華雑沓ながら頭上に百雷の落ち掛る心地して、きやツと叫ぶを現世の餘音、忽ち魂消て死すべき筈なれども、こゝに吉田雄蔵は幸ひにして十五の年に山を踏み出し、佐伯の町の親戚に二年の春秋を送りて、覺束ながら學校の門をも滑り友朋輩にも交り、ゆけば往かるゝ東京を志して辿りくる道すがら、まづ諸國の人と乗り合せて船を神戸の海岸に着け、大阪の片端を通りぬけ、西京の土をも踏んで大津の町に出で、それより東海道の草枕、中にも名古屋、濱松、静岡などの繁昌に馴れて、やう／＼次第おくりに進み入りしかば、銀座街頭の大地に平駄張ツて眼を舞はすほどの不幸にも逢はざりき。

されど、内心の驚愕と五體の震動とは、神に祈ツて徴兵検査を遁れ損ねし臆病者の戦場に臨みしが如く、顔色を變へ身を縮めて足の踏み場もおぼつかなく、たゞ人情紙の如き浮薄の今日に仁人めいたるは巡査のみとの思案より、うや／＼しく交番所の前に腰を屈めて本籍姓名を名乗り、まづ差當りての行先は汐入村、なるほど今となつては函嶺に逢ひし書生の親切いよ／＼嬉しく、もし此名刺一枚の恩賜なくンば何となる、馬の蹄に蹴飛ばされて電信の鐵線に首吊りやせんと、思はず東海道の空を見返りて伏し拜みぬ。

たゞ汐入村といひしに流石の巡査も眉を顰めしが、聞きしまゝに再び繰り返して、隅田川のほとり橋場と千住とやらの間といへば、さてはと首肯いて笑を含みつゝ、それは鐵道馬車の此線路を傳うて淺草の雷門といふところまで行き、其上をこにて問ふべしと教へられ、慇懃の禮を残して再び草鞋を踏み占め、わづかに身の怪我なきを幸ひとして辿りつき、またもや教へられて吾妻橋を渡り、隅田川の土堤に添うて向島を過ぎ、鐘淵紡績會社の此方より渡舟に乗りて、水に臨める一團の藪疊を入れば汐入村なりけり。

こゝを汐入村と知りての上は、たゞ二十三番地と尋ね尋ねて其日の夕暮、名ばかりの門は柱朽ちて扉傾き、左右の竹垣は縦横に破れて人住むとも見えねど、樹木の間より草屋根わづかに半面

を現して、かすかに笑ふ聲の漏るゝを便りに、もの間はんとする折しもあれ、門内より蝗の如く飛び出したるは二十四五の書生、垢染みたる單衣の袖も裾も捲りあげて手足ぬツと現し、繩からのけの缺損徳利しかも酒にはあらで今夜の石油を買はんとや、似たれど揃はぬ下駄を片々に踏み鳴らして、何心なく走せ出づる面前に吉田雄藏、慇懃の體、

「はい、物を伺ひまする、當村の二十三番地は此方で御座いまするか、倉橋様、上田様、黒田様といふ御三人の」

「さうです、三人とも居ますが、君は何處から、御姓名は」

「私は過日函嶺の阪で、川上三吉様といふ御方に」

「やア川上、あの川上に逢ツた御人ですか」

「聲もろとも俄に振り返ツて門内へ叫び込みぬ、

「おい、川上に逢ツた御客だよ、その端近は失敬だ、いさまづ書院口、使者の間へ御案内申せし」

聲を残して自己は徳利と共に走せ出しぬ、

闇を分け行く大海原の難船に湊の燈火見ゆる心地して、さては汐入村の二十三番地、函嶺で聞き

し三人苦學の宿は此家かと、よろず初心の吉田雄藏なほさらに嬉しく、かたぶきかゝる門の扉を打落さじと、頭を縮め身を屈めて入れば、むかし何者の住み荒しける跡にや、ふるく黒すみたる草屋根ところ／＼破れて、馴れぬ手業に新薬を補ひし軒の下には、ふしぎや眞白の貝殻を山の如く積み上げて、四邊の草の葉も蝶の白粉灑せしに似たるのみか、入口の竹垣に乾したる三枚の蓆さへ、同じ粉に塗れて知らぬ夜目には晒白布とも疑ふべきを、そもや何のためぞと眉顰めながらやう／＼進み入りて、

「御免下さいませ、御免下さい」

聲をも待たで出で迎へしは二十四五の書生、をりしも寫字のまゝ俄に座を起ちけん、無心の手に持てる筆も放さず、なほ残る鼻の穴より煙草の餘煙ふき出して、身も心も輕き目禮の會釋しながら、

「やア君ですか、函嶺で川上に逢うたのは、さアサツと上ツと下さい、なアに井戸は横手にありますが、それに及ばんです、はツ／＼と手拭で、お拂ひなさい、洗ひたての濡足では却ツて塵埃のつく座敷ですから」

いひつゝ笑ちて手を取らんばかりに誘ひしは十疊の一室なりけり、

かりにも十疊敷といへば名聞よけれど、この草屋根の下には此一室の外に疊を敷くべきところなく、しかも其疊は數年以來の古疊やぶれに破れて、歩まば躓きやせん、伏して覘かば奈落の底まで見えやせん、をりくくの坐り相撲に床板の抜けし高低は波濤の如く、煙草の吸殻を落せし痕は星の如く、火鉢を覆せし痕は月の如く、吊ランプを落してアハヤ大事にならんとせし焼痕は陥罪となつて、その上の反古張に踏むべからずと筆太の文字も剛しく、わざとならぬ蟲喰竹の横窓には三脚の机を押並べて、別に一脚の主なきは國に歸りし川上三吉が遺物なりけん、今は新に食卓と變じて皿鉢茶碗の類を積み重ね、押入の襖あけ放ちて其まゝの土用干に夜具蚊帳を晒し、一方の壁には場所きらはす大小の釘を打付けて、古着古帽子古手拭を引掛けたるさま柳原の露店に等しく、さては花に洒落たる乞食の幔幕に均しく、その下に數個の本箱まづ是を當家隨一の寶物として、他日の風雲を掴み電燈を叱咤するの意氣豪懷すべて此うちに籠れり、

吉田雄藏つらく見廻せども、金殿玉樓を夢にも知らぬ目には、さまでの慇懃き心地せぬのみか、いとど却つて頼もしく床しく、慇懃に本籍姓名を名乗りし上、あらためて懐中より川上が恩賜の名刺一枚うやうしげに差出せば、手に取つて思はず笑を含みつゝ、

「なるほど、いやもう御多言に及びません、これで十分よく解りました、僕が乃ち此名刺の宛名

三人のうち倉橋幸藏です」

いひつゝ振り返つて、おのが傍に客ありとも知らず顔なる書見の一人を呼びぬ、

「おい黒田、川上から添書の客だぜ、挨拶せんか、おい黒田」

呼べども更に黙々として應ぜぬ一心不亂の體を倉橋幸藏、氣の毒げに指しながら、

「君、決して氣にかけずにおいて下さい、三人とも皆おとらぬ變物ですが、取わけ、こゝに讀書の木偶人は乃ち黒田健次で、御覽の如き勝手舞ですから、また先刻門前で書院だの使者の間だのと氣狂染みた事をいつた奴が乃ち上田力といふもので、あれはまた天生の滑稽、年が年中を笑ひ通して居る怪物、我黨これを稱して貧乏戎と唱ふる男です、たゞ四人のうちの一人、過日函嶺でお逢ひなすつた川上三吉のみは、やゝ人間らしいもので、學力思想すべての點より三人の兄とも立てゝ居つた位ですが、やはり頑固の一徹者で、我々が二日二夜の諫言を用ひず、何か獨りで大に感ずつて、あの通り突然歸國したのです」

をりしも門外の方より石油の缺徳利ひつさげて、からうす踏むが如くに躍り歸りしは上田力、あわてゝ入口の戸に頼うちつけながら、さらに屈せず天生破鐘の大聲はりあげて、

「いまの客は何うした、まだ山海の珍味を出さずかい」

世上普通の學生は一日たしかに一日の時間あれども、あはれ難行苦學の身には一日たしかに一日の時間なく、その半日をもて衣食を得るの勞働とし、残る半日をもて學びの道に勵みつゝ、しかも勞働に半文を餘すの用なく、修學に片時を惜しむの心あれば、三人わづかに朝夕の飢餓を凌ぐのみなる中へ、草の葉におく露ほどの縁もなき豊後の奥山より、はじめて彷徨ひ來りし年少書生吉田雄藏に、こゝろよく雨露霜雪の宿を貸して粒々辛苦の食を願たんとするも、十年の苦學を捨て、國に歸りし不用の名刺一枚の徳、おもへば川上三吉これぞ正に此徒輩が心服せる先達なるべし、

門外より缺徳利ひツさげて歸り來りし上田力が、天生破鐘の大聲はりあげて山海の珍味々々と呼びしに、はじめて心付きし倉橋幸藏、をりしも今日の炊事役に當りけん、そのまゝ起ちて形ばかりの厨に走せゆき、俄に夕餐の用意がち／＼と響かせしが、やがて机の上に押竝べしを見れば、さらに音ほどもなき茄子の古漬と遣り損ねたる手製の梅干、

「さア君、ともかくも遣つて下さい、しかし御覽の通りの境涯ですから、別に馳走は出来ませ
ン」

いひつゝ、流石に客分の茶碗まづ取つて給仕すれば、例の上田力その傍らより首を差出して、

「えい、倉橋、つまらない世辭をいふな、どうせ馳走は出来んぢやないか、それよりは立派に我黨の説を立て、珍客に珍味なき所以を語らう、時に君、そも／＼君、我輩が斯く粗食に甘んじて豚に似たる境涯を何と思ひますか、これ強ちに質素儉約を旨とするばかりではない、また古來の腐儒が菜根を嚙んで自ら誇るの意でもないです、乃ち我黨の信するところ、凡そ百尺紅塵の巷に飛び出して才子才物と呼べるゝには、固より魚鳥獸類の美食に飽いて腦裡熱火の如きを必要としますが、かの氷の如く冷然たる大觀念を持して、いはゆる盤根錯節の間に肅然たる智者となるには、むしろ一切肉類を避けて生涯數類の菜食に限るです、故に我黨は猪勇の才子となつて晝夜の奔走を世に買はれんよりは、眠象の智者となつて黙々の指頭に其才子を使はんがため、君の如き珍客の時すら既に酸味を帯びたる古茄子と出來損ひの梅干、平生は鹽を嘗め味噌を最上とするの覺悟なくんば、大に困ります、いや、失敬ながら我黨の人とはなれませんな」

いひつゝ、自己まづ箸をあげて食ふこと宛がら俄鬼に似たり、あゝ美味いかな、美味いかな、茶碗の音をきいて俄に坐を動きしは、今の今までは黙々たりし讀書の黒田健次、いよ／＼勝手驕の本性あらはしながら、初對面の挨拶もるとも懇懇の言葉をかけぬ、

「只今上田が申した僂論などに構はず、めしあがって下さい、あれは全體いつもあの様な駄辯を

出づる時こそ色さま／＼に咲き七ふ花の露、あはれ一段の見物なるべし、

満都の學生いづれも夏期の休業とて、たえて久しき故郷の空に一家團樂の快樂をつくし、あるは
隔意なき友垣うちつれて夏しらぬ山水の間に遊び、さては温泉、海水、舟遊、旅行、たま／＼東
京にある者も五體引き伸して午睡の夢を食り、袂すゞしき夕風に吟聲おのづから起る世上に引代
へて、こゝに四人辛苦の膏汗たら／＼、むかしより汐入村の名産と聞えたる胡粉の製造に、積み
上げたる貝殻の山を圍みて、焼くものあれば砕くものあり、搗くもの篩ふもの、搦くもの乾すも
の、おの／＼眞白の粉に塗れて無事に残るは目鼻のみ、全身さながら石灰納屋の狸に似たる哀れ
さを、たゞの一目なりとも見せてやりたし、親兄弟の生血を絞つて酒色の腹を肥す不義の書生
に、また過分の學資おくつて白癡の子を作る父兄の眼に、

萬事に謹慎ふかく温順なる倉橋幸藏、動もすれば人を凌いで豪放なる黒田健次、無器用に生れて
正直一途に呵しき上田力、年少いまだ世事に馴れざる質朴の吉田雄藏、四人おの／＼其性を異に
して修行の道また異なれども、あはれ苦學難行の鐵鎖は茲に斯四人を繋いで同胞の如く、また宛

がら一塊の肉にも似たりけり、
かつて川上三吉が筆になり、今は懐しの形見となつて残る一味の規約にいふ。

◇ 行 狀 規 約 ◇

- 第一、薄志弱行の涙を禁ず、
- 第二、喧嘩口論の怨を禁ず、
- 第三、人間業の風流沙汰を禁ず、
- 第四、無分別の仁義伊達を禁ず、
- 第五、必ず時間を惜しむべし、
- 第六、總て亂暴を謹むべし、
- 第七、言行に人を欺き我を欺くべからず、
- 第八、日夜に身を怠り心を怠るべからず、
- 第九、善を勧め悪を諫むるの外、おのれの性を以て人の性を枉ぐべからず、
- 第十、學を論じ道を講ずるの外、おのれの胸を以て人の胸を度るべからず、

◇家政規約

- 第一、衣食住は寒暑に堪へ飢餓を凌ぎ雨露霜雪にうたれざるをもて限りとす、
- 第二、朝、日出に起き夕は日没をかぎりて總ての業務を廢すべし、
但し夜間の讀書を欲せば晝間の勞働より其石油代を稼ぎおくべし、
- 第三、一家の用を辨するの外、勞働より一錢の餘裕を求むべからず、
但し毎日に六錢を貯蓄して聊か不虞の一端に供ふべし、
- 第四、米鹽は必ず五日間の用意を缺くべからず、
但し米は世間第一等の最上を選んで唯この一事これを王侯貴人に比すべし、以て副食物に吝なるべし、
- 第五、一切すべて茶と酒を禁すべし、
但し酔はんと思はゞ寧ろ睡るべし、渴すれば一抹の鹽を投じて熱湯を飲むべし、
- 第六、魚鳥肉食は月に三度、十日毎にすべし、
但し時價の高下を料りて時日の取捨短縮を考ふべし、
- 第七、湯浴は一週間に一度とし毎朝毎夕四季ともに冷水を以て全身を拭ふべし、

- 第八、薪は運動散步の時間を以て交るゝ隅田川の流木片枝を拾ひあぐべし、
但し炭のみは最上の切炭を購うて常に一個を深く灰に埋めおくべし、
- 第九、必要の新聞三種は必ず缺くべからず、
但し世間はゆる繪入新聞なるものを禁す、將また小説のために新聞を購ふべからず、
- 第十、いかなる珍客長者といへども無用の時間を費し無用の食を供すべからず、

◇追加規約

- 第一、厨の事は順番を以て其日に任すべし、
- 第二、苦學この門にある間は一切世上に婦人なるものありと思ふべからず、
- 第三、疾病は互に看護して師父に事ふるが如くなるべし、
- 第四、月に一回の十五日を以て無禮講を演じ以て平生の屈を伸ぶべし、
- 第五、一家共有の器具を破毀するものは自己の勞働を以て損害賠償の責に任すべし、

◇罰則

罰則は其事實情狀によりて輕重を議すべし、乃ち左の種類とす、

- 第一、一時間蒲團蒸の刑に處す、
- 第二、終日他の奴隸となつて使役せらる、
- 第三、七日間炊事の任に當ること、
- 第四、規定労働の外に三時間の労働を課す、
- 第五、一日一飯に減食す、

以上は川上三吉が立法者となつて起草せしもの、今なほ服膺して日夜これを守れども、豪放黒田健次の如きは、をり／＼蒲團蒸の刑に處せられて苦悶し、滑稽上田力の如きは、しば／＼無器用のために遣り損ねて減食の刑に逢ひ、あはれや半泣きの澁面つくつて亂箸雨の如くに下る牛飲馬食を羨みぬ、

其 四

今日は一家の追加規約第四條にあたりて、月に一回の無禮講を許すの日なれば、あらんかぎりの狂態痴狀をつくして平生の鬱屈を散すべき前、まづ思ふがまゝに駭聲雷を欺いて勇を養ひ置かん

と、四人いづれも眼の黒球とけて流れ出でんまで、さながら死せるが如き枕を並べて前夜ごし朝ごし晝ごしの躰も、やう／＼其日の午後三時とおぼしき頃には、いひ合さねど腹のうち空々寂々となつて等しく目を覺しぬ、飢餓にさへ迫らば、此まゝ荷うて走らるゝとも、さらに夢おどろくまじき石佛、むく／＼と頭をあげて、蟹の如く横さまに這ひ出でて、

「やアお早う」

「お早う」

けふの順番に上田力は井戸端の役目、先登第一に躍り出でて四人の顔を洗ひ身を拭ふべき水、ついでに臺所の水おい來たと骨を惜しませず働けば、新參の吉田雄藏をりしも夜具あげ掃除の番にあたりて、ちびたる箒を手に持ちながら、破疊の上一場の困難を演じ、倉橋幸藏は厨の役、臺所の竈の下に背を丸めて火吹竹に頬をふくらし、三人いづれも俄に忙しき中に黒田健次は幸ひ今日は非番とて、おのれ一人悠々寛々と坐しつゝ煙草の煙を輪に吹きながら、

「おい倉橋、飯は未だか、半熱でも宜いから早くたのむぜ、上田、ついでに縁先へ水を撒いてくれ、涼味は四人平等にうけるのだから、吉田さん、けふの新聞を持って来て下さい」

朝と晝とを兼ねたる會食に、各自したゝかの腹を肥して後、さて今日の無禮講を何にせん、坐

り相撲か立相撲か、腕おし脛おし首ひき枕びき、棒ねちり競走さては亂打亂取、乃至また長に
 氣焰を吐いて大に語らんか、此上なほも寝てくれんかと、評定まち／＼其日も午後の四時を過
 ぎしころ、上田力一人いづこへ行きけん、俄に去つて影なきこと凡そ三十分、やがて門外の方よ
 り例の破鐘聲を張り上げて、からうす踏むが如くに躍り歸りぬ、

「出来た出来た」

無器用者が俄に何を出来しをツたと、いづれも取圍んで聞けば、上田力ます／＼得意然として中
 央に座を占めつゝ、獅子ツ鼻を動かし毛蟲に似たる眉を昂げて語りぬ、

「諸公いたづらに小田原評議の愚に陥るを憐れみ、乃公こゝに一策をめぐらして、幸ひ今夜の月
 舟下遊を試みるの用意すでに整うたりだ、さらに之を解釋していはゞ、墨水の清夜、更闌に兩
 岸の各戸人定まるの後、一葉の舟を水心に浮べて天を仰げば、皎月波を射て金龍をどり、涼風
 衣を吹いて羽客翔らんと欲すだ、況んや綾瀬關屋の蘆葦を隔て、荒川の漁火數點明滅の景を望む
 に於てをやだ、しかし諸君、こゝに僕が豫め後日の物議を防いで置くが、それは他でもない、
 我黨一家の行狀規約第三條に、人間業の風流沙汰を禁ずるとあるは乃ち天地自然の風流沙汰を
 思ふがまゝに取つて樂しめといふ立法者川上の精神だから、決して此明文に衝突しないよ、宜い

か

「おい、おい／＼上田、その議論も分つた、またその快も嘸やと思ふがね、第一我等の境涯で月
 下舟遊の奢費を何うするのだ」

上田力さらに一段いよ／＼肩を怒らして冷かに笑ひながら、

「嗚呼また頼もしからぬ公等の言かな、それほどの事を出来ん上田力と思ふのか、乃ち策という
 たは茲だ、この汐入村の渡舟は向島から千住への近道といふものゝ、元來は鐘淵紡績會社が
 朝夕の職工を渡すために設けたのよ、だから舟は午後十時より翌朝の四時までは不用に屬するこ
 とを乃公かねて窺ひ知るのみか、船頭の老爺が談話好きに附け込んで、いつも隅田川の流れ木屑
 を拾ひに行くたび心安くなつて置いた功むなしからず、先刻とう／＼説き付けて今夜中を無償で
 借り切つた腕前、どんなもんだい、酒はなくとも大土瓶に湯を沸かして鹽氣たツぶりの握飯を用
 意し、がぶ／＼飲んでは又むしや／＼と喰ひ、以て大に觀月の宴、いや觀月の馬食を試みるの
 だ」

無器用に生れて正直一途に遣り損ふことあれども、上田力またなか／＼に侮りがたき奴にぞあり
 ける、三寸の舌頭に渡舟の繩を解き、隅田川の水心に夜ふけ人定まるの後、ころしも秋の望の

夜ならねど夏を忘るゝ観月の宴、否、観月の馬食を張ッて誦ふもの叫ぶもの吟するもの、躍るもの跳ねるもの舞ふもの、さては吼ゆるが如き高談雄辯に四邊の波を驚かし、兩岸戸々の夢を破ッて大に平生の鬱屈を散ぜしが、二升にあまりし鹽氣たツぶりの握飯も、むしやくと喰ひつくして一粒も餘さず、糖味噌の古漬茄子およそ五十個、それさへ痕なく平けて、三たび沸かせし大土瓶の湯も、がぶく〜と飲み盡して底の雫も乾きし後は、さすがの豪傑いづれも疲れ果てゝ、風流韻政こゝに風流陰氣となり、いさや歸らんといふ三人の顔を、例の上田力一人冷かに見返りていふ、

「あゝ俗物々々、食氣を放れると共に歸路を急ぐの醜體、とても語れん、だめだ、さア早く歸ッて夜明の蚊にでも食はれるが宜い、僕は後に残ッて一葉の舟に一身をまかせ、東天わづかに白を呈する墨水の景を見るから」

いひつゝ棹さして汐人村の岸に三人の腰を突き上げ、自己また一人そのまゝ引き返して中流に浮びぬ、花よりも團子、酒なくて何の己れが櫻かなとは古人うまいことを吐し居ッた、我黨に馬食つきて月なんの快あらんだ、悲しむべし上田は近來人間を去ッて仙に近しと、三人等しく大聲に笑ひながら、やがて苦學の巢窟に歸りみれば、やぶれたる門扉は固より怪しむに足らねど、縁端

の雨戸一枚あけ放ちて、外面より差入る月代に泥ふみつけし足の痕あり〜と見えたり、さては曲者ござんなれ、家もあるべきに人もあるべきに、我等が宿に忍び入る奴おのれ遁さじと、黒田健次第一番に躍り上れば、倉橋幸藏吉田雄蔵もろともに飛び込んで、ランプの火を點すや否、廣くもあらぬ家の隅々隅々、机の上下、本箱の中、物の影、いづれを見れども一品の不足なき最後、もしやと心付いて押入の襖あけ放てば南無三寶、四人が晝の苦勞を忘れて極樂の夢結ぶべき大切の道具、蚊帳と蒲團の影もなし、

「どい泥棒々々」

あはれや三人聲を揃へて呼べと叫べど今更に甲斐もなし、中にも黒田健次は涙ぼろ〜と流して破疊を叩きあげつゝ、

「畜生めッ」

五人の女兒ある家には盜賊も其門に入らずといふ世諺を破り、よしや十人二十人の娘持つ家を碎いて押し入るとも、こゝに我等四人かくまで苦學難行の宿に忍び入る奴やある、さては満都いたるところに家庫建ち竝んで夜な〜金銀財寶の呻るを打捨て、細き炊煙の我等が空巢、しかも取るものなさの腹立まぎれに、せめて其日々々の苦勞を忘るゝ第一の道具、夜具蚊帳を掻き集めて

會釋もなく奪ひ去る奴、そもく何處いかなる悪魔ぞ、庭に兩脚すくんで立往生をせざりし不思議さ、門前に苦駄張ツて血糊を吐かざりし不思議さ、おのれ外道め畜生め獐毒め大惡め獄卒め横道め暴戻兇奸言語道斷の奴、たとひ神佛の目に漏れて警察の法網を通るゝとも、我等日人が明日よりの血眼ひツとらへて踏ん殺してくれんと、あまりの無念に腸ちぎれて口惜し涙の大聲に叫びしが、さて叫ぶばかりの外に今更なるの甲斐もなし、ともかくも上田力に事の仔細を知らせんと、黒田健次そのまゝ走り出でて隅田川を見渡せば、あけ放れゆく東天の空の月おちて、ゆうべの雲を名残をしげに吹き分くる夏の朝風は、雑魚の鱗も見ゆる水の鏡に漣たて、關屋の里の青嵐おともなく、綾瀬あたりに綠色の角ぐむ葦の影より、まがふ方なき上田が吟聲かすかに聞ゆるを、黒田健次伸び上りて一期の大音聲を張り上げぬ、

「おウい上田ア、上田ヤイツ」

あゝ俗物めがまた艇に似たる聲を發して、おそれ氣もなく乃公の清興を破り居るわと上田力そのまゝ棹を取ツて葦の蔭より浮び出でて、なほも吟聲やまぬ獨尊の雅致、やがて舟を漕いで岸邊に寄すれば、黒田健次まぢかねて兩手を擧げながら息せはしう、

「おい上田、古今未曾有の珍事、神武以來の大變々々」

「天地なほ寂寞たり、何をか大變といふ」
「大變も大變、大々的の大變、ゆうべ四人の不在中に賊が這入ツた」
さすがの上田、忽ち馬脚をあらはして顔色を變じ、

「なに盜賊、どぞ盜賊、して無事か」

「無事どころか夜具蚊帳一切すべて遣られた」

「え」

叫びさま躍りあがるや否、我から身を捨て、白癡の横仆れ、舷ざんぶと傾いて水煙さつと立ちぬ、

「やあッ落ちた、たゝ助けてくれ」

其 五

四人もろとも聲を揃へて泣けばとて叫べばとて、盗まれたる夜具蚊帳の今こゝへ戻るべき筈なれば、これを一味の不覺不運、さては斯くても盜賊に視はるゝほどの我等、なほいまだ世間普通、たのもしや人間の境涯にありと諦めて、さしあたり今夜よりの用意肝要、いかにして過さんかと

頻りに計策をめぐらしぬ、

たださへ堪へ難き夏の夜の乾蒸に、秋風たつころまでは夜具なくとも、否たとひ夜具ありとて四人いづれも藻脱の殻、天明まで満足に身を纏うて眠るものなければ、まづこれを當分の不用とすれど、さて唯の一夜たりとも無くて叶はぬは蚊帳の恩なり、ましてこれなくて日本一といふ隅田川邊の蚊蚊に責められては、石佛の頭なりとも無事に済むまじき終夜の蚊軍、それも魚鳥肉類の美味に飽いたるものならば知らず、かなしや三年このかた野菜の粗食に育ちて、やうく露命をつなぐ貧血の我等、この上に血を吸はれては生命も覺束なしと、半は笑ひ半は泣いて評議を凝らせしが、さすがは年長の倉橋幸藏、おもむろに坐を進んで一計を案じ出しぬ、

「なアに諸君、心配するに及ばん、紙帳々々、よろしく反故張の紙帳を製して、むしろ破れたる蚊帳よりも安穩に眠るべしだ」

なるほど紙帳、反古張の紙帳、これぞ時に取ツての簡略便法と、俄に冷飯を鍋に投じて糊を煮るものあれば、あらんがぎりの反故を掻き集めて織を伸すもの、さては鉛筆を取ツて枚數いくばくの答案に苦しむもの、秃筆を連ねて即坐の刷毛を製するもの、四人いづれも必死となツて其日一日を費し、午後の四時頃やうく爰に一張の紙帳を拵へぬ、しかも破るゝを怖れて、上は一枚

張なれど四方は三枚の厚張となしぬ、

さア出来た、いざや出来したり、天晴の手際、まことに重寶の上なしと互の拍手喝采、あまりの嬉しさに其日は宵寝の議を決し、四人いづれも丸裸となツて四方より窺ひつゝ、

「靜に靜に、うつゝの夢にも紙で張ツた蚊帳といふことを忘るべからず、靜に靜に、ソツと這入るんだ、あわてゝ破るものは其破損を補うた上、なほ保安條例に依ツて紙帳外三尺の退去を命ずるから、おのおの氣をつけて音さゝぬほど靜に謹んで、而して後もぐり込むべし」

倉橋幸藏が指圖に三人もろとも頭を縮め肩を測め五體を屈めて恐るゝ這ひ込めば、かなしや、こゝも同じ疊の上、たゞ四方を反故紙に圍うたるのみか、をりしも今夜は取別けての蒸暑さに、しかも三枚の厚張なソとして堪るべき、膏汗たら／＼と流れて温室に入るが如し、

「あゝ苦しい暑い、この様子では夜半の艱苦が思ひやられる、あゝ苦しい、あゝ暑い」

金殿玉樓の富貴に育ちて、晝は三度の飯食む口許さへ恥づかしと思ひ給ふ令嬢達も、さすがに夏の夜は枕を外し夜具ふみぬいて、姫御前のあられもない御寝姿、あさましきところまで晒し給ふときくものを、ましてやこれは血氣さかんの荒男四人、しかも終日の疲勞に前後を忘れて、鬼をも搏つべき大の手足を東西南北に振り舞はす猛勢なソとして堪るべき、素人細工の反故張に拵へ

たる紙張ベリ〜と破れて、中にも上田力の如きは前夜の無念なほ腸に染みけん、その盜賊を見付けて引捕へんと追ひ行く夢うつゝ、ヤツと叫ぶ聲もろとも寢惚けて跳ね起き、忽ち紙帳の外へ半身を突き出したる一期の失策に、藪藪どころか、牛馬も遣ひ込むべき大穴あけて再び用に立たねば、これを丸めて翌日の屑屋に賣りし代價やう〜二錢六厘、

終日四人の可憐ら骨折つて仕上げたる紙帳も、わづか一夜のうちに屑屋の籠へ飛び行きしかば、いざやまた今夜より蚊の責苦、あゝ何の防策かある、おの〜満腔の智慧を絞り出すべしといへば、上田力すすみ出でて例の肩を怒らしつゝ、

「倉橋が名案の紙帳めちや〜にした僕だから、こゝは一番僕が引受けて、第二の工夫をしよう、しかし、僕は四人總掛りで拵へたものを一人の失策で破るやうな拙劣はしない、細工は流々、おほん、仕上げを御覽じろだ、僕が一人けふの二時間も費せば宜いから、諸君よろしく心を安んじて平生の業につくべしだ」

いひつゝ鼻を蠢かして立上れば、三人いづれも其顔を守りて、

「おい上田、お志は殊勝だが實際うまく出来るかね、やり損へば四人とも〜大切の生血を吸はれるのだから、責任は重いぜ、宜いか、大丈夫か」

「へん大船に乗つたと思召せだ、しかも數萬噸の甲鐵艦に」

さらばまづ上田に任せん、我黨隨一の無器用ながら天生の親切眞實、をり〜人の意表に出でて實用の妙に適することありと、いづれも其日の課業にかゝりて午後四時をすぎしころとなれば、上田力一人俄に起つて縁側の雨戸二枚を外し、これを連ねて四隅に穴をあけ、その穴に太き繩四筋を通し天井の梁に引結べば、一間四方の吊板ぶら〜と宙に掛りし其下に、大摺鉢を置いて青杉の葉を山の如く盛り上げぬ、

「どうだ諸君、あの吊板の上に丸裸となつて、ゆら〜と揺られながら眠れば、自然に空氣も通らうて炎暑を忘るゝばかりか、第一に蚤の責苦を免るゝ道理だ、また下から大摺鉢で青杉をくすばらせば、これぞ蚊遣たく終夜の煙、妙案だらう、奇策だらう、前夜の僕の如き失策を遣るものは遣り次第、敢て尤めない代りには刑罰忽ち報うて、どつと下へおつこの名案、實に諸事間然するところなしたね、あゝ我ながら奇妙きてれつ」

「おい〜上田、實に近來の名案だが、青杉で蚊をくすべ出すと共に、人間まで終夜くすべられ

ては堪らないね」

「えい、そこが乃ち物の辛抱だ、それ位の辛抱なくて我黨といはれるものか、どうせ世間なみの

境涯ぢやアない、さアいづれも隠せず登ツたり、登ツたり」
 いひつゝ自己まづ飛び乗れば五體ゆらくとして波浪に漂ふが如し、
 「なるほど、こいつはチトゆりすぎるぞ、しかし大丈夫だ、甲鐵艦、甲鐵艦」
 さても其日の夕暮より四人もろとも一間四方の吊板に乗って、互に抱き合ひつゝ手足を伸ばせば、
 下より青杉の煙むらくと湧くが如くに立昇つて、いつしか朦朧たる白煙の中に包まれながら、
 咽せて苦しむ悲鳴しきりに聞えぬ、
 「ヤア堪らんぞ堪らんぞ、え、誰だ念佛を唱へたのは」

共 六

倉橋幸藏が名案、反故張の紙帳も其功を奏せず、わづか一夜のうちに破れて屑屋の籠に入り、上
 田力が奇策、吊板の飛乗は蚊よりも人間まづ青杉の煙に咽せて遁げ出し、あたら二日の骨折さら
 に何の甲斐なき後は、またもや四人こゝに額をあつめて評議まぢく、
 「どうだ、もう此上の妙計は出ないかね」
 「いや妙計は眞平御免だ、諸君が妙計よりも、むしろ労働時間を増して四人必死に働くといふ拙

策の方が勝だぜ、二圓足らずの金さへ産み出せば一張の古蚊帳は忽ち手に入るから」
 「しかし、それまでの間が堪らない」
 「なアに、一日五十錢の稼ぎ出しと定めて都合四日、その間は順番に一人が大團扇で三人を煽ぎ
 通すのさ」
 「なるほど、それが宜い、つまり四人同時の苦難を一夜一人づつに振り分けてゆくのだね」
 「さうよ、それについて思ひ出すのは川上だ、今ごろは故郷の山間で何をして居るだらう、なん
 と思つてるだらう、全體あの男は何事にも頑として自信獨行の外、かりにも他人に頼るといふこ
 との嫌ひな性質だが、さて我黨一家焦眉の急に逢へば、忽ち飛び出して何處から拾ってくるか、
 三圓五圓乃至十圓位までは、すぐに摺んで来たのが實に不思議だ」
 「いや、そこが乃ち彼奴川上三吉よ、彼奴が同國の先輩で當時官邊の好いところに居る奴が澤山
 あつて、しかも後進の彼奴が未來に頗る服して居つたさうだ、だから川上一身の學資位は何でも
 ないが、さてまた本尊あの通りの奇癖頑固で、わが一身の修行には他人より鏝一文も仰がないと
 いふ主義だ」
 をりしも郵便と叫ぶ聲に、一人走せ出でて受取れば、諺にいふ風聞に影とやら、川上三吉より

發せし一封の書狀なりける、披き見れば例の筆勢、墨痕飛んで逸する如し、

分袖以來なほ日は浅く候へども、御なつかしさのほどは十年にも相まさり候こと決して當坐の辯茶羅にあらず、この處よろしく御察し下さるべく候、
歸國の途上、函根にて名刺添附の年少生、いかゞ致し候や、諸君の宏量高義、定めし御同舟の榮にあづかり居り候事と存じ候、此上とも精々、御肝煎のほど更めて頼み入り候、十年の苦學ろく／＼に人らしき屁も得ひらず、尻をすぼめて歸國いたし候小生の事故、昨今しきりに郷黨の笑はれものと相成居候へども、依然たる山水の明媚は舊によつて嬉しく、將また夕顔棚の下涼みに變らぬ月を眺めて獨り心を慰め居候、爾後讀書は大の禁物、なほ此上ます／＼茫然として暮し候へども、やがて山瘦せ水涸るゝ秋にも相成候はゞ、聊か坐を起つて鹿笛に恥り申すべく、また三冬の嚴寒にも相成候はゞ雪を蹴つて猪狩に従事いたすべき覺悟に御坐候、あゝ燈下に孜々たる昨日の書生、今日は忽ち獵夫となつて岩を枕とし谷を宿といはし候事、そも／＼人生の何と申すべきや憚りながら御一考下さるべく候、ついでには獵り得たる獸皮四枚これを諸君の四坐として必ず其節に御送付可申上候間、三吉が寸志もし防寒

の一端とも相成候はゞ、いよ／＼御勉學のほど今より祈りまひらせ候、時下なほ殘暑の候、偏に諸君の御保養專一わけて念じ入候、

山中無曆日

諸 兄 貴 下

川 上 三 吉

四人いづれも今更に懐しき心地しつゝ、先を争うて讀み下せし後、またもや暫し彼がことのみ談話の種となりぬ、

「ねエ、この手紙の文面によると、いよ／＼川上は獵師になる覺悟だぜ、實に惜しむべしだ、いはば白面黃嘴の書生わづかに鼻垂おくりの模倣學問して威張る世の中に、實際あれだけの學力思想を入しれぬ山間に埋めて、十年の苦學難行むなしく猪猿を捕るためとは眞に惜しむべきだな、人生あはれむべきの極だ、川上が心中おもひやらるゝ、まして今は郷黨の笑はれものとなつて、隣村の草に育つた杳右衛門が口の端にかゝり、背門の芋端の甚五平に指さゝれながら、たゞ山水ばかり舊に依つて我を迎ふといふの一段、僕は殆ど讀むに堪へん、境涯おもひやらるゝし、いひつゝ目をしばたゝくは例の上田力なり、されどこゝに年長の倉橋幸藏は、また別に一個の見

解を附していふ、

「なアに、君は川上の文意を取違へて居るのだ、その癡黨の物笑ひとなつて夕顔棚の下涼みに悠々寛々たるところ、むしろ彼が當時の得意で、十年苦學の結果を獵師となつて猪猿に投ずるところ、寧ろ彼が心に誇る一團の觀念さ、しかし川上が今の觀念は一種の哲學思想より起つた悲哀的の狂人、文明的の仙人、乃至また一方よりは慷慨悲憤の反動力ともいふべきものだね、だから今日の時勢は長く彼をして山間に潜むを許さない、乃ち流石の川上も夜ふけ入定まつて萬籟聞たるの時、つらく往事を回顧して前途を思はゞ、取りも直さず軍馬の音をきいて鉦を叩き破つた熊谷殿の法體で、今日行爲の一身を、此まゝ山間に葬るは惜しいといふ念が出る、さて其惜しい念といふ奴が忽ち彼を提げて、やがてまた遠からず紅塵百尺のうちに投げ出すであらうよ、故に僕は必ず再び都門に於て川上に逢ふべきものと信じて居るのだ、唯こゝに彼がため悲しむは、一朝あやまつて仙人となつた間に、他日さすがの川上も時勢に後れしの歎あらんかと思ふのみだ」

二人が物語りに引代へて黒田健次は笑を含みながら、

「よせ、あれほど我々が涙と共に引止めた苦諫を容れず、決然と袖を拂うて山に歸つた川上だもの、なんの容易に再び出るものか、また上田のやうに女ゝしい愚痴を滾したつて何の役に立

つものか、それよりは壯快なる返書を認めて彼が心を慰め、ます／＼彼が觀念を固め、以て彼を山間に大成することを却つて眞の友誼だ、死んだものに美食を供せんよりは一片の念佛いへとは茲の事だ」

以上三人の言葉を謹んで聞くは新參の吉田雄藏なりけり、川上三吉が郵書について四人いづれも見解を異にし、果はこゝに一場の議論を起しつゝ、連名同一の返書は互に意を枉げて親友に對ふの禮にあらずと決せしかば、おの／＼別に筆を採つて思ふところを認め、これを一封に投じて送りぬ、

さても三吉が山里ふかき燈火の下に披いて何と讀むらん、筆により文によりて性質の一端をも思ひ分けつゝ過ぎ越し方に引合はせ、行末に照らして未來の判斷を弄ぶも、また人なき夜半の興なるべし、

拜啓、殘暑いまだ猖獗の時下いよ／＼御壯健のよし大賀これに過ぎず候へども、申さば折角みがきあげし珠玉を又もや草間に埋められ候、目下の御境涯、また御心中うたゝ御氣の毒の心地いたし殆ど多讀に不堪候、ついでには此處なるとか御工夫を願はされ候上、再び御上京の

道も無御坐候や折返して申上候外は、萬事これまで御承知の小生が愚情を思ひ合され一切御推察のほど念じ入候、

川 上 兄 案 下

上 田 力

御書いち／＼歸去來の詩を讀むが如く近來いかにも面白く拜見いたし候、さりながら今日の五柳先生いつまで山にあるを許さずとは豫てより小生の郷見、必ず他日また都門に謁を賜ふの事あるべしと心中ひそかに羨しみ居り候へども、其間に駿馬しば／＼憩うて竟に牛の歩みに後れんかと唯この一事のみ遺憾に存じ候、

倉 橋 幸 藏

川 上 賢 兄 貴 下

やるべし／＼大にやるべし、治世いたづらに十年の讀書なんの功がある、もし健次をして知らるゝ如き家事系統の煩と世俗係累の務なくンば、正に君を逐うて走るの人、否、或は君に先ん

じて獵夫となるもの、こゝに空しく君が書を読んで羨望に堪へず、たゞ他日賜ふの獸皮によつて僅に自ら慰めんのみ、

黒 田 健 次

川 上 足 下

諸兄の紙末について申上候、はからざる御縁に下され候御名刺一葉は、今なほ御恩に浴して日夜ありがたき事に存奉候、時下残暑の砌に御坐候へば只管御保養專一のり上候、

吉 田 雄 藏

川 上 三 吉 様 侍 史

當 五 世 男 人 富 四人が筆のまに／＼心さま／＼、かきあつめて一封に投ぜし後は、一場の議論も痕なく絶えて互に顔を見合はせつゝ、なんのこつたい馬鹿々々しいと笑ふ折しも、ガラ／＼と人車の音して門前にとどまりぬ、はて不思議、そもや我黨を訪ふほどの男に足なき奴はと、いづれも眉を蹙めて耳敏つる門邊より女の優しき聲、

「こちらに、あの上田様とおツしやる方は、いらつしやいませんか」
 すでに社會といひ世間といふ、されば類を避け群を放れて自ら孤立獨居するもの、固より文明の世に反いて人間本來の性にあらねども、青年こゝに志を立て、只管ら學に嚮ふの途上なるの暇あつて自己を枉ぐるの交際上手とならん、知識の交換と稱し學業の勵精と唱ふる名は實に美なれども、相似たるの白面黄口いたづらに作うて何の用かある、進んで千百の握手せんよりは退いて一卷の書を講ずるに如かず、乃至また書生の友多きは學の勘きを見るべく、縮緬の兵古帯と常に帽子の新しきとは腸の古く腐りたるを知るべく、はやく市井に通じて巧みに言辭の洒落なるは成業の覺束なきを證すべし、されば廣く世に交りて事を結ぶは家をなし身を立つるの後にあり、學問の途上にあるものは須らく世に反いて野暮たるべく不意氣たるべく、まして苦學難行の我黨は飽くまで人に笑はれ人に疎んぜられて、たゞ一意専心おのれを忘るべからずとは、川上三吉以來こゝにこの徒輩が平生の持論とぞ聞えぬ、

されば四人もろとも當世一個の別世界を作りて、おのゝ志を達し身を立つるまでは、訪ふべき友もなく、訪はるゝ人もなく、一切すべて世を隔てながらも、元來これ仙を學ぶにあらねば我より味噌醬油の通路をあけて、わづかに門前の雀羅を破る寂寞の草叢へ、いぶかしや定紋黒みが

きの人車こゝを門違ひとも思はず、しかも入り来る美人は年のころ十七八、さては九にもならんか、二十歳に近き花の色香は咲けども、まだ鹽ふまぬ恥づかしげの風情どころか浮世に遠しとは、誰が目にも見ゆる一段なほさら嬉しく尊く、文金の高島田を結びかへし蝶々あらたに今日の艶を持たして、薩摩上布の白帷子かすかに肌著の紅を漏らすこと宛ら黄金佛に薄絹かけて拜むが如く、臥龍の紋博多これを當世の繡珍にせざるところ得もいはれぬ品あり、情も自然にふくみて罪とならぬ今が女の千兩萬々兩、腐れ儒者が蓮歩と吐せし足の運び優しう戸口に腰をかゞめて、そもや四人のうちの誰を訪ふらんと思へば、醜男無器用第一の上田力なりけり、それと聞くより上田は忽ち逆上して、さらぬも呵しき面上ぼつと黒みがかかりし茜の色、唯もちゝとして怒るが如く泣くが如き背後より、例の黒田健次ビリリと髯を捻つて突き出せば、よろゝとしながら今は通れぬ絶體絶命、わざと勇を鼓して枯木の如き仁王立、
 「僕を、僕をお呼びなすつたは君、足下、いや和女ですか、僕が、僕が上田です、力といふは名です僕の」

「おや上田さん、お久しう御座ひます、まことに久しう御目に」
 「やア僕は、和女は全體なくなんです久しいとは、僕は上田です、力ですが和女、おい黒田、倉

橋、吉田、皆きてくれ、僕は此婦人を知らんのだ、實に困る、助けてくれ、ぼ、僕を、
美人おもはずホ、と笑ひしが、果は堪へ兼ねて倒るゝ如く兩手を胸邊にあててしまふ笑聲を忍んで苦しむ風情に上田力いよゝ満身の不平、逃げ入らんとすれば背後に黒田健次が大手ひろげて再び突き戻さんと待ち構ふる勢ひ、進退こゝに谷ッて哀れや立往生の額口より膏汗たらゝと流しぬ、

元來の無器用なれど自然の滑稽を含んで、うまれつきの醜男なれど滾るゝばかりの愛敬を持ち、しかも大力大兵さながら今戸焼の達磨を見る如く、心は正直一途の一本立、をりゝ凡俗を驚かして、天真爛漫どこやら、古壯士の佛ありといはるゝ男ながら、女にかけては物も得言はぬ大の臆病弱蟲、されば男女ともに肩揚おろさぬ大人の多き世の中にめづらしや、今年二十三の曉まで夢にも紅粉の香を知らず、我また知るを願はぬ木強漢上田力が面前へ、まばゆきほどの美人わざゝ訪ひ來し時の狼狽あはれ何に譬へん、進退こゝに谷ッて殆ど泣聲しぼり出せしかど、さてその美人の名を富田よし子と聞いて後、やうゝ兩眼の瞳を定めて本心に立返りけん、俄に言葉を改め身も軽く挨拶して、悠々と座に誘ひし上田の振舞さても訝しやと、倉橋黒田吉田の三人をも重りつゝ裏所口より耳を欬てぬ、

されど上田が頑として色香もなき一徹の無口に、美人いよゝ恥を含んで頭を得あげず、たゞ羞俯いて丹花の唇端より洩るゝ聲、それさへ豫て用意の筋を失ひけん、をりゝ亂れて前後に迷ふ初心の風情、さらに訪ひつ訪はれし仔細は聞えねど、互の心に大方の會得しけん、やがて手持無沙汰に遁ぐるが如く立歸る美人の背後より、とめもせず追ひ出すが如き上田の武骨さ、
「やア失敬しました」

たゞこれのみぞ最後の言葉なりける、
いぶかしの美人が戸口を出でて、まぢうけし門前の人車ガラゝと音を飛ばすや否、黒田健次、裏所口より躍り出でて上田が腰骨に引組み、どツと投げ伏せて其背に跨がりながら、
「畜生、この畜生、白状せい、今の美人どこから來た、白状しろ」
年長謹慎の倉橋幸藏も、をりから時に取ツての慥鬱はらしとや思ひけん、健次に力を添へて諸共に上田を押へつゝ、

「油斷大敵、始めの狼狽に引替へて、竟に馬脚を現し喃々たる私語低聲いよゝ許すべからずだ、やア吉田その押入から蒲團を出したり、家憲に依ツて蒲團蒸の刑、何、なんだ蒲團は此間の泥棒に南無三、こいつは困ツた」

上田は面にも似合はぬ無官の大夫、敦盛然たる苦しの息を吐いて、須磨の浦ならねど背後は古壁の山を負ひ、背上には二人の熊谷丹次直實、前には破れ疊の波のうね／＼額に押しつけられて、「あゝ苦しい、息が切れる、實に野蠻の暴政だ、しばらく僕に言論の自由を、いや白状する、申し上げます」

上田力は作州津山在の生産、家は世々土地の名家にて里正を勤めしかば、明治の初年、誤つて父が一朝の投機に産を傾けしかど、さすがに舊き軒端を蜘蛛の巣にも張らせず、なほ残る田畑の徳は十人口ゆたかの活計に、むかしの餘波をとめて結局この世を易く送りしが、母は力を産みし産後の病苦に死し、父さへ病んで果敢なくなりし後には孤兒の力たゞ一人、しかも三歳の小兒とて伯父にあたれるものが總ての後見、その家屋敷も田畑も賣つて黄金に代へし上、力もろとも自己が家に引取つて我子の弟分に育てしが、七八歳のころより悪太郎の名を恣にして近所合壁を驚かし、餓鬼大將の振舞をり／＼群童を傷つけてはや十三の曉には手に餘つたる亂暴狼籍、十六の秋風に木葉もろとも故郷を散り失せて東京に上り、さらに書を飛ばして我身につける財産を月々の學費に取りしが、やう／＼二年越し、あはせて二百餘圓の後は、俄に送金の道たえ

しも道理、いつしか悉く伯父が子の所有となつて、あはれや三千餘圓の父が遺産は水の泡とぞ消えぬ、養育の恩はあれども伯父甥の間、出奔の過誤はあれども學問修行のため、かつは月に十圓内外の學費、これを父が遺産に取れば、すぎし多年の星霜なほも其後の融通、その利分のみにも餘金あるべきを、わづかに二年ごし二百餘圓の外は、悉く奪つて自己が所有とせる酷薄殘忍、よしや法廷に訴へて争はずとも、せめては立歸つて伯父の面前に悲憤の聲をあぐべき無念も心外も、天性無慾の上田力が心には更に何の仔細なく、えゝまゝよ、あかの他人にさへ生命とらるゝ奴もある世の中、あれほどの金を縁者に呉れて惜しからじ、我は我だけの腕一本、いさやこれより改めて世に立たんと、さてこそ斯くは苦學難行の爲人、おもへば天晴れ當世に多からぬ男なりけり、いはゞこれほど無慾の男、しかも變物の上田が許へ、わざ／＼訪ひ來し花の姿の令嬢さても不思議と責め問へば、やう／＼に口を開いていふ、我かつて故郷の悪太郎たりし十四の頃、土地の郡長に富田正次と云へるものゝ一人娘よし子とやら、十歳の學校歸りに誤つて川へ落ち込み、すでに流れて死せんとせしを助けしかば、親なる郡長いたく我を恩として常に愛せられしも、我出奔

の頃は郡長また轉じて或縣の書記官となれるよし、數ふれば茲に七八年、その親ならば一目に知るべきも、その娘は當時十歳の少女なるとして今の姿を知るべき、されば富田よし子といへる名に始めて心付きしほどの我、さらに他の仔細なしとぞ語りぬ、

かくて其後、よし子が父の富田正次より頻りに書を寄せて招きしかば、上田も流石に悪太郎の幼時なつかしく、たえて久しき故郷の空も戀しく、それやこれやを語つて慰めんには幸ひの人物と、我も思ひ友にもすゝめられて、さらばとて帯ねゆく姿は今の身に取つて第一の晴衣なれど、竹棹の先に引掛けて隅田川の流水に洗ひ晒せし單衣、やう／＼垢と汗との臭氣を抜きしの中に、色も模様も白く褪め果てたる中より、まツくろの面と手足を現しながら、をりしも殘暑の炎天堪へ難しとて、頭に大の蓮の葉をいただきつゝ新調の帽子に誇り、荷ふが如きステツキを振り舞はして、からうす踏むが如き例の無様に歩み出す風情、往來の人も思はず足をとどめて指さし笑ひ、巷の犬も化物と見て頻りに吠え立つれば、上田力ます／＼得意となつて頭上の蓮の葉に小手をかけつゝ、しづかに振り返つて冷かに吹きぬ、あゝ俗物俗物、いッその事に蓮の花一輪を挿めば好かつた、

日本橋區濱町一丁目とのみにて番地を忘れたれど、米屋薪屋人車の帳場さては差配をたづねて問

ふまでもなく、乃至また辻の交番所を煩はすまでもなく、富田正次といへば忽ち知るべき雅俗折衷の門構へ、しかも遺水の乾かぬ飛石傳ひに、千家の待合めいたる玄關口より例の上田が會釋もなく破鐘の聲を響かして、

「たのもう」

聲に驚いて取次に出でたるは十四五の少女、みあぐれば大兵肥滿の醜男が洗ひさらした浴衣を纏うて、足にも指も踵も土に食み出でたる麻裏草履、頭には半面かくるゝばかりの蓮の葉をいたゞき、大のステツキを突き鳴らして仁王の如く立つたる有様、さては此ごろ傳へきく餓鬼道の壯士とやらか、さもなくば乞食書生の合力だのみと思ひけん、一度さげし手と額を口惜しげに振り上げて兩の頬邊ぶツと膨らしつゝ、

「はい、どちらからの御使者です、旦那様は御不在で御座います、もし御宅でも書生さんには一切お逢ひなさいませんから」

上田力きよろ／＼四邊みまはせし眼光の最後を、ぐツと小女の顔に呉れて睨み付けぬ、
「主人が不在なら不在で宜いが、たび／＼手紙で来いといふから来てやつた本人の僕を、どこからの使者とは其方、頗る失敬な女だな、主人が歸つたら然う言へ、汐人村の上田力といふ男が遠

路わざく尊臨しましたと、ちよつ、つまらない、また俗物のために貴重時間を費したし、腹立まぎれのステツキに力を入れ、掃き清めたる玄關前の土を跳ね飛ばしつゝ、山の如き兩肩ゆり動かして立出でしが、およそ半町あまり行き過ぎし背後より、一人の下僕走せ來つて頻りに自己額を叩きながら、

「え、貴方が上田様で在らっしゃいますか、只今は實は失禮申し上げました、何分ぼつと出の田舎女で御座いますから、どうか御免あそばして、へい、なるほど、へい、いや御尤も様でしかし全く主人の存じませぬこと、恐れ入りますが、どうか私に免じて」

しきりに袖を捉へて引き戻せば、上田力やう／＼振り返つて首肯しながら、さもさうづ、むゝさもありなるといふ顔色、悠々然として立歸りぬ、

玄關のうちに帽子掛はあれども、いやしき人工を施さざる天真清淨の我帽子、あやまつて破損の恐れありと、慈姑の取手に似たる草を捻へながら、案内に引かれて進み入る後には、土に塗れし兩の足痕べた／＼と印して、設けの客間に通るや否や會釋もなく大兵の白髯を据うれば、皮蒲團ぎゆうど泣いて満面を皺めぬ、

待つ間ほどなく入り來りしは主人の富田正次、五十前後の額際や、禿げて横鬚に霜を降らせつ

ゝ、八字髭のみ黒く艶かに壯年を欺く顔色、しかも分別ふかき眼の光に世辭の愛敬を浮べて、身と共に聲は重けれど語る筋は軽く洒落れたり、

「いや、これは久しい、わづか七八年の間に、見事な丈夫にお成りでしたな」

上田力さすがに感勸の頭を下ぐれど、言葉は例の淡白大聲、

「御機嫌よろしう、國に居る時分は、いつも出まして、はア御懇親を」

「なアに、なんの世話どころか、まだ御幼年で十分お禮の仕様もなかつたのが遺憾です、御存じの通り、私が郡長から隣縣の書記官に轉じた節、ちよつと思惑があつて、わざと使者を差上げたところ、その前日に足下が出奔せられたさうだ、それから私はまた内務省へ轉じて三年ほど役人をしました、人間爲吏亦風流とは十年前の役人で、いやもう今日は人生さらに役人となる勿れだ、去年の春、斷然辭職、今では民間の實業にかゝつて、ある會社に勤めますが、さて不東の娘も入らしう成長するにつけ、全體こいつは幼少の時に死すべき女と、いつも足下のことを思ひ出すのです、しかし居所も分らず、また國の御宅へ聞き合はしても返事がないから、いろ／＼心を探ねて居つたところ、私の家へ出入するものの兄が巡査で、千住警察に勤務して居るを幸ひ、もしやと話してから三日目に、岡山縣美作の人で上田力といふは管内汐入村にあると言つて來まし

た、そこで先づ取敢ず汝が生命の恩人だからツて無理に娘を伺はせたのです、しかし其節は何だか大變に御不興の様だと承ツた」

いひつゝカラ／＼と笑うて手を打鳴らし、下婢を呼んで振り返りながら、

「嬢に來いと言へ、上田様が來なすツたから、ついでに何か美味しい食物の用意せい」

一郷に持て餘されし餓鬼大將の面影どこやらに残りて、ことし二十三歳しかも生來醜男なれど今なほ胸白めいたる愛敬の上田力、ましてや嚙昔わが娘の生命を救はれし目よりは、一入さらに懐しく面白き心地して、主人の富田正次いよ／＼膝を進めぬ、

「いやもう斯うして、お目にかゝる上は、また幼時の通り、をり／＼ちやアない絶えず遊びに來て下さい、しかし目下は何を御勉強ですね、過日、娘が伺ツて歸ツた節、なほ外に二三人の方が居らるゝやう聞きましたか」

「さうです、實は四人の同志相集ツて苦學難行の巢を構へて居るのです、まづ倉橋幸藏といふのが年長で、これは越後の生産、かつて或法律學校の卒業生中、優等の位置を占めた者ですが、なほ五箇年獨學の目的で最後は新聞記者といふ志願です、次は大和の者で黒田健次、これは第一高等學校を卒業して、大學に及ぶの際あやまつて放蕩の天罰、たちどころに學資の切れた奴ですか

ら、前途は鬼になるか佛になるか自體の分らぬ怪物です、その次は乃ち御覽の通りの上田力、これまた茫々たる洋上の一葉舟、うまく港が見付かれれば宜い人物で、四人目は吉田雄藏といふ大分縣の少年、やう／＼近來上京したばかりの初學生です、以上四人の外に、我々が兄弟とも仰ぐべき川上三吉といふ男こそ、實に才學雙美、しかも天生の智略と度量とを備へて、いはゞ竟に當世の大物となるべき者でしたが、惜しいかな、俄に厭世的の狂となつて十年の苦學を一朝に抛ち、この夏の中漕ごる飄然として故郷の山間に歸りました、郷里は紀州の熊野在で、爾後さらに讀書を廢し、生涯を猪猿の獵師に送るといふ書信あつたは、つい此間の事です」

いひつゝ咽喉の乾きしまゝ猿臂を伸ばして汲み出せる茗茶一碗ぐつと飲み乾せば、南無三寶、わが膝前には別にまた一碗の我分あり、これは失敬といひながら再び自己の分を取上げて、

「實に今年の残暑は堪らん、堪りませんな咽喉が渴して」

無器用者が先づ第一の失敗を演じて、その失敗を誤魔化さんとする面色の呵しさ、小田の蛙の啼き損ねたるが如し、

主人の富田正次ます／＼興に入りて、今更に上田が顔を、しみ／＼と打守りながら、

「それは諸君いづれも壯だ、感服の至極だ、わけてその川上とやらいふ人物、なか／＼惜しいも

ンですな」

「惜しいですとも、いはゆる名玉を草に埋むる比類、實に惜しいです、我々は殆ど師父を失ふの感で」

「なるほど、さうでせう、しかし、その川上を再び山間より引き出す工夫はないかな、友誼上、残りの諸君が責任として」

「無論ですが、それについては三人とも意見を異にして居ますから、當分どうも至急に運ばないです」

をりしも背後よりソヨ／＼と送りくる風に、上田は心地よげに目を細くして肩を動かしながら、

「あゝ涼しい、俄に涼風が來ましたな」

「なアに當家は別して暑いですが、足下の背後に娘が居るのです」

上田力さてはと驚いて振り返れば、いつの程にや主人の愛嬢よし子が一入の美を飾りつゝ、深草團扇もて靜に煽ぎ立てぬ、

「やアこれは失敬、多罪々々、いや多謝々々」

うろたへて身を捻る機運に、あはれや大兵の白髯つるりと皮蒲團を迂りて、疊の上に半身を喰み

出せし風情いよ／＼呵しけれど、よし子は更に慇懃の體、しとやかに品をつくりて聲さへ優しう、
「よく入らツしやいました、先刻から、御挨拶を申し上げようと存じましたが、お談話中ゆゑ」
「いえ何、なんの、はアさうです、いや、さうですか、なるほど、はア、失敬々々」
出放題の言葉に、やう／＼一方を切り抜けて此方に對へば、またいつの程にや山海の珍味うづたかく眼前に現れて、はや主人がすゝむるビールの大杯、

「やア驚いた、どうも困るな」

背後よりは美人が送る涼しい風、しかもまだ浮世の色に汚れぬ清淨無垢の少女が心の深草團扇にあふがれ、眼前には山海の珍味、しかも本組にかゝりし手際千兩の料理を押し附けられ、いやしくも男子この夾撃に逢うては席上の一死、固より生命を塵埃の輕きに比すべきなれど、こゝに天生變物の上田力たゞ一人、うろ／＼俄に狼狽ふる眞正面より、主人の富田正次が頻りにすゝむるビールの大杯、あゝ情ないやら嬉しいやら、これは困ツた、美衣美食は我黨第一の禁物、こいつは驚いた、やゝ困ツた困ツたと呟くうちに、會釋もなき珍味佳肴の甘匂ふんと鼻を衝いて、あはれや數年以來の野菜腹に染み渡れば、五臟六腑ぎうと忽ち泣く音を立つる遺る瀬なさ、えゝ堪らぬ、まゝのかはと受けし一杯二杯また三杯、元來上田先生まゐらぬ口でもなければ、いつしか

馬脚をあらはして大瓶三四本からり愛とあけしが、なほ片手にコツブを放さず片手に箸を放さず、いよ／＼魂魄を膺下丹田に落ち付けて飲むほどに喰ふほどに、其日も竟に夜となりぬ、主人の正次から／＼と笑ひながら、

「上田さん、始めは處女の如く後は脱兎のお手際、なか／＼いけるね」

「なアに窮鼠却ツて猫を噛むと一般、たゞ折角の主人公が芳志、これを空しうせざらんがために斯く仕合せ、あは／＼／＼いや實に、もう此上さらに、いかに、だめた、醜態々々、この邊で御放免を願ひたい、あゝ酔った、酔うて亂に終らぬうちが男の花、どりや骸骨を乞ふべいか」色まつ黒々の満面を朱に染め出して熟柿に似たる大息ほつと吹きながら、とろり陶然たる白眼のみ四邊きよろ／＼、

「やアそこらに下女君は居らぬか、下婢殿おはしませぬか、憚りながら大コツブに冷水一杯、ついでに提灯を借用したい、なアに道を照らすための提灯で御坐らぬ、憐れむべし家に歸つて今宵の石油ありやなしやだ」

やがて下女が持ち来るコツブの冷水を半は飲んで湯を醫し、半は口に含んで蓮の葉の帽子に霧を吹ツ掛け、そのまゝ頭上にいたゞき腰には弓張提灯、さア揃うた大丈夫、いざ御暇賜はるべし

と、主人父子に送られながら玄關に立出づれば、當家の自用人車こゝに待ち受けて、しかも家に残る三人の御朋友へと折詰料理三個、やアこれは重ね重ねの恐縮なれど、かくまで正體あらはれし上田力、今更これを辭して何の功やあらん、五十歩百歩と呟きつゝ車に乗つて両手をあげ、「主人公、令嬢、御免下さい、甚だ酔った、頗る醜態々々」

しづかに轆轤をあげて門を出づるや否や、忽ち曳き出す車夫は固より金轡かけたる逸物、韋駄天の脚は大地を飛んで兩側の家屋は流るゝ如く、風なき空中おのづから風を起して醉面を吹かるゝ心地よさに、上田力いよ／＼得々然として車上に蓮の葉を振り動かしつゝ、

「むゝ悪くないぞ、あゝ愉快々々、時に車夫公、君は僕の館を知つて居るかね」

「へい存じて居ります、此間、お嬢様を乗つけて伺ひましたから」

「なるほど、しかし車夫公、決して急ぐに及ばん、僕のやうなお荷物は、ゆる／＼遊び半分に曳して下さる」

「なに、どなた様でも、お乗せ申せば手前の主人同様に心得ます」

「あアこれは恐れ入った、君は全體なか／＼話せる人物だ、惜しいもんだよ、ことし幾歳になられる、國は、姓名は」

もとより貧乏書生の瘦腹に酒の満ちたる醉漢どの、相手にならじと耳を潰して一散に駈け行くを、上田は車上より頻りに聲たて、車夫公々々と呼べども、さらに應へぬ腹立まぎれに兩肩を山の如く怒らし、五體を反つて胸つきだしながら破鐘の大聲に、出放題の詩を吟するよりは寧ろ吼えて叫びぬ、

數年以來、ばねの錆びたる辻待の破れ人力車は借おき、人なき霜夜の大道ろろ／＼彷徨いて、がた馬車の拾ひ客ともならざりし上田力が、俄に黒みがき高臺の自用車に乗つたるのみか、腹も數年以來ベコ／＼の憂空嗣したゝか美食に張り切つて、臍の穴より大息つくばかりの反身となりつゝ、おもむろに吹く青風に醉顔を撫でらるゝ心地よさ、願はくば此のまゝ一夜を駈け廻りたしと、得々然また悠々然、しきりに愉快々々と叫んで首を振り舞はせば、蓮の葉の帽子さん／＼に破れて、その夜の九時ごろ沙入村の棲家に歸りつきぬ、

「やア御苦勞だツた、まづ這入つてお茶一碗といふべきところだが、それも叶はぬ境涯、ひらに御免候へだ、しかし待ち給へ車夫公、君にさゝぐる聊かの寸志こゝにあり、なアに辭退に及ばん、酒料とは行かずとも、せめて歸途に氷水」

いひつゝ袂の底より取出したる反故紙の一捻り、ひらけば二錢銅貨一個、五厘銅貨三個、文久錢

二個、あはせて合計三錢八厘、これぞ紳士貴女が十圓紙幣に優るとも敢て劣らぬ拙者が芳志、まアさ、遠慮に及ばん、受け給へ受け給へと恭しげに差出せば、車夫も今は眞實あはれを催して、いたゞきましたも同然の捨言葉なく、慇懃に受け收めて幾度か禮を演べつゝ、はや立去らんとするを再び呼び止め、

「折角、借りて來た提灯あはや不用に屬センとした、マッチはないか、面倒だが火をつけて下さい、やアありがたい、これで今夜の石油はなくとも大丈夫、そいぢやア、車夫公、お静にお歸んなさい、さやうなら、これを市井巷閭の俗物が言葉に曰く、あばよ」

頭には破れたる蓮の葉をいたゞき、うるさしと足に纏ふ裾を絞つて臀ひツからげ、腰には大のステッキぽつこみ、その先に富田の紋所九曜の弓張提灯を吊して、右には三人の寢惚面アツと驚かすべき折詰料理三個を掲げ、よろめく五體を踏み占めながら、左手をあげて、門の扉を叩くまでもなく、よし叩けばとて夜の八時後は斷じて開かぬ規約憲法、ましてや我と知つては猶更に起き出でぬ奴等いま／＼しがらんよりはと、崩れかゝりし生垣おしひらいて這ひ込みし様は、片田舎の茶番狂言にもあるまじき不思議の行装、いはゞ氣の利かぬ化物の轉宅に似たりけり、やう／＼戸口に立寄つて耳敏つれば、いづれも枕並べて寝ながらの談話聲ぼしや／＼、さてはま

だ夢にも入らざりけりと、上田力さらに一期の大音聲を放つて、

「御前たゞいま御歸館だ、こりや三太夫ども、何をいたし居るか、こゝを開けい、早く開ける、かたじけなくも御土産の品々くださるゝぞ、おい倉橋、黒田、吉田、だれか開けてくれ、何、な
ンだ、みやげは嘘だろう、馬鹿いへ正真正銘さらに以て虚偽なしの證據みたくば、腹が空いて
鼻の善い奴一人この戸の隙間まで来て見ろ、まづ山海の珍味おもむろに香を送つて、忽ち歎願哀
訴の泣聲を立てさせてやるは、なんだ、待ったか、待ったと吐した聲は慥に黒田、どうしても貴
公は我黨第一の下卑藏だ」

いひつゝ折詰料理を戸の隙間に押あてゝ、しきりに息を吹ツ込みつゝ、

「どうだ、どうだ」

うちよりは黒田が俄に鼻を蠢かす聲、

「やア眞正だ、こいつは上田、出来し居つた、うい奴、ほめおくぞ」

其 七

百萬の人間が煩惱の腸より吐き出す不斷の太息、むら／＼と蒸せて立昇る下は眞實に火宅の宿、

いはば四里四方の煖爐室に包まれて、秋を知る孰の心地は遅けれど、わづか森一重川一筋の此方
には、あはれ武蔵野の往昔の形見や残しけん、汐入村の名に急がるゝ風の音、いつしか窓を叩い
て夢おどろかしつつ、寢覺め勝の枕頭に通ふ蟲の聲々、有明の月ぞ残れる空に雁の一群おしわた
りて、これを誰が薄墨の玉章とは和歌よむ奴の世迷言、かなしや我等のためには冬を責め來る鬼
の鐵棒ナンとして防がん、いかにして迎へん、おい倉橋、黒田、上田、吉田、各自互に策はない
か名案ないか、どうせう、かうせう、どツこいせうと頻りに額を集めて評議まち／＼、
されど四人の爲に作らざる天地の景物ます／＼秋に入りて會釋もなく肌に迫り、朝夕の軒端どこ
ろか厨の奥まで寄せ來る敵は、もとより單衣の袖に防ぎかねたる水漬一滴、すゝれども机の上に
ポタリと落つるを、白玉か何ぞと人にとはれて露と答へん洒落もなく、ただこれ讀書の好時節ご
さんなれと、半泣きの勇を起して籠る窓の外に、例の上田先生あはれ何をするかと見れば、はら
／＼と散り來る木葉一枚に轉く額を叩かれながら、忽ち腦蓋骨に響く辛さ切なさ腹立たしさ、掌
上に載せて怨恨に兩眼くわツと見開きつゝ、この畜生どこから失せた、おのれ風流の頬邊たゝか
ば詩にも文にもならんが、いやしくも我我の面上に落ち來る暴慢無禮、無事はおかぬぞ、おもひ
知れや坑にしてくれんと叫びつゝ、大地に抛つて下駄の齒の力足ぐいと蹂躪る勢ひ、さながら白

癡の狂せるに似たりけり、

「こりや何うちや、せめて一言、痛い吐せ、やい腹が癒ぬ」

をりしも續いて散り来る三四枚、えゝまだ來居るか顔ふり仰げば、あやにくに風さつと吹いて

滿枝の黄葉ばら／＼と瀧の如し、上田力おもはず地踏輪ふんで躍りあがり跳ね上り、

「やア誰か鋸もツて來い、こん畜生、根から引ツ切るのだ」

反故張の紙帳、つり板の飛び乗り、おもへば我ながら呵しきほどの失敗を重ねて、やう／＼夏の蚊責めを通れし今こゝに、かなしや又も寄せ來る秋のあはれ、つゞれ刺せよと鳴くの蟲音は聞けども、さすべき襦袢は今年の春に打殺して、掛襟一筋の骨も残らぬ今日の境涯、よせば善かつたと後悔の臍を舐つて喚けども、垢と鹽氣の外には何の味なく、單衣一枚きたきり雀の屋羽うちかされて、其日々々の餌に急がしければ、二月あとに盜まれし夜具も其まゝ、くやめども還らず稼げども遣つつかぬ破れ疊の上に、膝小僧抱き寝の夜の寒さよ、せめて身に重ねれば心あつきの理より考へて、おの／＼古新聞の綴ちたるを打被り、さては襖障子を重ねて其下に睡れども、寝られぬまゝの痲癩いよ／＼起つて夜は更ける眼は冴える腹は減る、あゝ憐れむべし小人の不料簡の

此時に湧くものぞと、みづから大人ぶつて聖賢の書を読まんとなれば燈油なきを奈何せん、夏すでに過ぎて螢飛はず冬はまだ雪を積む詮もなし、

一日、四人もろとも車座になつて半泣きの遊面しみる／＼評議のをりから、年長の倉橋幸藏おもむろに黒田上田の二人を掻き退けつゝ、かの少年吉田雄藏に對うて靜に口を開きぬ、

「ねエ吉田君、かう言へば何だか僕一人が改めて物の角を立てるやうだが、實は此夏、川上の名刺を持つて來られた時すでに既に思ふたことを、幸ひ今こゝに機を得て發するのだから、しかも満身の眞意と情實とを捧げて君のために計るのだから、わるく取つてくれちやア困る、ついで上田、貴様に直接の關係を及ぼすから此處へ出る、これさ、なぜ、そんなに目を刺くのだ、目を刺かなくつても宜いから善く聞いた上、とくと考ふべしだ、おい黒田、貴様は其處で聞取役、また批判者となつて飽くまで利害得失を功究すべしだ」

いひつゝ膝を進めて容を更めし倉橋幸藏は、さすがに物の成就も近き年長謹慎の色みえて、川上三吉に次ぐべき男振なりけり、

三人おもはず顔を見合はせつゝ、中にも吉田雄藏は一入さらに思案顔、倉橋の面を仰げば例の片頬に笑を浮べて、

「時に吉田君、丁度、君が來られた時分は夏の眞最中で、貧生苦學の我等も、どうやら斯うやら
 凌ぎよかつたものゝ、さて此頃おひく秋の寒空に向ひ、やがてまた三冬の凜冽、しかも東京は
 筑波おろしと富士の雪氣の頂上おろし、人間どころか草木も木も聲を絞ってピュー／＼と泣く土地
 に、單衣の一枚二枚で押し行くのは随分ひどいよ、肌に粟を生ずとは未だ眞實の難行を知らぬ奴
 の文句で、實際は肉も骨も凍つて歩まば五體たちまち龜裂れるやうだ、まして君が如き暖國
 に生れたものが、たとひ竹の筒に白米を入れて振米を聴くの勇ありとも、この嚴寒には少々まゐ
 るだらうよ、且また、よしや我等と共に平然たるの強情我慢を通すにもせよ、だめだ、君の今の
 身には無益の勞苦だ、何となれば、いやしくも我等は皆これ國を出でて十年の徒、出來損うても
 聊か學を修め、いはゞ物の半途を過ぎし功には、眼前この艱苦を忍ぶだけの結果、いづれ遠から
 ぬ前途にありと信じて居るのだ、乃至また今こゝで五斗米に膝を屈すれば、おのれ一人の喰殿建
 立ぐらゐは差支ないものと信じて居るのだ、されど、我等また切りに蟹の目の上へのみつき
 て、猿の手の髯にまはらぬといふ也有が俳文通り、わざと人に笑はるゝ此境涯を保つに引き代
 へ、失敬ながら君は未だ十八の少年、いはば初學生だ、我等なるとかして物になるころが、やう
 道を見付けて上る首途の一人、空しく共に斯る難行の巢に苦しむよりは、おい上田、さア貴

様の役は茲だから出ろ、えゝまた目を斜き出すよ、目を斜かすに出ろ、外でもないが、此間から
 貴様が度々往來する紳士、富田正次ね、あの人のためには貴様は恩人だらう、かつて故郷に悪太
 郎のむかし娘の氷死を助けた恩人だらう、だから彼も貴様を歓迎する今日、どうだ、この吉田君
 を彼に託して倉客とし、半日づつ學校に通はすことは出来まいか、どうも吉田君には秩序的の教
 育を受けさせたいのだ、萬事遣り損ねた我等と共に空しく此末の難行をさせたくないのだ、こゝ
 は一番上田先生の肝煎肝要、ねエ黒田、なんと思ふか」
 上田力は暫し考へて兩眼を閉ぢしが、ふんと猪鼻で吹く大あらし一息、
 「よし、引き受けた、なるほど倉橋だ、流石は倉橋だ、名案々々、よく氣がついた、いかにも妙
 だ」
 かたへに坐せる黒田健次は更に物おもふ體もなく、無遠慮の口を尖らして上田の膝をつつきな
 がら、
 「おい上田、ついでに其老紳士を誤魔化して、あたらしい夜具の三四枚も荷いで來い、なアに物
 のある奴から取るのだ、むしろ彼奴に善根をすゝめてやるのだ、ぐづ／＼吐しやア構ふものか、
 横面ぶんなくツて娘の生命云々と叫ぶ位の勢ひで遣つつけろ、貴様が嫌なら僕が代理で押しかけ

ようか、僕なら通しッこなしだ、吉田を押し付けた上に絹夜具の三組ぐらゐは屹度しめてやるね。

洒落にもあらず好奇にもあらず、唯かくいふべき仔細あつて斯の境涯に陥り、やがてまた斯くならんと目的あつて斯くぞ苦學も甘んずる我等が許に、年少いまだ風塵に當らざるの人、しかも初學單純の吉田雄藏を包まんは、むしろ彼が前途を誤るの恐れあり、それも他に救ふべきの道なくんば已まん、いやしくも導くべきの機會あつて之を導かざるは友誼にあらずと、さすがに年長の倉橋幸藏が膝を打つての發議に、さしあたる當の役目に上田力、さらばとて先づ富田正次に委細の書を送れば、幸ひ此方にも求むる折柄、そのまゝ直ちに作ふべしとの返書來りぬ、もとより山間の一少年、たゞ偏に諸兄の愛に依つて此幸福を得たるも、あはせて猶この上の交誼を祈ると、吉田雄藏が慇懃の挨拶に、倉橋幸藏すゝみ出でて容を改めつゝ、

「いふまでもないが吉田君、決して世間普通の食客根性を出しては不可ン、半日は寧ろ主人のために能く屈し能く働くの忠僕となり、あとの半日は活眼活氣を以て我たゞ獨り王侯たるの勢ひで學を勵み給へ、乃ち君が身の運命としては、その一面を人に笑はるゝの愚となり、その一面

はまた人を驚かすの智となつて、物に屈伸の理あるを思ひ、事に消長の機あるを察し、假にも人の奴隸たるを以て心に奴隸たるべからず、かりにも心の王侯たるを以て人に王侯たるべからずだ、言を更へていはゞ、身を低くして志を高くし、外には行狀を圓にして内には男子一片の稜々たる氣骨あれよだ、また苟も途中の小利小成を顧みては不可ン、よろしく最後の凱歌をあぐべしだ。

從容として宛がら骨肉を論すが如き坐傍より、例の黒田健次は無造作の口を開いて片手をあげつ

「吉田君、倉橋のやうにいふと面倒だがね、つまり君が半日の學問する報酬として主人のために半日の用を辨じてやるのだ、唯その間に能く勉めて怠る勿れといふのよ、なアに、むづかしい事はない、主人の怒らぬやう機嫌を取つて、自分も十分勉強すれば宜いのだ、しかし今日の凡夫みだりに古の聖賢めかしても無効だから、たまには横着を構へて戸棚の中の晝寝ぐらゐは遣るべし遣るべし、また大勢の客でもあつて御馳走の餘つた時は、これを臺所の奴原にしてやられず、君が先登第一むしやむしやと取つて喰ふの勇なくんば不可ン、凡そ人に使はるゝ時は寧ろ人に先ンじて人を制し、もし人に長たる時は却つて人に後れて黙々たる、これぞ人間處世の秘訣だから、

まづ第一に家内主従の弱點と長所とを呑み込んで而して後、臨機應變うまくやるのだ、萬事おめく、臆しては不可、随分時に戯れても遣るのよ、鼻唄まじりに臺所の下女を蹴飛ばして朝夕の膳に餘分の茶を備へさせ、或は令嬢とかいふ娘ツ子を威嚇かして常に茶うけの菓子占めるほどの活氣なくンば迎も押し切れないよ」

例の黒田健次が横紙破りの出放題に、倉橋幸藏おもはず苦笑ひして目に物いはすれば、上田力それと心得て起ち上りつゝ、吉田雄藏を引き連れながら俄に門を駈け出でぬ、

「おい上田、取も直さず君の身も吉田に代へて、先方へ頼むのだよ、宜いか」

いふは倉橋の聲なり、

「おい上田、ついでに蒲團三四枚、忘れぬな、是が非でも、この使命を果さずンば、足下もはや語るに足らずだ、家内へ入れないぞ」

いふは黒田が聲なり、

もし我に賜ふの恩恵あらば總て之を吉田雄藏に賜へ、もし彼が身に過誤あれば我これが責を負はんと、禍福ともに自己が一身に代へての依頼、あくまで男らしき上田力が言葉に、主人の富田正

次いくたびか首肯いて、

「あゝ宜しいとも、萬事御安心なさい、實は不束の娘も今日あれまで無事に成長した恩人、及ばずながら足下をと思つても見たがね、さて折角の苦學難行を今更ら妨げるやうにも當り、また他人に依つて事をなす足下とも思へないから、却つて心苦しう差控へて居つた折から幸ひの吉田、たしかに引き受けた、別に一子を擧げた覺悟で世話しますから」

いひつゝ上田の姿じろく見れば、秋も更けて冬近き此寒天に垢染みたる單衣一衣、かつては風流に誇りし蓮の葉の帽子も、さすがに今はいたゞく勇氣もなく頭上の哀れさ、シャツはあれども木綿ちゞみの夏の形見いと肌を隔て、をりく涙なき目をしばたゞき、しきりに乾きし鼻を啜りあぐる風情、

「上田さん、風をひきましたね、用心センと不可な」

「なアに、いつも今ごろから來年の三四月までは、あはゝゝゝのべつ幕なしに風の引き通しです、いはゞ半年がけの風邪、慢性の感冒ですから別に苦しうもないです」

「いやはや驚いた、それで何ともないかね」

「五尺の満身すべてこれ膽、乃至また鐵石とは少々威張り過ぎますが、全身これ面の皮も同然ぐ

らぬの勇はあるです」

「は、ア、しかし夜は如何ですな、日中生氣の活動して居る時は兎も角、このごろの深夜に、間はれて忽ち思ふ膝小僧抱き寝の辛さ悲しさ、かつは黒田健次が強談がましき蒲團云々の暴言を、あれほど謙直の倉橋さへ口を遮つて止めざりしは、あはれ言外に我をたのむの意味にやあらん、恥づかしながら知己のため我がため、こゝは一番なんとかして浮世男になりくれんと、強情我慢の上田も手持無沙汰の片手やう／＼額を掻きつゝ、

「さやうさ、さうですな、なるほど、はア、すゐぶん徹へますな、乃ち夜ふけ人定まッて萬籟の聲も陰に閉ぢられ、たゞ流るゝ隅田川の水音のみ耳に近く、思へば満都の瓦に霜の化粧や施ぬらんといふころは」

「むゝ寒いでせう、失敬ながら、まだ夏夜具のまゝちヤアないですか」

「ござんなれ、おいでなすツた、神や佛の尊臨しましたと、上田力おもはず我を忘れて膝を進みぬ、

「實は、實のところ、夏夜具も冬夜具も何にもないです、實は、實のところ、過般、盜賊の畜生に遣られて以來、深夜ぼつねんと机に向つて硯の水も氷らんほどの夜寒さへ、この尻に敷く坐蒲

團はおろか、およそ縁で織つたものは風呂敷一枚もないといふ始末で、簀床の下より背骨を傳うて吹き上げる穴風、廂の隙間より襟首を覗うて吹きおろす矢風、流石に愉快ともいへませんな、そこで萬已むを得ず、襖障子あるは古新聞の綴ちたるを乗ッけて破れ墨の上の辛抱、あはゝゝ袖を片敷く丸寝の夢も、なかなか見ることの出来ない悲境で、唯まぢかねるは曉の鐘ばかり、翌日の日中を樂しんで四人等しく龜の子のやうに、背を晒し、わづかに天日ぼつこを以て一場の暖を取る境涯、しかし、これほどの艱苦は固より覺悟の前、この上田と倉橋の二人さらに驚かないですが、こゝに黒田健次といふ奴が、毎夜べそべそと吼面かくを見るに忍びず、あはれ願はくば先生閣下、彼奴が夜音の泣く音を止める工夫御坐いませんかな、なアに彼奴一人前で結構ですから」

やう／＼漕ぎ付けて此時のみぞ額の汗を拭ひける、

やがて濱町の富田正次が門内より、しめたぞ／＼大願成就、えんやらヤツと三人分の袖夜具を、背負ひしといはんよりは全身うづもれて歩み出でし上田力、十文字に綾どる苧繩に咽喉を喰ひしめられじと、片手を胸の邊に當てゝ引ッ掴みしまゝ、片手にはステツキの力杖、こいつは重い、こいつは暖かい、いざや罷り歸ッて二人を喜ばせんと、足を早めて薬研堀にかゝりし背後よ

「こらア、こア〜」
 呼ぶ者あれど悲しや首のみ振り返れぬ大荷物、やう〜五體もろとも立廻れば、一人の巡査あゆみ來りて眉を擧めながら、
 「わやアどこの者な、そげな風で、いッべこッべ駈走くこッちうがあウか、セン蒲團は、どこせシンかア持ち來た、あア」
 いひつゝ上田の姿じろ〜睨みまはして、夜具の端を掴みかゝりぬ、
 やれ浮世なりけり、我この風俗で此夜具を被いで怪しまるゝは固より道路、職務がら御苦勞千萬なれど、これはまた困ツた查公に出逢うたり、きけば薩摩隼人の音勢いまだ其まゝの先生、あゝ何ぞ我警察の不完全なるや、願はくは人民直接の官吏おの〜其地方の人を用ひたしと、警視總監に對うて不平の議論も今こゝに何の詮なければ、わざと慫慂の體を粧ひながら、
 「僕ですか、僕は淺草橋場つゞきの汐入村に住む書生で上田力といひます、またこの夜具は濱町二丁目の富田正次といふ者から、たツた今、貰ツて來たばかりの品です、決して君を煩はす品ぢやアないです」

「ランにや、わいが方で何事も無かど、おいが方で見ツとことがあウから、交番所まで來」
 上田も今は困じ果て、詮方なさに、片手をあげて片手拜みの笑を含みつゝ、
 「いやさ、行くがね君、おい君、君も職務がらの目で大方わかるだらう、今日の事故ないのが不體裁ゆるの引張りツこは眞平だ、ゆるしてくれ、實は急ぐのだから」
 「なんちうか、あア、役人に對うて戲事すちう事あウか、セン手眞似は何事か、ランにや許さん、和郎、來ッ」
 人間としては無くて叶はぬ夜具蒲團も、あはれ落魄貧生の我脊に負うては忽ち曲物と怪しまれ、往來の目、巡査の嫌疑、辻の交番所に曳かれて生面さん〜に晒されし上、なほも所轄の警察署にまで連れ行かれ、おそろしの刑事掛に睨まれて早七分は罪人扱ひせられたる無念心外に、もとより查公を捉へて一場の議論風生、以て得々たる神田本郷邊の初心者ならねど、上田力くわツと憤ツて腹立まぎれの悪戯に、わざと我から筋を亂し、言葉を枉げて綾なせば、いよ〜それと銘をうたれて既に斯うよと思ふ瀬戸際に、はじめて打明したる事實の眞相、さらばとて富田正次と汐入村所轄の千住警察へ何をか問ひ合はせし後、やう〜晴れて放免せられしまでを數ふれば凡そ五時間、嗚呼だめだ、だめだ〜、どうでも今の世は猿も衣裳の金びか金びか、百卷の書は

以て四圓のニツケル時計に如かずと歎じぬ、
 空しく五時間を費して其日の夕暮、またもや夜具の化物となつて歩みつゝ、汐入村に立歸つて門
 を入るや否、あはれむべし半泣の大聲はりあげて喚きたてぬ、
 「やア倉橋、黒田、今日は辛い目に逢つたぞ、しかし乃公の御手際これ見よだ、謹んで拜見しろ、
 絹布ならねど新綿ぶく／＼の袖夜具三組」
 きくより黒田健次は飛び出して俄の拍手喝采、
 「なるほど、四方に使用して君命を辱かしめざるもの、眞に君の前途だ、一朝志を得ば全權公使
 たるの腕たしかのものよ」
 ついで迎へ出でしは倉橋幸藏、おもはず笑を含んで背後より夜具を取卸しながら、
 「實に濟まんな、君の性として辛かつたらう、これだけの物を貰うて来るには、して、吉田は、
 むゝさうか、それも上首尾、いや御苦勞、御苦勞」
 さても其夜は、曉かけて如何なる夢や結びけん、前夜まで破れ疊の上に膝小僧抱き寝の三人が、
 今宵より俄に新しき夜具を纏うて、枕に通ふ霜夜の鐘を餘所に聞きつゝ、手足ぬつと伸ばしても
 寒からぬ綿の中、やは／＼と全身うづもるゝ肌心地の嬉しさ餘つて、或は横になり縦になり、仰

臥伏臥きり／＼舞ひ、果は首を縮めて幽に鼻唄うたふは上田力なり、あゝ此上の希望には美酒佳
 肴に飽いて、あけの朝の二日酔は枕頭で叱るほどの女が欲しいとは、何事につけても今の身に及
 ばぬ面の黒田健次が贅澤なり、倉橋幸藏は唯なんとやらん眼を瞬いて、二人とも静に静に、
 夜具は境涯に過ぎたるほどの品なれど、三人おの／＼身には單衣のまゝの夏ごろも、惜またこれ
 を何とかせん、一工夫あらざるべからずと頻りに眉を顰むる二人を制して、始めより斯うと覺
 悟の倉橋幸藏おもむろに口を開きぬ、
 「なアに心配するに及ばん、成算すでに既に僕が胸中にありだ、全體、我等が今の身に新しく揃
 うた三組の夜具は過分の華奢沙汰だ、およそ人として居家處世に平均を缺くは破滅の基、よろし
 くない、そこで、あの夜具の綿を引き抜いて賣るとしよう、三組揃ひ六枚の綿は随分金目だ、か
 つ新綿の上等しこたま押し詰めてあるから、少くとも五六圓になるだらう、なアに、あとは打薬
 を買つて詰め替へるだ、乃至また能く枯れた木葉でも宜いから」
 學就り業遂げて一朝こゝろさしを得ば、緞子の吊夜具、縮綿の重ね蒲團、さては虎の皮を敷き詰

めて轉寢の夢むすぶも難からねど、今こゝに斯くと覺悟の我等が境涯、やうく鹽を舐めて其日を送る難行苦學の宿に、木綿とはいへ仕立おろしの夜具は分に過ぎたり、しかも十月の末つかた、やがて霜月師走も近き此寒天に、垢染みたる單衣一枚わづかに肌を包んで、五體ふるくと常ぶるひの我等が、あの夜具あのままに纏うて叨りに閑睡を貪るは、乞食の身に拾ひし珠玉を飾ると一般、いかにも初心めて策なきに似たりと、年長の倉橋幸藏が案を打つての發論に、忽ち議を決して三組六枚を引き抜けば雪の如き青梅綿幾貫目、屑屋に賣り拂うたる代價八圓六十錢となりぬ、

一方の縫目を綻ばして綿を引き出すは易けれど、さて藁を詰め替ふるには絲と針との業、もとより我等の手に叶はじと近所の婆を備うて、やうく出来上りしは原のままの外見ばかりか、大の男三人が力を極めて飽くまで打抜いたる藁なれば、身も浮くほどにヤハくと柔かき寢心地のよさ、第一あたゝかき肌さばりの氣持は案外の好結果、うちなほしの古綿に勝りて代價わづかに百分一、あゝ世は方便の工夫次第、この經濟の理あるも知らで、薄き煎餅蒲團の柏餅に、おのが肉の食み出づるを敷く愚物もありけりと、三人もろとも宵寢の鼻を蠢かして、おい倉橋、黒田、上田、あの八圓なにがしは乃ち降つて湧いた餘分の金、布子三枚を買うた殘金なんとせう、如何せ

う、

三組夜具六枚の綿を引き抜いて屑屋に賣りし代價八圓餘、おのく布子一枚づゝを柳原より求めて餘すところの四圓、さアこの金を何とせん、しばしの米鹽を貯へんか、さしあたりて有用の書籍に代へんか、ちよつくら一寸と二日路の旅に出でて枯野の風に此しやツ面を吹かせんか、乃至また憂ひを拂ふ玉簪とやら試みに酔うて恍惚飄々おもむろに人間を脱却せんか、疊やぶれ壁おちて軒に雨漏れども普請の金には足らず、枯腸こゝに久しく甘味を忘れたれど茶うけの菓子には少過ぎたり、さりとして日夜あらたなる當世の活劇を演ずる我等なとして今更に紅粉假面の芝居を見て喜ばん、上野淺草をうろついて年期小僧の放赦に逢うたる如く餅と汁粉と天ぶらの立食に餓虎の勢ひを示すも恥づかしと、評議まぢくの中に例の倉橋幸藏、いつもながらの分別ふかく、片頬に笑を含んで靜にいふ、

「ねエ黒田上田、まだ卵の殻が尻にくつついて嘴の黄色い奴さへ、一夜の酒色に百金を費して驚かぬ世の中に、堂々たる鍊鐵の男兒、いやしくも意氣骨節こゝに當世の凡俗をぬきし我等が、わづか一圓紙幣四枚を取圍んで工夫に窮するとは面白いね、をかしいね、將また悲憫いね、實に

快だ奇だ、他日おのおの志を得ても必ず今日この奇を忘るべからずだ、ふかく思へば人間消長の神機この中にありだ、ところで僕が思ふには、この四圓これを空しく浪費するの境涯でないから、もとより米鹽の料として數日の勞働を廢し、いはゞ一年中の骨休め氣休めの戲事半分、どうだい、三日の間、わづか一圓を以て飽くまで美味を食ひ飽くまで愉快を取るといふ神算鬼謀がある、乃ち其計策は斯うだ、我等この苦學難行に陥らざる以前の朋友で、今なほ愚狀依然として神田本郷邊の下宿屋奉公する奴を、一人前五錢ぐらゐの手土産で片ツ端から訪問するのだ、音信を斷ち交際を絶ちてより殆ど數年、随分、互に久しぶりだから、先方も驚くだらう、驚いて其まゝ歸せるものか、そこは昔馴染の人情、かつは見てくれ坊の瘦我慢は彼等の常で、なか／＼案外の御馳走するに相違ない、もし馳走しなければ、ひやかし半分に冷罵嘲笑的の議論を吹ツ掛けて敵を怒らし、故郷の學資ぶツたくりで、坊様學問をした腕前どれほどか、年中野菜腹窮々の乞食學問した我等の腕前どれほどか、このところ大に戦うて晴の勝敗を決するのだ、面白いぜ、また久潤の情に渴して歡迎する奴どもには、我等よりも慇懃に禮を正して無沙汰の謝罪かた／＼、いはば昔を語る一場の懷舊談、これも面白いぜ、ねエ黒田、上田、僕と三人の舊知を合すれば、凡そ五六十人ぐらゐは外れまいよ、そのうち半分は無効としても、なほ三人で三十人前の御馳走を

食ふのだから、随分いそがしいよ、三日間で半年ぶりの滋養分を十分吸収してくれるのだ、なんとかしけん、平生謹直の倉橋幸藏としては、ちと惡戯の過ぎたる策謀なりけり、神田本郷邊に下宿屋奉公せる三人の舊知を數ふれば凡そ六十餘人、まづこれを半數として殆ど三十人前の御馳走を覘ふため、金一圓の身錢を吐いて今戸の應煎餅五錢づつの手土産は二十人前の不足を生ずれども、歡迎待遇の厚薄に依つて臨機應變の處置もあること、手土産は必ず最後の歸りがけに出すべし、我等が今の身の境涯に大枚五錢を空しく先だて、その討死の屍を見ながら淋茶一ぱい菓子パン二個ぐらゐの念佛に逢うては無念骨髄に徹して年來苦勞難行の男が潰れると、先鋒に、倉橋幸藏、中堅は黒田、後殿は上田、おの／＼食氣凛々として汐入村の陣所を繰り出しぬ、
 夜具の綿を叩き賣つて購うたる柳原製の布子、もとより身丈に合はざれど借着に御坐らぬ面色すさまじく、鼻たか／＼と浮世俗物の綺羅錦繡を笑うて、頃しも霜月の中旬、筑波おろしの北風を背に浴びながら、二日以前より水のみ食うて減し抜いたる用意の痕腹を抱へつゝ、打揃うて歩み出す中に上田力たゞ一人、ふしぎや満足の紺足袋を穿てるに、
 「おい上田、いつの間に其、その足袋は全體どうしたのだ、何、なんだ、去年の殘物だと、嘘言

を吐け、去年の古足袋は餅網同然で、穴だらけの筈だ」
 倉橋黒田の二人が眉を擧めて怪しむ面前へ、上田力おもむろに片足をあげて笑を含みつゝ、
 「これさ兩公閣下、いやしくも我黨に居ながら、何故そんなに迂遠だよ、目をあいて能く見る、
 穴だらけの下地は乃ち足に墨を塗って、うまく外見を誤魔化したところの機敏才略、どうだ、味
 方の君等さへ既に斯の如くに欺かる、まして況や遠目の敵に於てをやだ、ね、これぞ豊太閤が木
 下藤吉郎の昔、一夜に清洲城の大破を補うた古智と一般、なほ外に一物の以て天下を驚かすに足
 るものありさ、あてゝ見給へ、僕の懐中によ、何、わからん、さもさうづ、さもさりな、さら
 ば聊か天機を漏らさうか」

いひつゝ取出せし紙巻煙草數本、うや／＼しげに自己が掌上に載せて指さしながら、
 「これだ、これを見れば萬人一樣たゞの巻煙草なれど、上田先生の智略おそれても猶かつ恐るべ
 し、何ぞ圖らん此中に地雷火が伏せてあるのだ、ダイナマイトを仕込んであるのだ、乃ち今日の
 進撃に、もし我等を遇すること冷淡な奴があれば、五錢の手土産を取返す位の手緩い事で僕は承
 知できないから、君こゝろみに此煙草を吸つて見給へ、近ごろ舶來の見本に貰つたばかりだと、
 うまく欺して一本進呈、そこで敵めが火を吸ひ付けるや否や、轟然たる爆發もろとも幾條の紫電

ばツと迷つて、其奴の満面は忽ち大火傷といふ計略だ」
 「えゝ危い、なんだつて又そんな危険な物を用意するのだ、第一、その煙草の中に何があるのだ」
 「わかるさい、これぞ上田先生が新發明の彈藥、マッチの先の青い點ばかりを粉にして、煙草の
 中に忍ばせてあるんだ、しかしこの爆裂煙草は尤も口髭のある奴に功多しだな、たとひ遣り損う
 て満面に疵を負はさずとも大事の口髭ぐらゐは焼ツ切るから」

「なアに構ふものか、親の脛は三年あとに嚙り潰して、今ちやア咽喉笛に喰ひ付かうといふ不孝
 の勢ひ壯に、どし／＼的の違つた學資をぶつたくる奴等だもの、たまには我々正義の君子が押し
 掛けて聊か囊中を荒してやらすば、憐れむべし彼等いつの時に犯罪障消滅の期あるべきやだ、
 乃至また然ほどの遊治郎でなくてもさ、故郷の消印おした書留郵便で生命を繋ぎながら、生意氣
 にも下宿屋三度の飯を嫌うて小料理の下女にからかひ、歸りがけの黄口みだりに剩金は入らない
 よ、なんどと吐す徒輩、あるは寄席の下足番に祝儀を呉れて娘義太夫の樂屋から鮎の一皿を名譽
 と心得る奴どもには、いはゆる頂門の一针、天地に對して疚しくないから強制執行で奢らすべ
 した、まして況や大枚五錢の手土産持參に於てをや、肉薄吶喊、片ツ端から大に押し寄せて飽く

まで此の腹を肥し、満腹ベン／＼臍の穴より張り裂けんと思ふ頃は、下痢劑をかけて更に勇往奮進、以て悉く平ぐべしだ、公園の樹木を折つて罪はありとも、彼等五尺の娑婆を寒くために出来たる無用の動物、あとで頭痛を病ます位は決して罪とならないから、いづれも其場に臨んで俄に婦人の仁を出すべからずだ、ねんごろに損をかけて、づら／＼しく思ひ切つて、いやしくも氣の毒などといふ弱い音を出しつこなしだよ

なンとして堪るべき、かゝる傍若無人の大氣焰を吐いて、洒落と食氣と惡戯とに世辭も會釋もなき三人の豪傑が、二日以前より用意の空腹かゝへて沙入村を押し出したる勢ひに、いやしくも一知半面の縁ある徒輩は一人も遁さず、本郷神田の下宿屋、いち／＼踏ん込んで、さながら不俱戴天の親の仇を見付け出せし如く、飲んでは食ひ、喰うては飲みつゝ、やゝ一場の議論を以て防ぐものには、徐ろに説いて飽かざる熱心の倉橋幸藏あり、浮世に馴れて巧みに切り抜けんとする半可通には、黑白異同の詭辯諸諺を吹いて横紙破りの黒田健次あり、さてまた後殿に控へたる大力の上田力は肩を怒らし拳を握つて四方に眼を配りつゝ、いざや腕力といふ最後に躍り出さん面色すさまじければ、たとひ門前債鬼の横面を張り歪めて追ひ返す鍾馗の勇はありとも、あはれ此三人に襲はれたる上は多少の手疵を負はざるものなく、朋友知己いづれも機を飛ばして警戒さま

さま、中には虚病の化の皮を剥がれて人一倍の難に逢ふもあり、はや去年歸國のあと、偽つて逃げ出す途中で忽ち見付けられ、首筋ひつつかれて、其日の人力車代を占めらるゝもあり、あるは逆も遅れ難きを知つて觀念の首を伸べつゝ山海の美味を備へて待ち受くる奴もあるに、三人いよいよ勢を得て吼ゆるが如く、あゝ快なる哉、快なる哉、處世の秘訣は殆ど此うちにあるさ、

其八

定めなき世の中の定めとて、一年中の大油断けふ一日に押し寄せて、人間いづれも三百六十餘日の化の皮を現せば、山の奥の仙人も狼狽へ騒いで里に飛び出し、横町の隠居も杖を忘れて大道の巷に彷徨ひ、天下取れぬが不思議の智者も千里を見抜く淨玻璃の識者も、僧は舌一枚に萬人を驚かす才子才物も、あはれや現世からなる呵責の鬼に脚下を攻められて一言なく、門構いかめしき大玄關を銅臭の奴に蹂躪られても、ない袖は振り切れぬ晦日の大世話場、あゝ貧は諸道の妨害と今更ら後悔の脚を嚙んでも、遅いかな遅いかな、

されど浮世の七分を吹き落す此大晦日も、一文二文の露命を繋ぐ非人乞食の屍なれば、日夜その程度を守りて僧上過分の榮華を望まぬ身に何とあるべき、こゝに一個の證據は涙雨ふる都門

に近き汐入村の苦學難行、あはれ生命は學問修行の序に生きて我から日夜の餓鬼道に苦しむ三人なれど、平生うちとほして空腹腹に馴れたる手柄は今この時に現れて、正月の小餅一個もなければと門前に掛乞の聲を聞かず、森一重に餘所の矢叫びを笑ひつゝ、走せ違ふ修羅の巻を川一筋に隔て、血眼に駈け行く黄金の亡者を指さしながら、

「おい、どうだい、おこる平家の悪報は忽ち眼前に、かはいやく、今あの通りの屋島壇の浦、宗盛の位も知盛の智も敦盛の美も噫また能登殿の勇でも、あはれいゝいゝ叶はぬものは自己が作つた敵の強さよ、さまア見ろだ、ところで別に天下太平の我黨は宜しく茲に鼓腹、いや鼓腹は少々やりかねるが、まづ大に忘年會を催して謳歌すべし、あはせて除夜の名作名句、ついでにことし一年中ふきおさめの大氣焰を吹いて、罵詈嘲弄、冷笑諷刺、彼奴等が耳の破れるほど吐鳴つてやらうぢやないか、時に取つての愉快だぜ、三百六十五日を今日一日の復讐だ、ヤツつけるくし牛肉半斤、しかも狗には過ぎたり人間には逆も齒節の合はざる肉を求めて、酒二升、これも白馬と名付けたる荒牧の逸物、一鞍はツしと打てば忽ち千里の駿足に、葱のみ本場の千住を選んで代價十五錢、一時に煮込んで牛の香の絶えぬを三日の兵糧に備へん用意周到、さア出来た、いざや國家安康の基を開けりだ、これから三人おのゝ本音を吹いて既往を語ると共に、現在の居家處

世を攻究し、あはせて大に將來の希望目的を談すべしだ、へん何を苦しんで誰にか憚り誰にか求めん、肉あり酒あり腹に萬巻眼には古今東西の盛衰興亡また人間の利害得夫窮達消長、おもむろに我琴を弾じて我笙を吹く日本晴の男三人だ、

其 九

正月とて元旦とて尋常の日なれど、いつしかこれを人間行路の一里塚として、めでたくもあり目出たくもなしとは、ちと穿ち過ぎたる古風の穿鑿、世は萬事ばツと穿たぬところに甘味ありて、花も半開、酒も半燻、月も臙に照らすを賞翫すれば、人も悟らぬ面がまちに笑を浮べて、なんとなう唯めちやめちやに嬉しき新王の春、ましてや一年中の憂も涙も前宵一夜に追ッ拂うて、西の海へサラリと投げ込んだる心の張替に、よしやアがれ去年は去年、さア矢でも鐵砲でも持つて来い今日よりは、いざ年と共に新なる騎虎の猛勢、親の急病に膝栗毛で駈けたる吾い男も、いそがぬ禮廻りに後押し綱曳きの車輪さながら宙を飛ばして東西南北に織るが如く四通八達に亂るゝ如く、さんざめく千門萬戸の松かさざり、空も長閑に動がぬ御代の天下太平、さても吉兆吉日を祝ひ壽く家内安全、七年連れ添ふ女房も今朝は何うやら初戀の、えゝ畜生と昔をしのぶ良人の笑

顔に妻も思はず若やいで、こちらの良人これほどの美男とも思はなかつた晴衣の容姿風俗、互の返り咲に夫婦まづ新の色を作れば、婆様も杖を忘れて、鶯啼かせた懐舊に額の皺を伸し、かけでる世間に平生の敵もなく味方もなく、親疎うちませ老幼混じて笑ひ動揺めく浮世の下層は固より、中流の孟賲、上流の青陽、さては掛巻くも綾に賢き大内山の頂上まで、およそ人間の種としては唯おめでたき此朝日正朝を、あはれむべし汐入村の破床に空腹かへて大に目出たからぬ三人の男あり、倉橋幸藏、黒田健次、上田力、

されど門前には青竹に紙帳朱塗の國旗を交叉して、薬を結んだる手作りの注連飾り、ゆづり葉のみは庭に茂れるまゝを大束に取つて軒を蔽ひ、左右の松は力業に引き抜いたる根植ゑの青松いき／＼として、こゝにも留節は來にけり、いざや浮世の禮を受けんと待つが如きも、門前さらに一人の訪ひくる影なく、いたづらに満都の太平樂を餘所に聞いて、むなく人間外に面白からぬ一仙境を作りつゝ、いとゞ寂寞たる呼子鳥の棲家あはれ、家内には三人いかに暮しけんと思へば、一夜を境に去歳の暮より酔うたる忘年會の白馬に騎つて、一鞭はツしと今年の春に引き續けたる越年の大やけ腹おの／＼薬蒲團ひツかぶつて枕を並べつゝ、出でて俗世の虚飾虚禮を見るも嫌なり、起きて俗物の歡聲快樂を聴くも嫌なり、我黨は此ところ神仙となつて、眠るべし眠るべし

し、飽くまで壯に眠るべしと、詮方なしの軒を揃へし寝正月と洒落れ込みぬ、むかしは献上鯛一枚が百兩もする花のお江戸に、赤裸三文肴負うて暮す落武者もありと聞きしが、池中の鯨による／＼と天上して雲に乗る明治の今日も、あはれや破屋の下に空腹かへて睡る神仙もありけり、

されど此神仙達いまだ頗る若輩にて、雲を呑み霞を喰ふ大自在の通力を得ざれば、元來みれんのはらわた腸まづ凡俗に返忠を打つて、腹は減る眼は芽える痲癩おこる腰骨いたむ、あゝ寝るほど樂はないと聞けど、食はず飲まずに寝るほど苦しい事はなしと、第一番に頭を擡げしは例の黒田健次、がンがら受の五臟六腑より哀れに吹き出す大欠伸を、むにや／＼と口の中に嚙み殺して唾もろとも呑ろ込みながら、

「已んぬる哉、已んぬる哉、この正月元旦に仙人の修行なぞは随分くだらないね、どうだい倉橋上田、あらためて大に俗物となるの策はなしか、僕は俄に俗物となりたい、しきりに俗世が戀しくなつた、神韻縹渺は近來まツびら御免だ」

いひつゝ片手を伸ばして枕頭のマッチを拾ひ、煙といふ字は失せて草ばかり残る吸烟一服ばツと吹き出せば、天井に昇る龍の形も平生より瘦せて影薄きを、こなたの倉橋幸藏おもむろに見遣り

て冷かに笑ひつゝ、

「それ見ろ、いはないことか忘年会も除夜の宴も身分相應、最初の牛肉半斤白馬二頭で止せば宜いものを、なアに男兒こゝに食はゞ正に生きたる肉十斤を食ふべし、飲めば正に美祿一斗を傾くべしだ、あすの生命が分るものか、などと前後めちや〜勘定なしの大威張り、底抜の爛鍋をたいたいて、いはゆる東洋流の馬鹿豪傑を取氣ツて一時に遣ツたから、忽ち斯うだ、今更ら泣く音を吐いたとて何うなるものか、辛抱しろ、我慢しろ、我等の境涯で彼程の豪者を極めた後は知れたこつた、三日間、食はず飲まずに寝るといふ覺悟ぢやアないか、意氣地のない奴だ、けふは二日、もう一日だから是が非でも無理に寝ろ、四日の食料を一夜に盡して驚かない位の奴が、なんだ其吼え面は、ねエ上田、さうぢやアないか」

きくより上田力も五體ニヨコ〜と夜具の中より踏ん伸ばしながら、

「さうとも、その覺悟で遣ツた今更、卑怯千萬、黒田の様に愚痴をこぼしたツて何うなるものか、人間の餓死は一月以上かゝるといふから、まづ一命は大丈夫、三日や四日の空腹がなんだ、しかし倉橋、五日の後たしかに君が胸中成算ありかね、もし無くんば、いさゝか僕も工夫せずんばあるべからずだ」

「いや御懸念に及ばずさ、年と共に新なる今年の腕だめし、これまで萬事、諸君を煩はして常に後陣に控へた僕が、試みに一番うんと先頭に立ツて遣ツて見よう、機會よくば眼前の衣食どころか、姑息の策を捨て、よしや遠大の計畫は覺束ないにもせよ、せめては一年二年の安全を取る氣だ、ついでに我等が兄弟、かの川上三吉を山から引き出しても見せうが、黒田、上田、二計とも美事に出来た曉は、もはや空しく呼子鳥となつて此古巢に啼く時ぢやアない、いさや勇往奮進、もろともに手を連ねて、勇しく當世に吶喊し、おの〜多年苦學難行の收穫を一時に收むべしだ、あゝ愉快々々、それを思へば今日この空腹ぐらゐ何のそのだ、シツかりしろ、男兒取るべきの業は脚下に轉ツて居るぜ、乃至また我を迎ふの機運は眞向正面から呻ツて來る世の中だぜ、功名富貴さらに豆を拾ふが如く識見徳望また靜に笑うて收むべしだ」

其十

霜月師走よりも人の心の淋しきを年の二月とは、浮世の經驗者が人間の内證を穿ちし言葉さても宜なる哉、去歳の油斷の大峠エンやらヤツと打越えて、わづか一夜に新玉の春を迎へし太平樂の後、えゝつまらない今年に限らぬ正月新春、かせげな善かつた今更の後悔に、やがてまた家

庫入らぬ花の満紅を眼前に控へて、こゝしばし苦樂の境に前後左右を考へつゝ、内心いづれも首をかたげて沈み勝なる折しも、その思案の勝をボンと叩いて満都を驚かせし一論文あり、題して『居家處世』といひ、世を忍ぶ投書家の名を『菩薩心夜叉手』といひ、掲げし新聞紙は不偏不黨をもて我國に有力なる『朝夕新聞』なりけり、一語一句の警は拊指をもて眼球を撓るが如く、一章一段の明は豆を掌上に載せて數ふるが如く、曲學こゝに筆を弄して礎盤の異なる洋癖者流に阿らず、醜弄こゝに筆を枉げて屍となれる頑冥保守の俗論に與みせず、縦横不羈、翱翔自在、巧みに當世社會の裏面と當世人心の腦裡を寫し出すの傍ら、これに一個の見識と緻密の觀察とを加へて、諷刺的に論じ、批評的に解し、あはせて一道稜屑の斷案を下しつゝ、みづから其間に立って人生の指南車たるが如く、殆ど半月の長きに互りし大膽不敵の論文『居家處世』の著者そもや何者ぞや、文壇ために動搖めき満都しきりに喧傳して、これが毀譽褒貶の説を掲げし新聞雜誌およそ十二の多きに及べるを、野末の小屋にも劣りし沙入村の破床に日夜空腹をかゝへて眠れる倉橋幸藏、ひやゝかに笑うて徐ろに二人を見返りつゝ、

「おい黒田上田どうだい、今日の世上すべて斯の如しだ、實に脆いものよ、實に呆れたね、思へば氣の毒千萬のこつた、僕のやうな白面黄口の書生、いはゞ我みづから未だ物にならない蛙の

子、おたま杓子が水に游いで後に曳く絲目の漣、ちよつくら一寸と味を遣れば満都喧傳まッこの通り、あゝ文を作るより田を作れ詩を作るより芋食ツて尻を放れとは古人の惡口だが、今は反對、草を撈るより文を作れさ、都々逸を唄ふより詩を吟じろだ、なんのこたアない、全然おでこ芝居の役者同然、紅と白粉を面に塗りやア權平も太郎作も俳優と名が付くのよ、たゞ、曉の星の數程もあらうかの識者に對して恥づるのみ、世上一般かいなでの名を賣り業を求むるには手も足も入ることちやアない、人を馬鹿にして自己ひとりが伶俐ぶれば宜いのよ、腹は木でも薬でもまゝの皮袋、みてくれ坊主の鼻の先で、噫と歎じて時に君子がり、己が己がと出しや張ツて時に豪傑がり、ふんと冷かに笑うて時に學者ぶり、又時に世間あたりす觸らすの愚となり狂となり滑稽洒落となつて世の愛敬を求むるも肝要、むかし著書は百萬の敵を防ぐよりも難しと聞いたが、當時は一本の筆よく門戸を張るに足り一枚の反故紙よく浮世の風を防ぐに足るだ、ありがたいやら、なさけないやら、面白いやら恥づかしいやら、勿體ないやら」

其 十 一

鼻の上の近眼鏡まづ學者らしく、鼻下の八字髭みるからに當世めいて、五分がりの頭髮に帽子の

痕おのづから消えざるは以て家外の業に寸暇なきを知るべく、洋服の肩と襟に多少の塵埃を浴びて加之も背の色さらに一際秘めたるは、常に人車を驅ツテ社會に奔走するの才子、おのが生命は片手に脇挿む折靴の中に託して、茶褐色の磨靴きゆうと踏み鳴らしつゝ、年輩は今を壯齡の三十一二の男、汐入村の破巢に訪ひ來たツて一葉の名刺を差出しぬ、

「倉橋氏は在宅ですか、名刺の者、少々お目にかゝりたう御坐います」

倉橋幸藏その名刺を取ツて見れば、「朝夕新聞社員、小川大助」おもはず笑を含んで二人を見返りながら、聲を潜めて喜ぶが如く嘲るが如く恥づるが如く、

「おい上田黒田、まア安心しろ、わざ／＼米と衣類を持參の珍客御入來だ、語に曰く、寶物に花を飾れと、この處すゐぶん大俗となツて丁寧にしてやらうか、お客様だ、ねエ」

さアサツと此方へお通り下さいといへば、サツと通れば壁を突き破つて裏田圃に顔び出づべき怪しの一室に、主客相對して慇懃の挨拶、

「僕が倉橋幸藏です、して御用は」

「いや初めて御意を得ます、私は朝夕新聞の者で小川大助と申します」

いひつゝ眼鏡越しに先づ倉橋の面體じろりと見詰め、やがてまた四邊じろ／＼見廻しながら、時計

の錠鎖にマニラの葉巻を當て、吸口を切るや否、蠟マッチを出して紫色の煙はツと吹く手際の早さ、どうしても交際場裡の才子この邊に衣食の半を保ちて、奥の手は玉突の名人然たる當世流行の上面に、悠々寛々と八字髭を捻りながら語り出しぬ、

「え、今日わざ／＼伺つたは外でも御座いません、過般、弊社に御投書下さいました『居家處世』の御高論、文といひ説といひ實に近來の騒がせ物で、いやはや感服、敬服の至極、全體どこの奴だらう馬鹿に疾い腕ぢやアないかと、あは／＼／＼失敬な言葉ですが、讃辭に窮して殆ど敵意を挿むほどの景況、全く驚きましたね、ところで弊社は爾來しきりに御本人の搜索に掛ツて、やう／＼今日推參した次第です、無論これまで御匿名か何かで定め御著述も御座いましたらうが、お支障のない限り御履歷を伺つた上、もし、萬一にも叶ひますなら、これを御縁に長く弊社へ一臂の御力を願ひたいのですが、如何で御坐いませう」

をりしも上田力が臺所より運び出す濃茶の缺碗、黒田健次が此方より持ち出づる半破損の煙草盆、嗚呼これもまた浮世がさする業と思へば哀れなりけり、

倉橋幸藏は一入さらに慇懃、浮ばんとする片頬の笑を打消しながら、

「いたづらの戯文あやまり傳へられて、實に汗顔至極です、なアに御覽通りの境涯で、御覽通り

の青書生に、人らしい履歴などのあるべき筈もないです、無論また匿名ななかで著書に従事したこともないです、唯かくの如く現れたるまゝの人間、かの拙文愚論の故を以て仰せの云々に至つては、ちと困りますな、鉛が銀に見えたところ甚だ迷惑しますな、況や此孺子を貴社へ招聘めいたる御使いよゝゝ痛み入るです、しかしながら、かの論文を倉橋幸藏との御鑑定は全體、どうして分りましたね」

「それが所謂の社會の耳目で、むしろ其職の警察官吏よりも鋭いと申したい處ですが、實際は弊社の大株主に富田正次といふ人物が御座いまして、その富田の書生に吉田某とか貴下と御朋友のよし、それからそれと段々の探索、竟に『菩薩心夜叉手』なる號は、乃ち倉橋幸藏氏といふことに」

「はゝア、なるほど、濱町に居らるゝ富田正次ですか、いや善く分りました、なるほど、實に世の中は油斷大敵、おい上田、一寸茲へ出てくれ、また貴公が御引合だ」

其 十 二

機に投じて翼を伸すも才物、機に反いて翼を收むるもまた才物、時に乘じて爲すも達人、時を知

つて爲さざるもまた達人、されば屈伸消長、利害得失、いづれ皆これ人間精華の活動なれども、憫れむべし其間に彷徨うて風の間に〳〵生涯こゝに宙ぶらりんの奴が、はやく身を退いて故郷の垣根に天國あるを悟らず、愚性いたづらに紅塵百尺の都下を慕うて、いけもせぬ半生を萬卷の讀書に埋め、果ては病みはうけたる死に損ひの身を果敢なき浮世に引き摺り廻して何を目的に何の功がある、男兒うまれて雨とならずんば風となれ、四通八達の巷に横行して兩肩山の如く聳えすんば、むしろ山水明媚の間に脈を枕として太古の民たるに如かず、まことや英雄首を回らせば是れ神仙、有爲の書生踵を回らせば是れ獵夫だ、へん今頃は函嶺の往方に幾萬の有象無象が日夜藻掻いて何を仕居るぞ、おもへば可哀や、いたはしの奴等、こゝに川上三吉なる者ありと知るや否、迎も知るまい、彼奴等十萬の眼を皿にして我一人を知らずとも、我一人こゝに豆の如き眼を光らして彼奴等十萬人の行末を知ること、鏡にかけて照らすが如く闇の夜に火を見るよりも昭かなりだ、いざや此間に乃公みづから御手を下させ給うて、あはれ明治の今日は繪畫の外に知るまじき一働きを演じてくれんと頭には細繩の武者頭巾、身には手織の筒裡やうゝ、尺を越えて短刀と猪目するどき斧とを腰に横たへ、肩より胴脇に網袋を掛けて、刺子つゞりの紺の脚絆、よりに糾りたる布草鞋、右手に一挺の鐵砲を携へ、左手に一頭の獵犬を曳きつゝ、人跡たえたる熊野

の奥の山また山を見上げて、おもはず笑を含みし川上三吉當年こゝに二十七歳、眉おのづから逆立ちて飛び出でたる黒目がちの大臈、細肉や落ちて骨を露せども口唇ふはりと肥えて一文字を引き結びたる男振は、東京の土一升金一升の中央に育ちたる清ちやん美ちやんをして騒がしむるに足る、ましてや花柳狭斜の妓をして見せしめば歌舞伎を本物に仕立てた醜いところ何とか吐すべき、されど本人さらに知らず願はず、たゞ胸中に宿れる一段の男振を叩いて世上の俗物を笑ふのみ、

共 十 三

我いまだ我筆を信じて家をなすにあらす、我いまだ小成に甘んじて得々たるにあらす、されば自ら信ぜざる文を賣つて甘んぜざる小成に坐しつゝ、以て今日の新聞社より米鹽を求むること恥づかしや市井名利の奴に似たれども、奈何せん流るゝ歲月この茅屋を促して飛ぶが如き春秋頻りに讀書の窓を叩き、苦學十年の身も流石に浮世の秋は悲しく、衣や薄き衣や寒き霜の朝の肌も包まで、こゝに空しく三人が痕せたる骨の哀れさよ、いざ然らば我一人まづ初志の半を割いて衣食の犠牲となり、残る二人の同志を抱いて徐ろに此境涯を這ひ出でんのみ、固より勞働するがために

學ぶの我等ならす、學ぶがために卑しき勞働もする我等が身ぞと、多年ふかく藏して何事にも後陣に控へたる倉橋幸藏が、俄に案を拍つて先頭に立ちし『居家處世』の一論文は、忽ち都門を驚かして朝夕新聞の客員となりつゝ、『菩薩心夜叉手』の化名を二十五圓の月俸に賣り付けぬ、但し一文の代價五圓、一箇月に五個の文を寄するの約を結びぬ、倉橋幸藏が初志の十分一を割いて、汐入村の破巢に浮世の風を防ぎしかば、月に二十五圓の收入これを三人に分ちて八圓ながし、さらばとて貝殼胡粉の製造を廢して、おのゝ一向專念に純粹の書生となりつゝ、上田力が愛敬の失敗しばし遣り損ねたる滑稽も此時をもて最後とし、黒田健次が生れついたる痲癩玉の横紙破りも此時をもて最後とし、いづれも俄に仔細めきて外面の活氣や衰へたるに似たれど、これより内に養ひ心に燃ゆる一團の猛火さらに天を衝いて、三人もろともに本音を吹くべき五年の後は何ならん、鈴を亂すが如き響聲變々、一鞭はツしと馬首を聯ねて世に現れ出づる時は、すぎし吊板の飛乗も反故張の紙帳も晴昔の夢となつて、二日用意の空腹かへつゝ舊知の門を驚かせし亂暴狼藉も一場の昔語、生き残りし古兵が、古戰場を過ぎて血痕まだらの野邊に花咲くの感あるべし、

倉橋幸藏、黒田健次、上田力、以上三人の末に坐を占めし少年、かの吉田雄藏が消息を聞けば、

濱町の富田正次が家にあつて唯これ日夜汝々たる罷勉の學生、いまだ其堂に遠しといへども、巢立の隼しきりに大空を覗うて、侮りがたき翼の色たしかに他日を思ひやられぬ、以上四人の先達と仰がれたるは川上三吉、惜しや十年の苦學を一朝に捨て、天生の才氣を草叢に埋め、故郷の山に猪猿を追ひ廻して更に人間を顧みざる不思議の狂態も、あはれ倉橋幸藏が泣いて諫むる友誼に感じて再び都門に出づべきか、さては我みづから我に返つて俄に山を飛び出すべきか、とにかくにも五人男の大立物、このまゝにては著者も意に満たず讀者も定めし不満足、決して許し給はざるべし、こゝに萬縁叢中の紅一點、かの富田正次が一人娘、ことし十九の玉を欺く美人に、もしや五人男の中いづれを良人と選ばしむれば、神かけて末をたのむの意中あゝ果して誰にか落ちん、平生より名を傳へきく川上三吉か、今は我家にあつて朝夕その勤勉を見る吉田雄藏か、但しは謹慎沈重の倉橋幸藏か、ほとばしる豪放磊落の黒田健次か、十歳のむかし水死の生命を救はれし恩人上田力が無邪氣の一徹にあるか、これもまた著者が筆のまに、聊か讀者も御氣にせられし所ならんか、

當世五人男(後編)

同じ五人男なれど前編後編と分ちしかば、又もやこゝに某の狂歌をかりて面影をうつす

ふけやふけ嵐の山の初あらし誰に憚ることもあらじな
杜鵑なうくお宿まゐらせむわびしけれども卯の花の里
冬ごもる安達が原も雪消してあらはれいでし鬼鹿毛の駒
夕立の雨のありだけふりすぎで今夜は空に水無月の影
夏のくる足あともなし眞白なる卯月の花の雪の中には

川上三吉
倉橋幸藏
黒田健次
上田力
吉田雄藏

其一

鳳鶴が翼を伸し損うて曉の鴉につつつかれ、神童が嫁を買うての裏屋住居、それにはあらねど當

今の書生に欲しきものは、野暮と正直と貧乏神の滋潤扇、これに天性一分の滑稽を含んで、わざとならぬ自然の愛敬三分、をりくは呵しき失敗を重ねて我も笑ひ人にも笑はれ、家を成し身を立て、の後までも妻子に語る昔の一興、あはくこんな馬鹿げた事もあつたよ、最後の勝利に一點の花を添へたし、

されば書生の伶俐すぎたると處女の浮世馴れたるは二月の瓜、臍の上の見てくれは妙なれど、箸とツた上の味なく、十歳の翁、二十歳の先生、三十の大家、あゝ目と口は利けども腹に一物なく物の理に明かなれど心の理に闇く、人を凌ぐに強けれど世と戦ふの勇氣なく、眼前の世智に長けても生涯の覺悟に疎く、果は一寸先の闇雲に乗って飛び歩くがため、面の皮千枚張となつて人情は紙一枚より薄く、いつしか百鬼あらしうて白晝の横行と、或人は歎じたりき、ある人の歎聲いまだ悉く當らねども、つらく見れば今の書生なるほど凡て才子すぎたり、おしなべて學資に十分すぎたり、早くより大人備すぎたり、わけて第一おそろしきは古昔の好物も及ばぬ巧言令色、世事に馴れ過ぎたり、交際に巧み過ぎたり、事物を穿ち過ぎたり、年に似合はぬ通人ぶり、がらにもなき風流ぶり、前後見すの策士ぶり、心に一定の見識なくとも目から鼻へ抜け通る輕業主義、身に一點の贅なくとも爪先から頂上まで忽ち響く電氣仕掛、これを時勢につ

れし人智發達といはゞいふべきも、いまだ家を成さざる青年の身としては殆ど乾燥無味、精華いづしか去つて、たゞ機關人形の動くを見るのみ、されど他日の千兩よりは眼前の五兩、手織木綿の丈夫一式よりは綿縮緬の世の中に、さても時世を知らぬ珍紛漢の寄合と笑はれながら、頑として當世の潮流に溺れず逆さまに彼等を憐れみつ、年が年中空腹かゝへて暮せども、一團の抱負に腹便々、たとひ呑牛の氣を遣り損うて雑魚一尾喰へぬ最後を取るとも、みづから信じて自ら作る、我黨の本懐おもしろさ、ヘン碌々たる紅血染の公等が知るところにあらす指でも咬へて引き退ンでお在やれさと、同志の變物相集つて、都門の片邊り汐入村に苦學難行の巢を構へたる五人男は、いはでも知るべき例の顔觸、紀州熊野の山奥に生れたる川上三吉、越後新潟在の倉橋幸藏、つゞいて奈良縣大和の産が黒田健次、岡山縣津山の上田力、大分縣の因部で芋に育ちし吉田雄藏、さても其後さるほどに、五人のうちの川上三吉は學識度量ともに此徒の兄品ながら、何を感じけん十年の苦學を一朝に抛ち、都の砂を後足に蹴つて故郷の山間に逃げ入りしまゝ、呼べども出でず招けども來らず、日夜猪猿を追ひ廻して生涯これに終らんとの消息、また年少末席の吉田雄藏は、あらたに巢立の隼、濱町の富田正次が家に食客となつて去り、あとに残る三人のうち、倉橋幸藏は流石に年長沈着の働き、一本の

筆に宿志の半を裂いて朝夕新聞の客員となり、月に五篇の論文代價あはせて二十五圓に際間もる浮世の風を防げば、黒田上田の二人まづ當分は其脛を嚙ツて、飢ゑも凍えず人間なみの顔色を呈しぬ、おもへば過ぎし吊板の飛乗も反故張の紙帳も昨日の夢となツて、二日用意の空腹かゝへつゝ舊知の門を鷲かせし亂暴狼藉も一場の懷舊談、燈火の下に語ツて互に笑ひぬ、實に馬鹿げたツけなウ、

共二

苦學難行も時機あり際限あつて、嵐の夜半も雪の日も布子一點寒晒しを生涯の目的ならねば、三人むなしく日夜の空腹かゝへて勞働せんよりは、もはや道の半分を過ぎて堂に近づきし我一人まづ茲に犠牲となツて、いづれ取るべき宿志の十分一を願てば、もろともに眼前の飢餓を凌ぐのみか、聊か抱負の一端を陳べて己が身の輕重も知るべく、かつは餘所ながら當世の難易深淺をも量るに足るべしと、こゝろみの初陣に秃筆を染めし『居家處世』の「論文は忽ち都下を騒がして『菩薩心夜叉手』の奇名また流俗の額を撫でし曉、程もあらせず朝夕新聞社より感勸の招聘を

うけて、さすがの倉橋幸藏おもひの外の輕き世上に驚きぬ、されど別に自信の本領あつて今こゝに唄はるゝ名を悦ばねば、あくまで世を忍ぶ『菩薩心夜叉手』を用ひて『倉橋幸藏』の本名を明さじと、我も心に誓ひ新聞社にも誓はせつゝ、約束の一文五圓、月に五回、あはせて二十五圓の原稿料を受取るべき月末とぞなりぬ、
「おい黒田上田、これから僕は新聞社へ往ツて、あはゝゝゝゝ賣文の代價、今月分を取ツてくるから、何、むゝさうよ、此方から辭を卑しうして頼んだ譯ちやアなし、先方から禮を厚うして招かれた客員だもの、黙ツて居ても持つて来る筈だがね、どうせ取るべき金いづれ必要の金を、さう體裁ぶツて痕浪人の高楊枝を學ぶにも及ぶまい、浮世といふ證人があるから、ついでに新聞社の胎内くゞりを遣ツて、参考のため編輯局その他一切の景況を見物かたぐだし、
いひつゝ起ツて壁にかけたる古帽子を頭に戴けども、外出の著替なければ其まゝの破れ布子一枚、これさへ去年の秋に夜具の綿を引き抜いて層屋の籠に押し込み、やうく求めたる柳原の店晒し、今は着晒しとなツて綻び縫裂き縫目の亂れ、さては机の下を探ツて残んの落武者たゞこれ一騎と哀れに見ゆる腰折の巻煙草を咬へて、いざや立出でんとする倉橋幸藏を、天性なさけに脆き上田力、おもはず見上げて氣の毒の顔色、

「實に濟まんな、君一人に働かして今日また遠路君を煩はすのは實に濟まん、僕の代理で宜かア一走り往ツて来ようか」

「なアに、それに及ばん、ついでに社長とかいふ人物に逢ツて、爾後の文章上、ちと打合せたい事もあるから」

語る背後には例の黒田健次、豆鐵砲にうたれし鳩の如く目をパチつかせて、體を斜めに額越の無頓着

「おい上田、互の交際で餘計を世辭をいふなよ、ついでには倉橋、歸途に何か身になるものを買ツて来てくれ、不破の關屋の片廂で此あばらやに此ごろの寒天、まして去年除夜の牛飲馬食以來いまだ曾て一片の肉にも御意を得ず、山河隔絶たえて音信不通だからね、一時も早く面に膏の乗るものを、たのむぜ、實に近來の野菜腹ちやアうか〜と駆け出すと骨放れがするかも知れない、故に此ところ大に食うて元氣活潑さらに一刷新すべしだ」

官海の餘瀝を吸はず民黨の政臭も嗅がず、獨立獨行さらに一種奇警の批評眼と一段出色の指南車をもて自ら任じ世にも許されたる朝夕新聞社は、數寄屋橋門外の壕端に聳えて巍々たる和洋

折衷の一構へ、をりしも其日の午後二時より三時までの間、これを斯道熱狂の眞最中として、文明の戰陣を張りし社前の出入混亂いと織るが如く、いづこよりか車夫の臂を叩いて馳せ歸るは今日の先登第一に兜首あげたる意氣揚々、おのれやれ我も劣らじと待ち設けたる人車に飛び乗ツて忽ち宙を駆け出す猛勢、さては武運に塌き果て、雑兵葉武者の影も得追はず、すご〜と翌日の紙面の埋草を考へながら戻り來るもの、乃至また戰場に臨んで胸に噓八百の手柄談話、かうして何うして驚かしやらんと巧む者もあれば、日々千態萬狀、朝夕の飛耳長目、たゞ此一時に掻き集めて内外ともに繁忙を極むる其中へ、汐入村より鐵道馬車も不知顔なる膝栗毛の胸にステツキを鞭ツて入り來りしは例の倉橋幸藏、前後左右の混亂に目も呉れず破れ布子の肩を聳して、受附の面前へ一葉の名刺を差出しぬ、しかも原稿紙の片端に走り書の墨痕くろ〜「菩薩心夜叉手」

受附の先生おもはず名刺の文字と倉橋の顔を見上げ見下して、

「足下は御使者ですね」

「いや本人です、かねてお約束の月末にもなりましたから、推參したと會計の御方へ御通じ下さ

す」

「あアさうですか、それでは、御當人で在らっしゃいますな」
なほも疑ふ氣色に流石沈着の倉橋も稍むつとして、くどいと言はぬばかりに首肯せば、受附先生
そのまま奥に入つて聽てまた出で來り、俄に慇懃の體、

「どうか彼方へ、これ小僧、應接所へ御案内せし」

給仕の小僧に引かれて社内の奥ふかく、應接所に待つ間ほどなく入り來りしは會計主任、つゞいて來りしは曾て我を招聘の使者に立つたる社員、正眞が賀札かといふ鑑定役と思へば、わづか二十五圓のために人相面貌の本阿彌を要する我身、嗚呼なさけないやら呵しいやら、原稿料を受取つて懐中にをさめつゝ、まづ引かれて編輯局に上れば、よしや女一人を口説き落すこと能はずとも三寸の舌と八寸の筆を持てば忽ち天下を動かすべき議論家、よしや家子に妻の窮することありとも出でても宇宙の森羅万象を機關口上に轉るべき達辯家、よしや家に妻子の窮することありとも出でては商界の風雨電雲を捉へて捻り潰すべき經濟家、よしや壁一重となりの内證を知る能はずとも青ざめたる頬の上に金縁の眼鏡を光らして社會の裏面を穿ち人間の神祕を發くべき炯眼家、乃至また浮世の市井に通力を得たる大天狗小天狗木葉天狗嘴天狗に至るまで、いづれも机を並べ額を鳩めて一堂に會せる景況、怖しくもまた物凄かりける、

倉橋幸藏さらに慇懃の禮を正して一同に對ひつゝ、

「いち／＼御挨拶は申しませんが、菩薩心夜叉手といふ變てこな名で近來紙末の餘白を汚す投書家の一人で御坐います、爾後お心易う願ひます、いはゞ厄介な食客とおぼしめして」

編輯局、庶務局、機械場、職工場、探訪員の寄合所、小使部屋の片隅に至るまで、凡例ありとあらゆる新聞社の胎内めぐりに、耳目の外なる無量の感を起しつゝ、やがては我もまた同じ落の身ぞと思へば、うづ高く押し寄せたる紙屑の中よりも一片の珠玉を拾ひ、むら／＼と立つ塵埃の底にも一個の快樂を求め、あるはまた才子才物が意氣揚々たる八字髭に一卷の哀史を讀んで、喜憂こも／＼社門を出でんとする時、懷中に手を差入れて思はずニコリと笑を含みし淋しさ恥づかしさ、我ながら見下げ果てたり、えッ畜生め、これでも倉橋幸藏か、あたら男兒が二十五圓に潰された、

されど苦學難行こゝに十年の久しき以來、あはれや、曉の夢にも見ざりし二十五圓は二十五圓、さぞや二人の友が待つらん、片時も早く家に歸つて芳志を分たん前、まづ上田がために此寒天のシヤツなきを求めんか、黒田が咽喉を鳴らせし肉一斤を整へんかと、おもはず歩を止めて思案の横合より、大道の砂を蹴つて風を切る章駄天走りに、車夫の叱聲、おどろいて飛び退きつゝ見れ

ば濱町の老紳士富田正次なりけり、
そも上田力が不思議の縁より吉田雄藏をあづけ、つゞいて去年の秋に夜具六枚の恩義、其後は朝夕新聞社の大株主と知るからに、倉橋まづ殷勤に禮を正せば、車上の富田も帽を脱いで會釋しつゝ、

「どちらへ、むゝなるほど新聞社へですか、いや居家處世の御高論以來、引き続き御壯の筆鋒、蔭ながら敬服して居ります、ついでには少々お話し申したい事もあり、かたく失敬ですが、其邊まで御一緒に願はれませんか」

いひつゝ車を降りて案内顔に誘へば、倉橋幸藏も辭するに言葉なき道すがら、馴れぬ口より浮世の挨拶二つ三つ、却つて物の愛敬を添へぬ、

「實は過般、たゞ一場の遊戯に投じたものが、今ちやア何だか本業のやうになりかゝつて、裏心ちと考へて居ます、第一、あの變名が忽ち倉橋幸藏と知れたには驚きましたな、夢にも吉田が御厄介になつて居る貴下の新聞とは心附きませんから」

「あはゝゝゝ世の中は案外に狭いものです」

百萬の人家うちつゞく紅塵の眞只中には、さらに似もやらぬ其名を田毎とて、山海の美味佳肴に飽き果てたる紳士を客とし、魚は中落のせぬ白魚などを捧げ、野菜は拇指の腹ほどなる茄子を捲り、鬼の金齒の一粒選、氣負の男が拜み搦きの米を添へて、此あたりに一騎打の勝を占めたる料理屋の二階、しかも奥まりたる一室のうちに、かの富田正次と倉橋幸藏と差對うての談笑いとど細かに打解けたり、

がンがら生育の書生社間より曲り出でて、牛の餌にさへ漏れたる草の葉蔭に身を潜めつゝ、年中の寒かたびら鹽を舐めて暮せる貧苦なれども、さすがは天性沈着の倉橋幸藏、わざとならぬ態度いよゝ平然として、なかば飲み掛けし盃を下に置きながら、片頬に笑を浮べて靜に語り出しぬ、

「途中はからず御馳走になつて、餓虎みだりに群羊の骨まで舐つた見苦しの體、あはゝゝゝ御覽の通り忽ち眞赤です、もう不可ません、なかゝ上田とは霄壤の差、彼は折々伺つて随分酒量を現したやうにきいて居りますか」

いひつゝ又もや箸をあげて憚りもなく残肴を漁れば、老紳士富田正次おもはず満面に笑を含んで、「あア上田さんですか、大に飲める人だよ、しかし幼少から相も變らぬ天真爛漫で、いつ見ても

愉快な人物です、かねて御聞き及びもありませうが、私が岡山縣に塾して郡長をして居つたころ、少女が學校からの歸途に誤つて水へ溺れたを扶けてくれた恩人です、だから去年の夏、ふいと居住を知つて以來、及ばずながら種々の世話もして上げたいと思ひますが、さて例の性質ですから、むしろ放任しておいて、たゞ依頼せらるゝ事だけは何時でも引受けて盡力する心得です、ついでには同志苦學の足下を始め、故郷の山へ引き込んだ川上某とやら、及び黒田氏のこと、且は目下拙宅にある吉田のこと、いち／＼いづれも他人とは思はないです、まして私が大關係の新聞へ足下が一臂を添へて下さる今日、いよ／＼其間に妙な縁が引きましたな、ついでに願つておきますが、もし上田氏の身に何か事があった時は、そつと足下から御通知して下さい、私に取つては娘が生命の恩人、せめて百分一でも報いたいです、とかく彼の先生ちと仙骨を帯びて居ますな

「さうです、いかにも行状は少々人間に遠いかと思ふ邊がありますよ、しかし心の正直忠實に至つては殆ど當世稀有の人物で青竹を割つたとは彼のこと、をり／＼其天真に反射されて我等慚愧に堪へんこともあるです、これに反して黒田健次といふは、心身ともに餘り人間に深入し過ぎた男で、しば／＼腹の立つことも御座いますが、さて口ほどに毒のない奴です、同志五人のうち、

たゞ惜しむは川上三吉、どうか此人を再び都門へ引き出したいと考へます、また目下御厄介になつて居る吉田雄藏は御覽通りの少年で、いまだ風塵の一端も解し得ぬ初學生、この上よろしう御教訓を願ひます、下つて野生倉橋幸藏かくの如き無智短才の不幸兒、なれども聊か前途に身分相應の抱負も抱いて居るつもりで御座いますから、どうか御關係の新聞社外、別に御眷顧を願ひます

「いや足下の事は、かね／＼上田氏よりも聞き及んで、實は竊に敬服して居つた折柄です、御承知の通り私も子といふは娘一人で、いやはや行末の心細さ、ついでには何かと、この後いろ／＼の御相談にも乗つて戴きたいほどの儀で」

「いひつゝ手を鳴らして更に酒を命じ肴をあらため、とけかゝる心の絲口、いとど細かに見えたりける、

其 三

本來の宿志ならねど時に取つての大枚二十五圓、これを虎の子として懷中にあたくめ、おもはぬ途中で逢ひし馳走の料理、夢みたやうな美味佳肴に腹の蟲を驚かし、たえて久しき目の邊ほんの

りと酒氣を帯びて、心地よげの吟聲かすかに唇端を漏らしつゝ、醉顔おもむろに風をきる時は十年以來の菜色を忘れて、王侯相將なんのその、我も雲に乗つて下界を見下すほどの勢ひありながら、かくても倉橋幸藏、鐵道馬車の便をからず辻車の聲も耳に入らず、親より譲りの膝栗毛に駒下駄の音から〜と軽く、其日の夕陽ちかきころ汐入村の古巢に歸り來りぬ、

「おい上田黒田、いま戻つたよ」

たま〜夜に入つて割るゝほどに戸を叩くとも、うちには狸寝入の空軒ぐら〜と轟かして、さらに枕もあげぬ横着の黒田健次も、今戻つたといふ今日の聲は取も直さず二十五圓が叫び給ふ御聲と、忽ち起つて慇懃に迎ふれば、さすがの倉橋も呆れて苦笑ひしつゝ、

「おい黒田、貴公は餘り現金すぎるよ、時に上田は何うした」
をりしも厠の中に今を最後と絞り出す聲あり、

「やア倉橋、歸つたか、むさし鐘のかけはづし、僕は茲だ〜」

やがて三人車座となつて味噌すり鉢の火入を取囲みつゝ、倉橋幸藏が懐中より二十五圓、馬鹿馬鹿しいが賣文の代價一月分と投げ出せば、上田力が何とやらん氣の毒げの顔色に引き代へて、黒田健次が會釋もなき不平の目附、じろ〜額越に見上げて、

「おい倉橋、あれほど頼んだに何一品のお土産もなしか、それに君ひとりが櫻色とは、いよ〜酷いね」

「いや悪かつた、僕が言ひ後れて悪かつた、實はね、新聞社から原稿料を受取つて出掛ける途中で、かの濱町の富田氏に逢うて、無理に料理屋へ引ッ張られたのさ、その證據には二十五枚さらに一枚の不足もなし、數あらためた上で、めい〜好きな物を食へば宜いぢやアないか、誰が嫁がうとも三人の異體同心、そんな隔意があるものか、ね上田」

いひつゝ上田を見返れば、力先生や、怒氣を含んで黒田を尻目にかけつゝ、
「なアに、また例のお性質を遣つて居るのさ、一事一物、何か故障をいはないと氣の済まん男だから實に困るよ」

倉橋幸藏おもはず高笑ひして、二十五圓のうちより十五圓を引き去り、残る十圓を五圓づつ二人の前に差出しながら、

「さて兩公、こゝの此十五圓は來月分の衣食住として、その五圓づつを分割するから、あすの一日中に銀一文も餘さず遣ひ給へ、色情に關せざる外は人間萬事すべて御勝手次第、たとひ溝泥の中に叩きこむとも、たとひ非人乞食に呉れるとも、よろしく公等が心のまゝ、なに僕か、僕は今

日はからずも富田氏の馳走に逢うたから十分だ、たゞ謙んで兩公閣下が五圓の捨場所を見物したいのだ」

理を取って進むの鋭氣物々さらに撓まねども、形に依って奇を沽る客氣を深く卑しみ、沈毅周到みづから識者をもて念とせる倉橋幸藏がなつかしけん、俄の華奢磊落を粧うて、新聞社より得たる二十五圓のうち十圓を捻み出し、これを黒田上田の二人が前に投げ遣りつゝ、いさゝかの寸志、以て平生の苦學を慰む、公等おのゝ心のまゝに一日の快を食ふべしといへば、上田力おもはず眉を擧めて膝を進めながら、

「おい倉橋、君にも似合はン妙なことをいふね、何故、なぜつてよく物を思うても見給へさ、今日、君が賣文の徒となつて月に二十五圓を得るは、これ君が生涯の目的でなからう、たゞ我々三人が徒らに勞働して多くの時日を費すよりは、むしろ一人しばらく衣食の犠牲となつて相共に苦樂平等の便を計るといふ覺悟ぢやアないか、さればさその一人の君が犠牲となつて稼いだ必要の金で、あとの二人が無用の快を食つて何のためになるのだ、もし單に金錢の浪費を以て一場の快を食ふならば、一日に五圓ばかりの目腐れ金で何うするもんか、その二十五圓を全然で費つたつて足りないよ、五十圓百圓乃至數百圓を半夜の夢に散する奴もあるからね、もしまた二十五

圓が今の境涯に過ぎて月々十圓の費途に苦しむなら、よろしく十圓を差引いて殘金十五圓だけの文を賣るべしだねエ、黒田、いかな君でも、これにやア一言あるまい」

いひつゝ靜に見返れば、相も變らぬ無頓着の黒田健次、平然として猫の鼻より冷き額際に、おのが巻煙草の餘煙ばツと吹き上げながら、

「これさ上田、いかな君でも一言あるまいとは、ちと敬を失した言だね、いま貴公が論ずるところに依つて、いかな君といふ解釋を下せば、この黒田を以て元來利慾の奴といふのだな」

「あはゝゝゝゝなアに、さうぢやアない常に譎々たる議論家の君でも、これには議論を挿む餘地が、なからうといふのだ」

「ところが、お生憎さま、大にあるね、しかしその議論も仙人めいた貴公には無効だ、僕は唯よろしく年長者たる倉橋の意に従うて、おとなしう、やさしう柔順に謙んで、忝く此五圓を収めるから、もし君が不用なら其五圓も此方へ貸し給へ、なア倉橋、折角の君が芳志を無にする上田の如きは逆も語るに足らん男だ、おのれが飢ゑて死ぬ前に金を拾うても、遠路わざ／＼杖をついて警察署へ届けようといふ先生だからね」

いひつゝ高笑ひすれば、上田力むツとして膝前なる五圓を指先に弾きつゝ、

「僕は不用だ、鼻蕪ほどの端金で夢のやうな快樂がしたきやア、今の世に苦學せずと人車でも曳くさ、志節さへなくば大道の立ん坊しても生命は無事だからね」
 「おい／＼上田、さう他人行儀に怒ツちやア困るな、しかし指頭で弾き出された其五圓あゝ痛ましいかな、ついでに此黒田健次が拾ひ得さすべしだ」
 いひつゝ無遠慮の猿臂を伸ばして搔き寄せんとすれば、倉橋幸藏、俄に其手を押へながら、
 「こら待て黒田、貴様また例の横着をやるよ、待てといふに、たとひ上田が不用でも貴様に渡すことならない、貴様の分は既に取つて懐中へ入れたぢやアないか」
 上田力が五圓の紙幣を爪弾きして儼然たる潔癖と、黒田健次が猿臂を伸ばして横取せんとする無頓着と、方圓の器／＼に相撃つて一場の議論を生ぜしが、倉橋幸藏やう／＼其間を和解し、かつは事の起因を身の罪に浴びて謝するが如く慰するが如く言葉をつくし道理をおしつゝわづかに波瀾を治めて胸なでおろしぬ、
 固より意氣相投じて、蓋を傾けし交際、さら／＼さつと打解ければ雨後の月影なほさら清く、顔色も言葉も晴れて痕なき今は互に顔を見合はせつゝ、なんのこつたい馬鹿々々しい、結句たゞ倉橋へ對しての氣の毒さ、善かれ悪しかれ我々二人を弟品と思へばこそ、帝都百萬の家庫に金の呻

る聲はすれども四里四方の巷に鏗一文の落ちたるを拾はずと、その芳志しみ／＼嬉しく受けて二人おの／＼五圓を懐中に納めつゝ、あけの日、朝とく起き出でて淺草の雷門まで伴ひ、こゝにて左右おもひ／＼に立別れぬ、
 されど飽くまで浮世の風に骨も身も晒しぬいたる黒田健次は、太古の民に等しき上田の後姿じろ／＼見送りにて、あの仙人殿あの五圓を何處に如何して捨てるだらう、大道の砂塵に塗れて一日テク／＼と歩き廻つた後、費つたも同然と五圓そのまゝ持つて歸るか、但しは平生から欲しい書物の二三冊、乃至また紀州ネルのシャツ一枚ぐらゐを買つて歸るが關の山、どうせ猫に小判たしかに四圓は餘し居らう、たとひ費ひ過して驚くほどのあとでも、三圓ぐらゐ握り潰して歸るは定の男、えゝ惜しい事をした、うまく誤魔化して面白い處へ連れ出し、かけら憂と牛文も残らぬ泣ツ面を笑うてやれば宜かつたに、いやいや、さうは行くまい、頑固で片意地でも根が馬鹿でないから、うか／＼して謀る謀ると思ふ間に此方が謀られ、事によると逆さまにお荷物を背負ひ込むかも知れない、危し危し、この邊ちよつと君子を氣取つて危きに近寄るべからず、我はたゞ我分の五圓を思ふまゝに散すれば可なりだ、ところで此五圓、些少なれど久しぶりの五圓なか／＼心配だ、ともかくも先づ野菜腹の療治が肝要、米の水したゝか流し込んで五臟六腑を撃へた上のこ

と、何事も酒だ〜と思ひながら歩む途すがら、平生は乞食馬車にも無沙汰の眼を四方に配ツて、多くの中より一臺の新らしき人車を呼びつゝ、

「おい、おいこら車夫、上野まで急いで遣れ、何、なんだ、七錢下さいか、吝な事をいふ奴だな、十錢銀貨一枚賜はるから、宙を飛んで駈ける、十錢だよ、いゝか、聞えたか、貴様の言ひ價格より三錢の上客様だ、しかし餘り急いで抛り出すなよ」

五圓の大腹中で十錢の人車を飛ばしつゝ、上野の山下に着くや否、煙草屋に駈け込みマニラの葉巻五本あはせて代價三十錢、おい来た、そら一圓札でお剩金だ、ついでに蠟マツチ一個、ばつと紫色の煙を吹きながら、俄の上面に珍らしからぬ四邊を見渡し、悠々また寛々として歩みかゝりしが、あはれや身に破れ布子一枚、頭には屑屋も御免蒙るべき色褪の古帽子一點、されど懐中には四圓なにかし無事に鎮座しますす心地よさ、

おもへば往昔さる片山里の田舎大盡が京の島原へ行きし時、花柳の奴原うるさげに見下して心に冷笑ひつゝ、あなた様が大夫をお買ひなさるかとお問ひしに、大襟懐中より小判を詰めたる皮財布づしりと抛り出して、いや客は拙者にあらず、このものが買ひますと答へしも同然、この黒田健次この風俗でも天下通用の金で食ふに何物の遮るべき、いさや一番ぐいと飛び上つて此邊第一

等の會席料理を遣るべしと、聞き及ぶ松源樓上を望んで驀地に大手を振りつゝ、

「お客様だぞ、よい席に案内して甘い物コテ〜と出せし大威張りに威張りし筈なれど、おのれ自らお客様だと念を押して觸れ込みしに、天晴れ汐入村に野菜腹のお里を現しけり、

されど本人さらに心もつかず、山海の美味を竝べ灘皮の剝けし女中一人を取入れ、かつ飲み且つ食ひ、笑語喧々、吟聲轟々、しきりに大氣焰を吐いて、

「時に女、君は、なか〜美だね、加之も目附鼻筋口元の取合せ、きつと伶俐だよ、どうだい僕の細君にならんか、何、いやですよか、おたふく女、から世辭を眞に受けやアがツて、嫌ですよが聞いて呆れらア、ヘンかう見えても、神田本郷の下宿屋書生たア違ふのだ、節穴のやうな其眼球を掘り直して見る、こゝ五六年もすると二頭立の馬車で歩きなさる方だぞ、その時は名乗つて来い、せめて臺所の下女にでも遣つてやるから」

浮世の烏居敷を潜りし翁の言葉にいふ、財を取る道は多く易けれど、これを散する道せまく難きがため、その捨場所によりて其爲人の一端を窺ふべしと、こゝに倉橋幸藏は黒田上田の二人に五

圓づつを興へて、けふの一日に鑑一文も残さず費ひ果す様を見んと、おのれ一人汐入村の古巢を
守りて、待てば程よく冬の日の没り易く、點燈ごろとぞなりぬ、

されど二人の姿いまだ歸らず、夜も次第に更けて隅田川原に流るゝ水瀬、鐘淵紡績會社の器械
の響音も手に取る如く、かすかに開ゆる淺草寺の鐘の音は、はや初夜を撞き出して千住あたりに
犬の遠吠、もし山深ければ霜に咽ぶ猿の聲や聞えん、もし浪うちよする濱邊ならば、あまの苦屋
に通ふ小夜の千鳥や啼くらんと思ふころ、忽ち門外に叫ぶものあり、

「お歸りツ」

聲は儲に黒田健次、おのれの歸りを自己みづから喚きし體、はや既に飽くまで酔うたりける、

「お歸りだよ、おい倉橋、お歸りだといふに、これさ、出迎ひせんか、近來の三太夫、どうも横
着で困るな」

いひつゝ、熟柿に似たる酒氣紛々と先立てゝ、よろ／＼よろめく五體を運びながら、

「えんやらやア三尺港で、どツこいしよ」

掛聲のみは大業なれど身に正體なければ足も上らず、同じ庭口に跳ねたり飛んだり顛んだり、果
は其まゝ其處に平駄張ツて蟹の如く泡のみ吹きぬ、

いづれ此奴は斯くあらんと固より承知の倉橋なれど、さて今更に呆れて襟首を捻めば、やう／＼
捻まれて引き摺り揚げられ、ぱつと射すランプの光輝に醉眼まばゆく、おのが兩眼しかと押へな
がら片手に折詰料理、こゝろさしは優しけれど、いつしか底は抜けて蕨脱の殻とも知らぬ醉漢、
「おみやげ、おみやげだよ倉橋、決して僕の喰ひ残しちやアない、あらたに命じた松源の庖丁
甘いぜ、おつだぜ、なか／＼食へるぜ、時に彼の仙人殿は、まだか、どこへ往つたらう、あゝ醉
ツた、君が情によつて一日の大愉快、そも／＼何をもちに報いん、註文し給へ、えゝ酔ツた、
君にも僕の酔ツたのが判るか、なに判らないとは残念至極、さらば先づ今日の戰場を物語らん
と、坐を構へてか、あはゝゝゝ笑はしやアがる畜生め、たしか年は十九だと吐した、ちよいと
蹴の抜けた女よ、ところで僕がね、戯れに」

「おい／＼黒田、もう寝ろ、臥床を取ツてやるから、寝ろといふに」

「寝ない、決して寝ない、斷じて横にならない、寝るは死するに等しだ、一年に一度あるかなし
の此愉快を、このまゝ寝て殺すは惜しいもんだ、まアさ、おこして置いてくれ、夜と共に話すこ
とがあるから」

倉橋幸藏、うるさしと起ち上れば忽ち其裾を掴んで、黄色の聲をふりたて妙な手附をして、

「お前と一體かうなツたは、普通大抵の事かいなア」
 え、面倒と振り放せば、また取纏り、突き出せば武者振りつき、ひツかついで撞と投げ出せば、
 投げられて其まゝ斬の聲、ぐうぐうと立てぬ、
 おのが身知らずの餓鬼道に迷うて、腹は借物とや思ひけん、破るゝばかりに俄の美味を詰め込ん
 で、浴びるほどの酒に前後めちやゝの酔漢、そのまゝ路傍に仆れて夜中の霜にも打たれず、さ
 ては瘦犬の鼻に嗅ぎ出されて頬べた舐られぬを手柄に、やうゝ歸り来りし黒田健次、なほも一
 場の白癩を盡して後は、さながら死せるが如き寝姿を倉橋幸藏しみる見遣りて、あゝ困ツたも
 のだ

此奴こそ今宵は無事に歸らじと思ひし黒田が、たとひ酔漢にせよ、道も忘れず歸りしに、日のあ
 るうち必ず歸るべき上田力が、さても却つて訝かしや、何とかしけんと夜一夜うつゝながら待
 ち明せし甲斐もなう、はや東天の鴉啼いて旭ぼんのり横窓を射せども竟に歸り来る影なきに、倉
 橋いよゝ肩を擧めて起き出でつゝ見返れば、二日酔ひの黒田健次は石より重き首を夜具に埋め
 て、たしかに眼は冴ゆれど心は猶も冴えやらぬ苦しげの體、をりゝ泥龜の如く手と足とを差出
 して、冷え渡る破れ疊の上を心地よげに摺り廻すは酔醒の乾きし咽喉に一杯の水ほしけれど、さ

すがに昨夜を恥ぢて例の氣まゝも得立てぬ風情、これも衰れと倉橋幸藏、その枕頭に寄り添うて、
 「おい黒田、どうだい、酔が醒めたか、何だ苦しい、知れたこツた、君が酔うて君が苦しむは當
 然だが、正氣の僕を捉へて種々の狂態、實に昨夜は困らせたぜ、ちツたア覺悟があるだらう、水
 か湯が欲しけりやア遣らうかね」

いはれて黒田健次やうゝ半泣きの面を差しながら、なほも兩手に頭を押へて聲かすませ、
 「いやはや、どうも申譯がない、慚愧至極だ、定めし種々の白癩を盡したらうが、何分にも前後
 忘却、ついでには今日の一日も、どうか見逃してくれ、頭が割れるやうだ、とても起きられない、
 流石の黒田先生大閉口、以來禁酒々々、斷じて酒鹽も舐めまい、今から宗旨を改めて下戸になる、
 餅組になるから」

「うまく言ふぜ、そりやア天下一般に酒飲の十八番だ、誰が本氣に受ける奴があるもんか、しか
 し甚く苦しけりやア醫者でも呼んでやらうか」

「なアに君、黒田健次だ、酒ぐらゐで醫者にかゝつて堪るものか、時に上田は、まだか」
 「むゝまだだ、全體どうしたらう、あの男に限つて間違ひのあらう筈なし、第一、君よりは必ず
 先へ戻ると思ツたに」

「はてな、そいつア近來の珍事だ、もし濱町の吉田へでも泊り込んで、けふ吉田と同伴に歸るつもりぢやアなからうか」
「さうさ、まアさう思ふ外に差當ツての的もないね」
をりしも郵便と叫んで投げ込む一葉の端書、倉橋たち出でて受取りつゝ、差出人を見れば上田力、その文を読めば鉛筆の走り書、

都門に五圓の捨て處無之候故、やむを得ず東海道に膝栗毛を鞭ち往返一箇月を期して紀州熊野の川上兄が許を尋ね候、委細は彼地より將また歸京の上にて可申上候、
一月二十九日午前十時半

横濱までは汽笛一聲、幸ひに文明の子となり、
横濱よりは山河百里、試みに舊時の旅となる、

上田 力

倉橋 幸藏
黒田 健次
兩兄下

さらぬも友情ふかく涙に脆き倉橋幸藏、この一葉の端書に胸をうたれて哀れを催しつゝ、見返れば黒田が宿醉の體、それも堪へ兼ねる苦痛煩悶の體ならば憎からねど、をりつゝ夜具の中より鼻唄まじりの聲を漏らす横着に、さすがの倉橋も眼前おもしろからぬ心地して、
「おい黒田、貴様すぐに起きろ、どれほど苦しくツても今日は起きろ、決して寝かしちやアおかないぞ、さア起きた起きた、昨日の五圓は昨日の君が勝手だから、俄紳士となつて一日の贅を遣ツたも宜いが、今日の君は則ち、また元の汐入村苦學難行の君だから、ぜひ起きろ、自業自得の宿醉を以て家憲を破るなどは、近來ちと不可な、まして上田の此端書を見た以上は、ねエ、まさか君一人が白晝に夜具を被ツても居られないが、ついでに少々相談したい事もあるから、起きろ、起きろ」
眞綿に針を包んで刺すが如く迫れども、元來うまれついでに無頓着、多年の浮世に甲羅を重ねし場敷者、石地藏の頭を蚊に螫はるゝほどの感覚もなければ、きのふ五圓の施主たる倉橋へ對しての義理、やう／＼半面を現はして形見に残るマニラの葉巻一本、ぱつと吹き出す煙の中より額越の眼を光らせながら、

「あゝ一の裏は六で善い事の後は悪いと、かねて覺悟の上ながら、さて辛いな、頭が割れるやうだ、御存じの通り、僕は口に毒を持つても腹は正直一途の弱蟲だから、上田の手前やら君に對し、このところ無理に我慢して起きるがね、もし後で身體に觸るやうな事はあるまいかな、それが心配だ、この上また君に苦勞をかけちやア實に濟まんから」

「虚言をいへ、をり／＼鼻唄をやつてたちやアないか」

「やツ、聞えたか、悪事露顯の曉は僕も男兒だ、どりや潔く起きるべし」

口い輕けれど五體は重く、そのまゝしかと夜具に嚙りついて片手を伸ばしながら、

「おい倉橋、まア上田の端書を一寸見せてくれ、なんだツてまた彼の仙人め、餘計な眞似をするんだらう、いつも彼奴が馬鹿律義をやらすから忽ち僕に差響いて困るよ、第一、あの川上といふ男が一筋二筋で動く奴なもんか、おのれの氣に進まなけりやア古今東西の聖賢が手を連ねて往つても無効な奴に、凡夫淺慮の一人、あは／＼／＼見給へ、上田先生は此冬枯に東海道往返の御苦勞と來るから、もしまた行くなら行くで我々に一應の相談するか、但しは五圓のうち三圓某で汽車に乗り、大阪から殘金一圓某で遣れば宜いに、わざ／＼百七十里の山河を、おツ通しの膝栗毛たア呆れたね、お談話にならん唐變木だね」

いひつゝ又もやマニラの葉巻を取り上げて、七分は既に煙と化し僅に残る三分の火元近ければ、唇端を焼かじと危げに二本の指もて摘みながら、ばツ／＼と餘煙を吹く面憎さを、倉橋幸藏おもはず尻目にかけて冷笑ひつゝ、

「無理もないさ、ねエ、君のやうな物質的の人間ぢやア、あの可憐なる上田の愚を解し、かつ察して尊ぶこたア出來まいから、また川上も上田が愚に引かれて、後日は兎も角も、一旦は涙もろとも山を出る男でなくちやア、もはや馨しくないね」

其 四

あはれむべし倉橋幸藏が有爲の身を割いて暫く衣食の犠牲となり、宿志の幾分を枉げて絞り出せし五圓の金を、多年の空腹、近來の瘦腹、かしこし得たりと引ツ擱んで忽ち三寸の咽喉を鳴らせし一日の太平記、家に歸つて後も繰り返す管卷の泥酔となつて、果は二日酔の贅をやりし黒田健次の横着に引替へ、こゝに天性の質直からりと青竹を割つたる如き上田力は、その五圓を懐中に捻ぢ込むや否、忽ち都門を去つて十年の交情、由來の知己、念々さらに忘れぬ川上三吉を紀州熊野の山また山の奥より引き出さんと、横濱までは汽笛一聲文明の子となり、横濱より山河百里舊

時の旅となりつゝ、親より譲りの膝栗毛に鞭ツて、頃しも冬枯の東海道を眞一文字に駆け出でたる壯勢、あはれにもまた勇ましく、おろかにもまた優しく、天下をあけて當世の人情紙より薄けれど、この男が踏み出す友誼一片の熱腸には道芝の露も乾いて霜も溶けなん、雪も物かは、もとより旅の用意なければ、破れ布子一點きたるまゝの裾を引ツからげて、ふかば吹け、ふらば降れ、男一貫、前途の風雨を兩の毛脛に振り切り、足袋もなき皮一枚の足首に草鞋の糾紐ひきしめ、夏の炎天さへ蓮の葉を帽子に代へて凌ぎし頭上、今は洗へど元の白地に還らぬ古手拭の頬かぶり、おのが左手に兵兒帯の前袋しツかと取ツて、右手には不動の前立鈴羯羅童子の鐵杖に似たるステッキを振り廻して、幾千の旅客が夢を乗せ行く汽車の音響を聞きながら、思ふがまゝの微吟かすかの面魂は鬼畜夜盜も恐れず、怒れる如き兩肩を左右の山と争ひ、うまれつゝたる桶側の胴骨を巖上の古松に擬し、逆立つ太眉、反り返る唇端、どんぐり眼の光輝、もしこれに朱鞘の兩刀あらしめば、誰が目にも日本六十餘州の武者修行、津々浦々いづこの道場にも敵なきの歎を發する風情なりけり、

されば生れつゝいたる非凡の健脚に心は頑たる一本調子の幹竹割、東海道を紀州の熊野路まで百七十餘里の山河行程、たゞ仕れて後に已む、猪武者の時世も身も知らじと思ひの外、人は外見によ

らぬ案外の細工流々、先生また別に一個の方便工夫を凝らして、横濱より一片の端書を投するや否、市街外れの繩暖簾に飛び込んで大コップに二三杯の冷酒ぐいと勇氣を鼓し、ついでに拳大の握飯一個を腰間に纏うて、さらばと踏み出せしは其日の午前九時、程ヶ谷、戸塚、藤澤、平塚、冬の日の短きに以上の八里半を越えて夕日なほ西に入らねば、さらに二十七町を一散に大磯まで着きしころ、家々の燈火ちらほらと窓を漏れて、時刻もよし土地もよし旅人の宿とるべきは茲なれど、上田先生そのまゝ停車場に走せ入ツて、茶代も入らぬ腰掛に悠々寛々と手足を揉みつゝ一日の疲勞を憩めて食ひ餘しの握飯に夕餐をしたゝめ、おもむろに汽車を待ち受けて箱根の嶮を寝ながら越え、しかも其夜の宿料を汽車賃にあてし工夫さらに脱落なく、やがて沼津の停車場に夢さめて再び元の草鞋がけ、夜は明けねど、暁近き星影を便りに、またもや屈せぬ健脚どこまでも飛ぶが如し、

東海道を大阪までの間、晝は脚にまかせて握飯に飢を凌ぎ、疲るれば持主なしの樹の蔭さては山の裾に遠慮も入らず、渴すれば茶代よりも一杯の兜酒に元氣を添へつゝ、夜は停車場に飽くまで手足を伸ばして便宜の夜汽車を待ち受け、三時間乃至四時間を頼り寝、夢にも道を飛ばして覺むれば又もや草鞋ふみしめ、大阪の川口より汽船の下等三十五錢これも寝ながら直ちに紀州の

和歌山に着きしまでを數ふれば、東京を去つてより七日の山水明媚さては名所古蹟に費すところ僅に二圓七十餘錢、残りの二圓なにかしを懷中に捻ぢ込んで、内原、加茂谷、宮原、湯淺、小松原、印南、南部、やうく田邊の市街に入りし頃は剩すところ一圓五十何錢、いざやこれより東北に山また山を踏み分けつゝ、世にいふ中邊地の峻岨を、なほも三栖、高原、近露の八里越え、をりしも深山木いつしか葉を脱いで谷は氷りけん水鳥の影もなく、鹿の身の毛も立ちて叫ぶ猿の糞も寒げに聲悲しく、見上ぐれば峨々たる大塔が峯の雲霧あはや頭上に落ち掛りて、冬山の景色いと肌にく、痛める足を引き摺りながら、やうく野中の宿に入りし頃は、夕陽はや岩間に下りて瀧の流れに暮き、木枯さつと誘ふ彼方に窺もる燈火ちらほらと物凄き山里の夕暮、しかも月なき宵闇の時雨やせんと心いそげど、馴れぬ山道に五體ますく疲れて知らぬ旅路に脚下いよく危く、伏拜の宿までは猶この上に五里の巖角、踏み外せば忽ち生命、よしや踏み外さずとも猪狼の難を恐れて樵夫山獵さへ夜越し無用と聞きし時は、流石の上田力も進退こゝに谷つて、立往生の涙はらく、それも凍つて垂氷になるは今二三時間の後なりとぞ、嗚呼なんとせん、なんとせん、懷中に餘すところ僅に四十何錢、それさへ人棲まぬ山路に物喰はん宿もなく、このまゝ茲に曉

を待てば凍えて死するの外なく、伏拜まで五里の巖角に人間の夜路絶えて、我身の息も絶え絶えに一步の足さへ劍を踏むの心地たへねば、無念ながら道うてなりとも元の山路を野中の宿へ立戻らんと、やうく杖を力に痛める踵を返さんとする折しも、傍の谷間より松火ふり照らして上り来る二人の男あり、上田力おもはず霜に覆れたる聲を振り絞つて呼び掛けつゝ、かねて聞き及ぶ川上三吉が宿、三森山の北の麓に瀧谷村といふ山里ありやと問へば、二人の男しきりに上田の姿を見上げ見下し、あくまで根掘り葉掘りて事の仔細を聞きし後、始めて笑を含みながら横手を拍つていひけるは、さても幸ひ、知る段か存する段か、その瀧谷は我等が村里、たづぬる其人は代我等が庄屋の家筋で今は新家の次男坊、近來江戸から歸つて西洞の巖蔭に好奇の一人住居、さてまた好奇の俄獵夫、第一こゝから五里の伏拜へ行かずとも一里半の間道、かう御座れ案内せうと聞くや否、上田力おもはず兩手を合はして懷中の四十何錢がらりと其處に抛け出して神様佛様、いさゝかなれど當座の寸志、これより外に銀一文もなしと叫びぬ、ふりてらす松火の光輝に山路の闇を照らして、二人の男に前後を夾まれつゝ勇氣さらに一番、死魂ふたたび茲に還るが如く思へども、つゞら折なる枯蕩の細道、さては削れる絶壁の岨傳ひ、あるいは千仞の谷に一條の獨木橋、おもはず身を縮めて幾度か膽を冷し、二人の男に手を引かれ腰

を押されながら、小兒の如く扱はれて僅に辿る風情は、なさけなや東京の空に五體これ鍊鐵と叫びし健兒の勢消えて痕なし、やう／＼瀧谷村に着いて二人の男に別れ、ゆづりうけし松火の光輝に教へられし西の洞へ行けば、巖組を背に負うて何かは知らず鬱蒼たる冬森の此方、笹垣の奥ふかく岸傳ひの笈に流れ冴え渡りて、一家の軒近く窓の横紙漏るゝ燈火の影、さてはと俄に躍り上ツて駆け出しさま、木の根に躓いて控と願ひしが、また忽ち剎ね起き、消えし松火も今は用なき狂喜のあまり、走せ寄ツて伸び上りつゝ窓より内を差窺けば、なつかしや川上三吉、戀しや館しや川上三吉、一別以來さらに變らぬ川上三吉、あはれ窓外に十年の知己が山また山を踏み分けて訪ひ來しとも知らず、更け渡る深山の夜に心を澄ましく楷うちくべし爐の縁に大脱坐かきつ、たゞ獨り寝られぬまゝの書を繕いて餘念なき體、背後の壁には何者の筆にや朱衣の達磨を掛けて、これを今の身の友とやしつらん面魂の立派さ健氣さ、羨ましいやら慕はしいやら、明治の今日またとあるまじき男振に、今更の心地して上田力おもはず泣聲ふりたてぬ、

「やあツ川上無事か、おれだ、上田だ、來たよ川上、おれだ」

聲きくより川上三吉はツと胸おどろかしつゝ、書を抛ツて飛び起きながら窓外を窺へば、内より射す燈火の影に上田が面體、うつゝか夢か、我を忘れて駆け寄りざま門口の戸を引き開くる殺も

なく、窓より手を差出して上田の手を握りつめ、おもはず兩眼の涙はら／＼聲まで震ひぬ、
「おゝ上田か、どゝどうして來た、よく來た上田、よく來てくれた」

豪狂猛悍、劍を提げて修羅の巷に亂走せしものが、心機一變、竟に世を遁れて白髮老顔の庵に猶も昔を憶ふの涙ありとせば、十年の苦學むなく夢一場となり、都門幾多の半生いたづらに露一滴となり、少壯有爲の才を我から捨て、熊野の奥の山また山に當世を絶ちし川上三吉が、かつて難行同窓の上田力に百里の山河はる／＼訪はれし時の心は如何に、千言萬語に盡し得られぬ人の眞實は涙の外になし、しかも涙の色に濃淡紅白の別なきを何とせん、あはれ都門の空には一夜の涙よく川をなすとも、今この山間の草屋に男泣きの涙一雫の價格ありや否や、互に手を取ツて別後の情を慰しつゝ、冬の夜の片山里は唯これのみと、自在鑿に吊せし大鍋の蓋とツて芋汁の雜煮に腹をあたため、夜と共に爐を圍んで語り明せし後、上田は其身の疲勞も忘れ一入さらに言葉を勵ましながら、

「ねエ川上、かねて君の知る通り、僕は天生の訥辯で、思ふことの十分一も語れないから、或は其間に言葉の不完全また意の達しないところもあるにせよ、大體の筋道に於ては餘り間違ひな

らうと信じて居るが、どうだい、あはれむべし。故に上田といふ愚物が明治の今日このさまで此山奥まで、多少の艱難を凌いで殊更に來た心情を察せば、君たる所以の君として何と感ずるか、第一、それが聞きたいのだ、俗物みだりに來つて仙屏を驚かすたア少々違ふだらうと思ふのよ。いひつゝ川上三吉の面體を今更に見詰むれば、かたく兩眼を閉ちて雙腕を組みながら、やうく結べる口のみを開いて幾度か頭を下げぬ、

「もしこの三吉をして猶いまだ東京にあらしめば、東洋野蠻的の習慣から成立つた隱遁主義の外、別に君を破るの説は十分あるが、上田君、あゝ上田、君、わざ／＼今日この山奥まで不肖の三吉を惜しんで、否、憐れんで來てくれた君に對しては、一言もない、さらに一句もなしさ」

「むゝ一言なけりやア無論、僕の説を容れて山を出るね、一たび此深山に葬つた君の器量を再び都門に出すんだね、いよく／＼か川上、間違ひないかね」

「川上三吉うまれて二十八年間、自然の不運と過誤の結果に依つて物の間違ひを出來した外、いやしくも言を食んだことなしだ、君が眞情の涙に濡れて再び大煩惱が起きたよ上田、三吉が棺を蓋うて後、或は幽冥から君を怨むかも知れないが、人間としての僕ア、喜んで再び出よう、出るからにやア更に大俗一番、大に遣つつけようから」

いざや五人男の大立物、こゝに又もや山を蹴つて紅塵百尺に跳ね出さんとす、前途の風雲如何、他日の吉凶如何、

往昔は無智文盲の賤しき町奴にさへ強を挫き弱を扶けて仁人身を殺すに似たる節ありしが、今は學藝俊秀の才子いたづらに書問末社となつて、追従輕薄お世辭たら／＼、勢威に懼ること蟲蠢の如く蠅の如くなれども、其坐を去れば忽ち心の高飛車みだりに闇雲に乗つて、冷かに見下しながら餘所の落目を覘ふこと亡八女街に等しく、日夜失意の人を追つ掛け追ひ廻して諺にいふ弱いもの殺しの影辨慶、さりとて強いものには眞向額を土足に蹴られても閉口頓首、おのが踏んだ犬の糞を盛り直して後より來る人を待つぐらゐは上々の部なりと、さる男の悪口雜言それほどにあらずとも、腐りし腸に文明場裡の競争を食ひ損うて、唯これ嫉妬偏執罵詈譎を事とせる奴の多きは、たしかに誰が目にもつく今の世の中に、おのれの愚を愚として百里の山河はる／＼他の智を揚げんとする上田の如きは、可憐の健兒そも／＼又とありや否や、さればこそ、世を厭ひ世に飽くといへども實は世に怖れ世に勝ち得ざる弱蟲なりと、古來東洋の隱遁主義を鑑一文の代價なく思ひながら、みづから別に一個の説を取つて十年の苦學を抛ち半生

の抱負を破りつゝ、磅礴たる奇氣むなしく少壯有爲の身を山間に埋めんとせし川上三吉、たとひ萬金を積んで招くとも、よしや千人の美人來つて腰を押すとも、頑たる豪骨さらに山を出でじと極めし觀念も、あはれ上田が一滴の涙にうたかたの水の泡と消え失せて、再び元の都門に躍り出でんとする前途の空の面白さよ、氣の毒や眠れる獅子が豚に引かれて見せ物に出るぞと、上田力が時に取つての洒落にも謙遜の意を含ませながら、川上が今日まで獵り得たる二十餘枚の獸皮を二人の背に負ひ、別に三十圓の金子、これは三吉が兄の本家より五の友誼に感じて、贈せられたるもの、いざ去らばと用意の旅衣に深山の露霜を拂ひ、ひきむすぶ草鞋の中邊地の巖角を踏んで、田邊より打ち寄する熊野の浦の濱傳ひに、富田、安居、周參見、和深川、見老津、江田、姫村、西向、田原、浦上、濱宮、新宮、井田、木本、新鹿、曾根、三木里、尾鷲、馬瀬、長島の名所古蹟を辿りて伊勢の間弓まで五十餘里、それより桑名の古渡を越えて尾州熱田の宿に東海道汽車を待ち受け、草鞋のまゝふいと飛び乗つて背負ひし獸皮に穢多の上京と見られしも呵し、

其 五

都大路の巷には猶ほ車馬の通ふ音たえざれど、こゝには汐入村の夜更け人定まりて、松戸に歸る

歎乃かすかに隅田川を渡る頃とぞなりぬ、されど新聞寄稿の時日に迫られし倉橋幸藏、専念に筆を走らして眼の光りをランプの火と争ふ此方には、睡魔しきりに襲ひ來つて兩眼つぶるゝ心地の黒田健次、すぎし五圓の泥酔以來、さすがに自己一人お先へとも言ひ兼ねてや、睡氣さましの煙草すばく幾度か吹き出る欠伸を口の中に噴み殺しながら、申譯の机に對うて書見の體を粧へども、果は堪へ兼ねて半泣きの聲を絞りぬ、
「ねエ倉橋、おい倉橋、時計がないといふなア實に不便だな、さつぱり時間が分らんから」
倉橋幸藏おもはず笑を含んで筆をとめつゝ見返れば、先生もはや叶はぬ苦しの眼を白黒にして、果は澁面べそく涙ぐむ呵し哀れさ、
「時計、今の境涯に贅澤な事いふな、山中に曆日なしの古語を知れば、門口の薄闇くなるを以て夜に入ると心得、また横窓の白むを以て夜が明けると思ふべしだ、なまなか吝な考を出してニツケル時計の便を羨む勿れさ、風浪書生の分際で嫌に文明がツて時間々々と吐す奴に實際の勉強家は妙いからね、第一、この時計といふものについて聊か僕が言をなせばさ、今日の凡夫俗流みだりに金時計の胸に輝くを得意の一端とするが、ありやアまだ不可ンよ初心だよ、むしろ金鎖の帯に纏ひついてピカ／＼するがため却つて人品が下るほどの人間にならんば語れんからね、

しかし君、睡たけりやアもう寝るが宜いぜ、決して僕にお心置きなう」
 「なアに、ちツとも睡かアないがね、そのランプの石油の減りやうで見ると、だいぶん夜が更けたらうと思ふのさ」

「だからよ、寝ろといふのだ」

「ありがたい、寝ても宜いか、しかし何だか氣の毒のやうだね、第一、上田は今ごろ何處で何うして居るだらう、東京を去つて既に半月、さらに一度の音信もないが、定めて種々の艱難をしたらうね、うまく川上を尋ね當てたか知らん、それを思ふと少々僕も寝心地が善くないよ、ねエ倉橋」
 「え、寝る段になつて餘計な世辭をいはずとも宜いから、早く寝ろ、上田は君と違つて、百里の山河を越ゆる旅の苦中にも、また別に人の知らない愉快を持つてる男だから、安心して寝給へ、まさか不安心で寝付かれない君でもあるまいに、ねエ黒田、あは、貴公も近來ちと弱くなつたよ、いや結構、その弱いところが結構々々」
 往昔より今に至るまで、およそ文を賣り筆に衣食するもの、習慣として一時幾字一日幾枚と數取日取の用意なりがたく、多くは脚下より鳥の立つ羽音に驚いて、平生の大油断すはや今この時に押し寄せたりと、いはぬばかりの兩眼むきだして火急の働き利那の稼ぎ、餘所の見る目は宛がら

白癡の晦日に等しけれども、古今の文士また此間に一道の活氣を發して、きのふの我けふの我に越ゆるの妙も精華も出づるとかや、さるを俗物みだりに冷笑うて、會釋もなき机の前の文債鬼、あゝ已ぬるかな已ぬるかなとは、なまけもの、看板かけたる文人の愚痴なりき、
 さればにや、物の成敗ともに覺悟も早く用意も脱らぬ倉橋幸藏なれどわづか月に五回の寄稿を怠りて、鼻の先に迫る時日の約束、もはや脱れん術もなければ、ゆうべ一夜を徹して今朝の東天に、やう／＼筆を擱きつゝ見返る此方には例の黒田先生、まだ夜中の夢に枕外して解聲雷の如し、旭さすに程なき今更、夜具とりのべて寝られもせまじく、寝れば黒田の石佛ます／＼僥倖にし、今日の一日は二人共寝の丸潰れ、いざさらば勇氣一番、このまゝ押ツ通して讀書に力めくれんと、またもや机に對うて居坐を直す折しも、

「おゝい倉橋黒田、今戻つたよ、乃公だ、上田だ」

曉の霜に寂びたる聲をあげて門前に叫びぬ、
 聲きくより倉橋幸藏おもはず膝を打つて起ち上りさま、走せ出でて門の戸ひきあくれば、山河百里の艱難に顔色も變らぬ上田力、東京を出でし時は布子一點寒晒しの空脛なりしが、かさね着に紺の脚絆、さては覺束ながら旅一式の用意まとうて、背には重巻の獸皮幾枚を負ひつゝ満面あふ

るゝばかりの笑を漏らしぬ、
 「やア上田、よく歸ツた、して〜何は、川上は何うした、さぞ草臥れたらう、ひどかつたらう」
 「なアに別段、なんの事アない、のんこの酒蛙で鼻唄まじりに遣ツつけたのよ、しかし餘計な心配かけた、川上か、川上は今すぐ後から来る」
 「なに川上を連れ出した、いよ〜来たのか、そいつアお手柄だツた」
 「來なけりやア首ツ玉に繩をからけて引き摺る覺悟で往ツたのよ、して例の豪傑は」
 「むゝ黒田か、彼奴まだ前夜のまゝ蘇生らんのだ、どうも彼男にやア困るよ」
 をりしも彼方の藪をめぐって川上三吉のそ〜と歩み來りぬ、
 いかにも勤勉の倉橋とて、ゆうべ徹夜の今朝なとして堪るべき、いづれ勞れて寝るべし翼はくば寝てくれよかし、ついでに我も此まゝ今日の一日を寝飽かんと、例の黒田健次が横着の空船眼を細くして夜具の袖口より窺へは、南無三寶さらに勞れし顔色もなく、押ツ通しの勇を鼓して再び机に對ふのみか、をりしも曉の霜を破ツて門邊に叫びしは上田力の聲、さすがの黒田も内心きよツとして耳敏つれば、やがてまた別に一人の聲、これぞ正しく川上三吉と知るや否、驚い

で飛び起き慌て、枕を蹴り、夜具もろとも押入に捻ぢ込んで火急の兩眼見開きながら、殊更に悠悠として戸口に出で迎へ、
 「やア歸ツたか上田、こりやア妙だ川上も、さぞ疲れたらう、おい倉橋、君は先づ二人を珍客として話し給へ、僕ア臺所で茶を湧かすから」
 俄の世辭を振りまいて厨の方に飛び込み、マツチを摺ツて土瓶の下を燃すかと思ひの外、おのれ先づ一服の煙草くゆらしながら心の中に思ふやう、ちよツ、ひどい奴が遣ツて來た、とても山から出まいと思ツたに、とう〜來しやアがツた、お心よしの倉橋や馬鹿律義の上田が幾何なんと吐したツて驚かないが、あの川上にやア少々まゐるよ、彼奴いやに目先が早くて一言一句なかなか皮肉だから、くやしやかな爾來、乃公の天下も太平無事たア行くまいよ、
 此方には三人車坐となつて、別後の挨拶、ついで四方山の談話にうつらんとする折しも、さすがに脱らぬ川上三吉、忽ち首を伸ばして臺所を見遣りながら、
 「おい黒田、なぜ來て語らないのだ、茶も湯も後刻で可いから、まア來給へさ、久しぶりだに君一人を臺所に置いちやア濟まんよ、第一、僕も今日から再び元の同志に立戻つた上は、従前の家憲通り萬事平等だ、全體、今日の炊事役は誰の番だ、君か、君でなきやア止し給へ、上田が無事

の歸京、川上が山を出たぐらゐの小事で規約を紊しちやアいかんねし
備として犯すべからざる川上の眉目さながら、亭々たる青松の雲を凌ぐに似たりける、こまかし
の好意を冒頭第一に破られて、さすがの黒田健次はツと思ひながら、またこれ浮世の陣を突き損
ねたる不敵の落武者、から／＼と軽く笑うて出で来りつゝ、
「やア其後は、いつも案外の無沙汰ばかりで済まん、實に済まなかつた、がよく來られたね、こ
れといふも上田の熱腸眞實の致すところか、ねエ倉橋、儲さうなると僕ア面目次第もないよ、空
しく自己が口腹のために」

皆まで言はさぬ川上三吉、片手を振つて打消しながら、

「これさ黒田、今更ら君にも似合はんことをいふよ、そんな愚痴は止せ、よして相變らず君

が得意の不羈磊落に遣つてくれ、別後の豪快いよ／＼盛だらう」

「ところが壯でないよ、近來めつきり衰へて、諸事ぼつと陰に閉ぢられたやうだ」

倉橋幸藏は二人の談話に笑を含みながら、おもはず上田と顔見合はせて膝を進めつゝ、

「陰に閉ぢられても陽に開く事を知つてる先生だから、まア安心よ、過日も上野の松源から歸つ

た時の爽しさ、あまり陽に開き過ぎて實に困つたよ、年は十九で濼皮が剥けたとか面の皮が白い

とかで」

「おい、おい／＼倉橋、餘計な事をいふな、酒の上だい、酒にやア智愚賢不肖無差別、天下の法

律さへ正當に適用が出来るのだからね」

上田力も面白半分に螺の如き拳固を黒田健次の目鼻の間に突き附けながら、

「どうだい黒田、濼皮の剥けた其十九と、鐵の皮着た僕の拳と」

黒田も今は四面の攻撃に堪へ兼ねて、ふいと坐を起ちながら豪所に遁げ込み、茶を湧かす團扇の

音ばたばた、

「嫉め嫉め、火急に野暮の味方が出來たと思つて、ヘン木像と仙人めが頻りに動きやアがる、つ

まり平生の復仇だな、あは／＼／＼」

もろ／＼の羅漢が出山の釋迦を迎へて喜ぶが如く、倉橋黒田上田の三人も新に山を出でし川上三
吉を取圍んで、坐には昔の味噌摺鉢さて今の火入に大土瓶の濼茶これ一個の待遇ぶりに、みれば
互の身にも叫はぬ破れ布子ひき纏うて、ところ／＼に骨あらはれし二面の古壁、一方は柱歪みて
四角の窓も哀れや菱形の南向、こなたの一方は門の戸口の割れ目より障子の穴を通して吹き入る

寒風に、多年の垢と塵もて埋みし疊の目さへ俄の目瞬、荒天井の食み出でし土塊も落ち掛りて、人なき薄闇には田舎芝居の山賊の棲家に似たれど、餘所に知られぬ一團の和氣こゝに金谷園裡の春を催して、玉殿瓊樓に酒池肉林の快樂も何のその、胸間を割つて四個の膽玉たゞ一個に抛げたる如く、隔意なき交情の諧謔うちとけて笑聲しきりに漏るゝ折しも、門の破戸がたゞと音して入り来るものあり、誰ならんと起つて窓より見れば吉田雄藏なりける、

「やア吉田が来た、いはゞ我黨の末弟たる吉田が、久しぶりで今この席へ来るたア奇だね、第一、なんだか菓子折のやうな物を持つて来たところがいよゝ奇だよ」

いひつゝ妙な手付をして高く笑ふは黒田健次、聞きつゝ身動きもせず静に微笑むは川上三吉、

「どうしても黒田は黒田だけだ、一見たちまち菓子折に目のついた所なンぞア」

倉橋幸藏その語を引き取つて斜めに指さしながら、

「なアに黒田の目にやア人間の吉田が見えるものか、たゞ門前から菓子折がフハ〜と宙乗して来たぐらゐに思ふのさ、心は彼にあらすして是にありだから」

つゞいて上田力も劣らぬ口先かるげに、

「菓子折の宙乗が酒樽の宙乗なら、この先生さらに一丁の御満足だらう」

四人の言葉を戸口に立聴きながら、かくても慇懃の少年、

「吉田雄藏です、よろしう御座いますか」

まづ聲をかけて入り来りつゝ、正面に坐せる川上三吉を見るより物をも得言はで兩眼に涙ぐむ風情、まだ浮世の巷に馴れぬ山家生育の顔色みえて哀れなり、

「よく貴下、まアよく御上京になりました、おかげで私も」

去年の函嶺の夏を思ひ出して何とやらん胸に迫る風情を、川上三吉も懐舊の情に幾度か首肯しながら片手を伸して、

「さア吉田さん、サツと此方へ、何は措おき第一御無事で結構です、當時は濱町の富田氏とやらに、いや上田から委細承知、なか〜御勉強なさるさうですね、憶ひ出せば去年の函嶺わづか一年たつか経たぬうちでも、人生の離合聚散とんと夢のやうですなア、は〜ム〜ム〜この三吉もまた山を振り捨てゝ再び都門の奴となりました、おい黒田、貴公あの菓子折に對しても茶を汲むぐらゐの義務はあるだらう、吉田君サツと此方へ、いま皆が寄つて面白い馬鹿談話をしてゐる最中ですから」

其 六

濱町の富田正次といふ老紳士、我ためには草の葉におく露ほどの山縁なれどきけば先づ第一に上田力が故郷よりの知人といひ、さては去年歸國の途すがら函嶺の山中にて假初の哀れに一葉の名刺を興へし吉田雄蔵が今の恩人といひ、また倉橋幸蔵が寄稿せる新聞社の大株主といひ、かつは更け行く秋の寒天に夜具ぬすまれて三人ともに膝小僧抱き寝の折柄、あつき芳志を運んで救はれしとやらの情もあり、かた／＼常に我名を慕うて深く惜しみしとの噂も聞けば、これこそ序ながらの挨拶に一度逢うて語らんものと、川上三吉まづ此よしを通じて後、たゞ一人ぶらりと汐入村を出でて濱町へたづね行きぬ

もとより喜び勇んで待ち受けし富田正次、それと聞くより自から玄關に出で迎へつゝ、まうけの一室に誘うて殊更に懇懇の待遇、さながら長者の如くに扱へば、川上三吉も禮を正して互に初對面の辭儀を終りし後、忽ち主客の間に酒池肉林を築いて時ならぬ春は來りぬ、人に誇らず、人に譲らず、事に驚かず物に阿らず、時に進んで撃つが如く時に退いて守るが如く、我みづから我を其間に立てゝ毅然たれども、どこやらに滾るゝ愛敬ぼつと卑しからぬ世辭を交へ

て、男振といひ年紀といひ、みれば見るほど天晴の骨節、き／＼しに勝る川上が風采に、さすが浮世の場敷を踏みし富田正次も、ほれ／＼と惚れ込んで思はず膝を乗り出しつゝ、いや今日は實に近來の愉快です、平生から御風采ばかり承つて蔭ながら欣慕に堪へなかつたのですから、一段さらに愉快を感じました、どうか爾來お心易うね、時に如何です、盃はまだ浅いちやア御坐いませんか

しきりに勤むれども川上三吉は元來下戸、笑を含んで坐も動かさず、さりとして更に窮屈ならぬ容態ゆたかに片手に振つて、

「なに、もはや十分です、御覽の通り、上田なんかとは違つて至極の弱卒ですからあは／＼、いそいちやア何です、甚だ禮を失しますが折角の御馳走、恩に押れて御飯をいたゞきませうか、とかく最後は此點に至つて打毀します、あは／＼、いまだ無理酒の必要も感じませんが、人間ちと好んで酒を飲まないちやアいけませんね」

初對面の酒席に悠々として憚りもなく飯を迫りながら、さらに興を破らす憎げも添はぬ顔色に、富田正次いよ／＼慕はしく懐しく、俄に手を拍つて人を呼びつゝ、

「御客様に御飯を持つて來い、いや貴様ちやア不可ン、嬢を呼べ芳に給仕しろといへ」

當世の紳士といはるゝ富田正次が秘蔵の一人娘、ましてや初對面の客の席、殊更に若き男の手前、わざと垣を築いて隔つべき筈ながら、幸ひの給仕に呼び出せし親心には果して何か宿るらん、もし例の黒田健次ならば畜生々々と叫んで自己が頼邊を捻り廻すところなるべし、子を思ふ親心、今こゝに三分の自慢、六分の希望、残る一分は兎や角と案じながらに指さして、

「不束者ですが、娘で御坐います、芳、御挨拶せい、この方が豫て風聞の川上さんだから」

上田倉橋吉田の三人に豫てより聞き及ぶ人、まして父が平生の物語にも天晴れ名玉を熊野の山に埋むるか、まだ見ぬ男振に焦れて言ひ聞かされし川上三吉は、さても斯人かと差對うて顔しむじみと見えねども、おそろしや女の十八は魔力ありとぞいふ浮世の諺、男見る眼は兩眼の外、身體髮膚に備りて、ちよいと額越の稻妻に川上の風采容貌もはや心に入りつゝ、おもはず綴らむ恥づかしげの風情、

「よく入らつしやいました、妾は、芳と申しまして」

あとは臍に口のうち、雨とも風とも分らぬうちに千兩萬兩の代價あれども、三吉さらに買手とも見えねば、例の平然たる居坐のまゝ靜に會釋して、

「いや初めてお目にかゝります、今日はまた大變御馳走になつた上、我まゝを申して済みませ

ン、なアに、貧乏書生の御飯いたゞくにお給仕なンか入りますものか、それとも御家風なら、どうか召使の御人に願ひませう、山奥から出立の人間ですから、よく喰べますよ、何、さうですか、そいぢやア御免蒙つて、一番お驚かせ申ませう、お嬢さん笑つちやア不可ませんよ、あはゝゝはゝゝ

あくまで酒々として能く言ひ能く語れども、おのづから禮義を缺かぬ品位を保ちて、しづかに膳を引き寄せ箸と茶碗を取り上げながら、目映ゆきほどの美人の給仕に寛々として食ひ込むこと八九杯、あらんかぎりの汁も吸ひ魚肉をも盡して、また更に平然と語り出さん顔色骨節、これほどでなくば明治の今日いかに學問才氣ありとて最後の勝は覺束なかるべし、

「いよく恩に押れて、したゝか参りました、満腹、満腹」

富田正次は殆ど呆れて笑ひながらも、いはゞ晴れがましき初對面の席上に斯くの振舞、さりとして見苦しからぬ容態は、眞に此男に備はる一徳ぞと、ますゝ慕はしげに膝を進めながら、

「川上さん、貴方ア何でせうね、その御様子では、御病氣なンぞを御知りなざるまい」

「左様、幼少から不規則千萬に育ちましたが、體育々々と頻りに騒ぐ今日の學生なンかよりやア、器が丈夫に出来て居ります、しかし器ばかり丈夫で、蓋を取れば一物なしの憂空憂ですか

ら、いけません、無効です、いはゆる馬鹿達者の部で」
 「なに、さうでない、身體の健全は人間固有の財産で、裏田圃の影茄子よろ／＼弱くツちやア迎も大事に當れませんよ、また女も昔の女と違つて、今は男振りより第一に骨組の立派を取りますから、時世によつて色男の相場も段々です、あは／＼／＼ねエ芳、お前なんかも、さうだらう」
 みかけによらぬ老紳士が思ひの外なる洒落に出でて、じろりと娘の方を見遣れば芳子も思はずホホと笑うて川上の顔を偷むが如く、

「妾なにかに、そんな事は、分りませんもの」

うまれつき喜怒哀樂の顔色に際立たぬ川上三吉も、始めて逢ひし富田正次が待遇ぶりの厚きに感じて、思はず時をうつしつゝ其日の午後四時ごろ、宿まで送らせんといふ人車を辭して飄然と立出でしが、川端傳ひに兩國橋まで歩みながら、一錢の川蒸汽に身を乗せて吾妻橋に上り、久しぶりの観音境内に共同椅子の便を借つて、袂のマツチに腰折煙草の紙巻をふかしつゝ、ぼんやりとして見渡す風情は下宿屋を叩き出されし放蕩書生に似たれども、しみ／＼見れば一癖あるべき面魂どこやらに苦み走つて心には千變萬化の俗物が絶え間もなき往來を冷笑しながら、おのれ一人こゝに無量の快を貪りつゝ、やがてまた歩み出せば折しも夕暮ちかき馬道の賑ひ人車を驅り足

を空にして今夜いづこの里に寝るぞと、魂魄脱殻の有象無象を哀れに見送りながら、悠々として汐入村に歸れば、早や點火頃とぞなりぬ、
 この門を何の用だと問はれては、答辭に苦しむ名ばかりの破戸やう／＼引き開けて家内に入れば、今しもランプをつけし體、倉橋上田の二人あわたゞしう出で迎へて、
 「やア川上か、黒田め、えらい事をしをった、こゝこれだ、これを」
 いひつゝ正面の古壁を指さすに、何心なく見れば半紙二枚を張り付けて、筆太の走り書べつたりと文字を遺しぬ、

立退狀一札の事

不肖の健次こゝに此菓を立ツて去るは、川上兄が山を出でて再び都門に入りしと一般、敢て他意なし乞ふ諒せよ、但し落ち着く先は山にあらず川にあらず、東京の眞只中しかも紅塵百尺むらむらと湧いて煙の如き大俗の中にあり、いさゝか以て健次が平生の愚を試みんと欲す、もし業ならば更に諸兄を訪はん、もし業ならずんば竟に死せん、否、死は形體の死にあらずして心の死なり、心すでに死して再び諸兄を見るの期なく、諸兄に見ゆるの期なくして黒田健次また黒田健次たるを得んや、敵は本能寺にあり牡丹餅は棚にあり、たゞ我求むるものは那邊にあるを知らざるがた

め、こゝに猛然として人生風浪の冒険者となるのみ、別れに臨んで一言すべきは由來多年の好誼を謝するの外なし、併せて、諸兄の幸運を祈る、幸に自愛せよ、

黒田健次

川上三吉
倉橋幸藏
三兄貴下
上田力

今度川上兄が熊野より御持參に相成候、獸皮二十四枚、これは不日おのゝ四人に御分配のよし、ついでには甚だ勝手がましく候へども、小生の分六枚唯拜受仕り候、實は此六枚の獸皮が此度決心の基に御坐候、決して過般の如き松源樓上の愚策には無之候、間御安心下されたく、あはせて不埒千萬の儀を御ゆるし下されたく願上候、

黒田健次

川上三吉様

もとより上田倉橋もろともに暫し不在の折柄、かゝる事となりし今更後悔なんとせん、如何にせんと眉を擧めて驚けども、川上三吉さらに顔色も變へず、おもむろに笑を含んで二人を見返りながら、

「む、黒田め、味を遣り居ツた、彼奴なか／＼馬鹿でないよ、おもしろい」

三人が不在中、正面の古壁に半紙三枚を張り付けて、筆太の走り書べツたりと立退狀一札を残せしまし、川上三吉が熊野の奥より背負ひ來りし獸皮六枚を出掛の駄賃に、飄然として出奔せし黒田健次そもや何處に走りけん、山にあらず川にあらず東京の眞只中、しかも紅塵百尺むら／＼と湧いて煙の如き大俗の中にありといへば、彼奴が天生の活氣豪放かならず四里四方の間に蟠つて、づら／＼しい根性骨に人を人とも思はず、あくまで死太き例の悪洒落を恣に振り廻して、敵と見れば横面ぐわんと喰はせ、味方と見れば引ッ被いで宙に抛り上げ、時には地獄の上の一足飛び、嘸や危く面白き浮世の空の綱渡りやせん、されど遺書の文中、いさゝか平生の愚を試みんと欲して業もし成らずんば再び諸兄に見えず、見えざる黒田健次は心すでに死するが故なりといふに至つては、さすがに多年の苦樂を俱にせし情の涙一滴、常に物に頓着せざる男だけに一人の哀れを催しぬ、

あとには三人、膝を交へて評議まち／＼、中にも倉橋幸藏は坐を進めて聲しづかに、
 「黒田め、どうかしたんぢやアないか、氣でも變になつたんぢやアあるまいか、なぜツて、十年
 以來こんな苦學難行を俱にしてさ、いま一息で何とか、めい／＼身の振方が付かうといふ港口
 で、忽ち同舟の契を捨て、浪の中に飛び込むたア、實に解せんよ、ねエ川上」
 問ふが如くにいへば川上三吉さらに平然として、腕をも組まず片頬に笑を含みながら、
 「さうさ、さう言やア妙だがね、なアに、彼奴なか／＼腹の底の浅い奴でないから、大丈夫さ、
 いづれ何とか心に感ずつた事を斷行するのだらうよ、きけば過日、君から貰つた五圓の金、もと
 より上田の高く清き心にやア迎も及ばないが、數年うちつゞいた餓鬼道の境涯に居ながら、一朝
 おもはず手に入つた五圓の金を屁とも思はず、さながら空を駈け行く天馬の勢ひで、驀地に上野
 の松源に飛び上つてマニラの葉巻を吹かしながら、破帽敝衣さらに傲然として鑑一文も残さなか
 ったなア、なか／＼尋常の奴でないよ、なるほど一夜に百金を費す馬鹿はあつても、この境涯と
 此身で五圓の金を割つて費はず、五枚揃へて一度の膳の上に叩きつけたなア流石に彼奴だよ、今
 時の下宿屋書生なア脚下へもおつつかないね、だからよ、彼奴が今日ふいと飛び出したは、
 またこれ彼奴だけの思慮あつての事だから、むしろ面白いと褒めてやるさ、ねエ上田」

上田先生しばし兩眼を閉ぢしが、くわツと開いて膝を進ませ、
 「なるほど、川上兄の意見は道理だがね、僕ア彼奴を捨て、おけない、なぜツて、百里の山河を
 踏んで君を熊野の奥へ訪うた上田力だ、今日四里四方の眼前のある黒田を其まゝにしちやア、物
 に厚薄あつて疚しいから、君を山に訪うた日數だけは、また黒田のために費してやるのさ、それ
 で知れなきやア其時のこと、よし知れてから戻らなくつても其時のこと」
 どうしても上田は上田だけの人間、さても可愛げは五人男の隨一なりけり、

百里の山河はる／＼と霜を踏んで川上三吉を熊野の奥に訪ひしからは、四里四方の眼前に囊の物
 を探るが如き黒田健次、たとひ如何なる、穴に潜むとも其まゝに捨て置かれじ、人間の高下の問
 題、生來の差別は平生の事、あはれ十年の苦樂を俱にせし今更、彼に厚くして是に薄きは我心に
 疚しきところ、たづねて功のあるか無きかは我の關するところにあらずと、うまれついたる一風
 一骨の上田力が、飄然として汐入村を飛び出すや否、吹き来る寒風に例のステツキを振り廻し、
 氷れる大地に履き曲めたる下駄の音からんころんと響かせつゝ、おのれ健次の奴め、今頃は何處
 に何うして在せうやら、おもへば前夜の霜の寒さ、門守る犬に吠えられて人の軒端に凍えざりし

か、衣手うすき破れ布子に獸皮六枚を背負うて怪しまれ、みる目かぐ鼻の刑事掛に曳かれはせぬか、えゝ出るなら出るで仔細あかして立去るべきを、友達甲斐もなき突然の出奔とは、憎い奴め、水臭い奴め、あはれの奴め、見附け次第は首筋ひつ綱んで、兎も角も一度は連れ歸らんものと、さながら不倶戴天の親の仇を覘ふが如く、天生おろかの一徹うたゝ尊し、

あとには川上三吉と倉橋幸藏、互に隔意なき物語しみる、

「どうだい上田の勢ひは、あの様子ぢやア二三日のうちに、キツと探し出して来るよ、しかし、折角さがし出したところで、黒田のこつたから、負け惜しみの横着を極め込んで戻らないのみか、畜生ありがたいと思はず、結局また例の毒口を吐くだらう、これを思ふと上田が實に氣の毒だよ、可哀さうだよ、ねエ川上」

しきりに眉を擧めて問ふが如くに語れど、川上三吉は例の平然たる顔色、机に凭せし脇をあげながら、

「なアに無効だね、決して探し得ないね、もし上田が尋常の人間で好奇にする仕事なら、あくまで徒勞の結果を諫めもするがね、儲あの通りの正路一片、おもやア涙が滾れるほどの眞實で、そして僕を山から引き出した今日、その僕が彼はいふなア妙でないから、まア上田が心の濟むまで

打棄つておくのよ、しかし徒勞は覺悟の前の先生だから別に心配もないさ、また黒田の奴が、うか／＼見付かる處に居る奴なもんか、まして呼子鳥の啼く片田舎へ引ツ込んど違つて、百萬の人家びつしりと建て詰つた日本一の大都會だもの、唯の四里四方ぐるりと廻つて十六里なかの單純な頭腦ぢやア逆も無効だよ、人の生血を吸ふ化物の骨を舐る惡魔が堂々たる屋敷を構へてさへ、白日青天の下に其物かとも知れない東京だもの、しかし、そのうちに僕が二三日の閑暇でもありやア、ついでに黒田の穴を衝いて驚かしてやるさ、なアに、上田には見えないが、彼奴のする事ア、僕の目に見えるよ、あは／＼／＼／＼

其 七

濱町の老紳士富田正次が玄關の左手に、一坪ばかり植ゑ込みたる大明竹の葉越に六尺の横意は、竹影婆娑として晝こそ人目に立たざれど、夜に入れば閑けき燈火の影を漏らしつゝ、をり／＼曉までも消えやらぬは自然なる朝市の隱逸、雨には疑ふ暗泣煙娥の涙、風には訝がる哀彈叔夜の琴と、誰やらが絶句の雅趣に似たるを、そもや何者が起き臥しの寤と思へば例の少年吉田雄藏が書生部屋にて、六疊の一室を天地の犬と心得て身を容れ、一間の半窓に對うては九年面壁の觀法

にも劣らざる勢ひ、あはれ十年の後、此裡より如何なる男が飛び出づるか、机に靠れて假寐の夢にも青雲に乗る専念の修行、覺めて書を繕けば、綺羅の榮華に勝る一心の娯樂、さらに今は何事の餘所目もなかりける、

午前は客の取次その他の川事萬端、これとも讀書の閑暇はありけり、午後は許されて心のまゝなる學校通ひ、おもへば浮世を知らぬ山家生育の乳臭が生馬の目を抜く此大都會に出でて忽然かくの幸運も、第一に川上三吉が一葉の名刺、第二に倉橋幸藏が眞實の計畫、第三に上田力が身に代へての世話肝煎、されば我たる我は世間普通の書生にあらずして、以上三人の兄とも頼む人達の芳志、現在當家の主人が恩、つゞいて一家の男女が愛、これに對しても吉田雄藏このまゝに已むべきか、おのれやれ、虎と見て石に立つ矢もありけりと、一心不亂の修行には宛がら陣頭に躍る勇士の如く、三度の飯食む時間をも惜しみける、

けふは日曜とて主人は朝のうちより他出、されば訪ひ来る客來の影もなく、かつは我身の學校もなければ、たま／＼の心やすめに運動散步の四字を思ふべきも、天性孜々たる吉田雄藏、かゝる時こそ我の本懐ぞと、さらに傍目もふらず机に對ふ折しも、此方の襖を半ば開いて半身を現せしは、多年當家に勤めて朝夕の始末は固より、令嬢よし子には別けて無二の忠臣と聞えたる下女の

清とやら、丸ぼちやの當世顔に色白の愛敬女なれど、面の四の道具に聊かの不足あつて、かなしや一丈の帯が二重にまはらぬ肥ツてう、心は氣輕に生れても五體の肉置き重ければ、身の振方に一入の難儀を覺えて鶯に似たる風情をかしく、

「吉田さん、吉田さんツてば吉田さん、貴方、今日は日曜ですよ」

雄藏おもむろに振り返りて、朝夕見交す顔にも會釋の改まりやう、

「御用ですか、はア」

そのまゝ起たんとするを、いつしか寄り來つて片手を宙に振りつゝ聲を潜めながら、

「御用ぢやないんですよ、今日は日曜だに貴方が、あんまり御勉強なさるから、お嬢様が、褒めて來いと仰しやるんです、おほ／＼／＼褒めた上で吉田さん、貴方に御依頼があるの、聞いて下さいませるか、妾ぢやアない、お嬢様からですよ」

富田正次が月にも花にも代へ難き一粒種の芳子、まして芳紀の今が大事の瀬戸口、隙間も餘所の風にも當てじとすれど、彼さへ付き添へば仔細なして、をり／＼他出の自由をも許さるゝ下女の清、されば芳子のためには猶更腹心と聞えたるお清が、肥ツてうの五體づつしりと押し据ゑながら、心は元來の氣輕女、傍目もふらぬ吉田雄藏が讀書を會釋もなう横合より掻き亂して、お

のれ一人が俄の愛敬ぼたぼた、盛り上ツたる眞圓の膝頭つツかけ、
「ねエ吉田さん、いま言ツた事を、嫌ですか吉田さん、お嬢様からの御依頼ですよ、お嬢様も旦那様も同じ御主人でせう、違ひますか、違やア違ふと言ツて御覽なさい」
「いえ何、第一まだ、何の御用だか聞きませんに」
「おや〜さうですね、これは失敬申しました」

「失敬、しゆツけい、あは〜〜〜しゆツ敬とは」
「何が呵しいんです、何をお笑ひなさるの、しゆツ敬を申したから失敬と言ツたんですよ、吉田さんしゆツ敬」

「しゆツ敬ぢやアない失敬といふんでせう」
「お世話様、貴方ア失敬でも妾は、しゆツ敬ですよ、しゆツ敬、大しゆツ敬を申しました」
さすが温順無口の吉田雄蔵も、あまりの呵しさに腹をかへて逃げ出さんとすれば、重き身にも似合はぬ清が早業、忽然くるりと前に寒がツて、
「これ吉田さん、貴方ア何ですか、お嬢様の御用を」
「なるほど、さうでしたな、御免下さい、して御用は何の」

「しかし吉田さん、言ひ出した上で無効ぢやア、妾がお嬢様に申譯ありませんから、否か應か先づそれを確めて」
「なんですか、お嬢様の御用を私」
「さうでせう、さうなくツちやア濟まないワ、そこで御用はね、外でもないの、過日そら旦那様が御招待になツた、川上様ですが、あの川上様でエなア貴方の御親友でせう」
「親友どころか兄とも思ツてる人です」
「そら、其處が御用なんです、あの川上様は大變に書の巧い方だツてね、だから、お嬢様が此お扇子へ、何か書いて貰ひたいと仰しやるんですよ」
いひつゝ胸帯の間より女持黒骨の絹張扇を差出せば、吉田雄蔵なんとやら當惑の體、
「へエ、しかし、あの川上は、そんな事を面倒がる男で」
「面倒がツても、がらなくツてもさ、そこが貴方の御親友ぢやアありませんか、是が非でも今日これから直に往ツて下さい、だが吉田さん、嫌なら嫌と今のうちに」
「なに易い御用で、決して嫌ぢやアないですが、どうも困ツたな」
「何が困るもんですか、困るなア貴方の御勝手です」

下女でこそあれ多年召使はれたる當家の古參、主人にも萬事の氣心を許されて、いつも身は臺所の六疊に鎮坐ましましたながら、人知れぬ奥のこと一切より竈の前の沙汰采配、さては井戸端はしりもとまで不斷の光明を放てば、出入の男女も商賣大事の機嫌とりく、抱への車夫さへ拍手うって神酒の下らんことを願ひ、お清大明神と緯名を呼ばるゝ勢ひ凄しく、わけて令嬢よし子がために腹心股肱となつて、誰彼なしの頭上ごなしに用捨なければ、さすがの吉田雄藏も我身の權限を訴へて争ふ違もなく、忽ち驅り出されて汐入村の川上三吉を訪ひ行きぬ、をりしも上田力は例の黒田が隠れし穴を探らんとて市中に出で、倉橋幸藏は神田あたりの古本屋を覗うて腰掛の狡猪讀みに出掛け、幸ひに川上三吉たゞ一人、破壁に背を凭せて味噌摺鉢の火入を抱へながら、このみは以合はしからぬ牡鹿の大皮を座に敷き、兩腕を組み兩眼を閉ぢつゝ悠然として何をか思索に耽りしが、吉田雄藏の入り来るを見て思はず笑を漏らしぬ、
「やアよく來なすつた、さア此方へ、今日は僕が空巢守に出來上つて、どうも無聊に苦しんで居つた時だ、なるほど日曜だね」
いひつゝ自己が敷皮とつて抛ぐるが如く押し遣れば、吉田雄藏、かくても今なほ感勸の體、容を

正し言葉を謹みて一つ二つの雑談に、やう／＼當座の挨拶を作りながら、思ひ切つたる最後の果に懷中より彼の扇子を取らせば、川上三吉じろりと見たる目を其まゝ雄藏の面に向けつゝ、
「妙な物を持つてるね、そりやア女持の、しかも今時分」
「へい、これです、實に私に困つたんで、これは何ですお嬢さんの扇子で、どうも困つたなア、え、貴方に和歌でも詩でも宜いから、書いて貰つて呉れと、たのまれたんですよ」
「僕にか、あはゝゝゝ僕ア君も知る通り、歌人でも詩人でも書家でも何でもないよ、しかし吉田さん、そんな御使するやうになつちやア不可ンよ、無効だよ、わざ／＼此處まで持つて來ることがあるものか、其場で直ぐ謝絶つて仕舞へば宜いに、馬鹿々々しい、折角の志節が役に立たないぜ、よろしく一心不亂に勉強すべしだ、書くなら君が手習でもしてやるが宜い」
「え、何、いろ／＼言うて謝絶つたんですが」
「いくら口で謝絶つても現在さうして持つて來たぢやアないか、男らしくもない、萬事に心弱くつちやア不可ンよ、しつかりし給へ」
「はい、しかし、それでも亦」
「はいぢやアない、すぐ持つて歸つて、さう言ひなさい、川上三吉は嫌だと申しましたと、それ

で聞かなくツて君を妙に、呵しうするなら僕が往ツてやるから、あの娘ツ子まだ小兒だと思ツたに、なか／＼生な事をやる女だね」

いつになき川上三吉が兩眼むき出しての勢ひに、吉田雄藏おもはず首を縮めて汐入村を遁げ出でしが、さてまた心にかゝるお清大明神の社前、そも／＼何としてくれん、高が下女一人、さらに怖るゝ事はなけれど、會釋なしの一徹女、ぐわら／＼ぐわツと鳴り渡ツて嘸や騒がしからん、さりとして靜に令嬢に直接の返事などせば、それこそ我を抜け駆けの腹黒と見て、三度の兵糧責めに爲居るのみか、火鉢の火にもランプの石油にも怨念つきまとうて飽くまで災害せんと、思ひながら外に詮術なければ、いつしか濱町に歸ツて門を入るや否、ソツと自己が書生部屋に身を潜めつゝ、しきりに善後策を講ずる背後に忽ち敵の聲あり、

「御苦勞さま、いつの間にお歸りなすツて、ほんとは早いことねエ」

だしぬけの不意を打たれて吉田雄藏うろたへながら、

「えゝあの扇子は、生憎、川上が不在で、外のものに頼んで置きましたから、いづれ二三日のうちに」

「おや、さうですか、そいちやア其事をお嬢様に」

いひつゝ起ツて奥へ行きしかば、吉田雄藏ほつと一息ついて懐中の扇子を本箱に押し込み、まづ當座の方便、ゆる／＼思案せんと思ふうち、お清大明神またもや取ツて返して入り來りつゝ、一箇の菓子折包を目の前に差出しぬ、

「ねエ吉田さん、まことに度々御苦勞ですが、上下の人力車で、これを川上様にあげて下さいな、二重手間になツて濟みません」

「やア、そいつは愈もツて困りましたな」

「お困りでも貴方、どうかねエ、その代りお嬢様から御褒美も出ようし、また妾だツて御禮の仕様も、ありますからさ」

「いえ何、御褒美や御禮に及びませんが、なか／＼困りましたな、どうも、實に困ツたわい」

「そいちやアかうしませう、貴方お手紙を書いて下さい、家の車夫に持たしてやりますから」

さすがの吉田雄藏も進退こゝに谷まつて、今は泣き出さんばかりの顔色あはれに、しぶ／＼の返事やうやう口のうち、

「なアに、行きますよ私が、えゝ行きますとも」

たのまれし扇子一本の事でさへ、さん／＼口を極めて平生になき冷罵詰責、あれほど叱り飛ばさ

れし川上三吉の面前へ、時刻も移さず又もや取ツて返して此菓子折が、あゝ何として出さるゝものぞ、さりとて思へば令嬢の心を欺き、お清大明神の目をかすめて、心弱くも其扇子を本箱に押し隠したる我失策、ありのまゝに打明けて言はずとも外に通るゝ工夫はあるべきを、女々しき一時に驅られて當座凌ぎの挨拶、いづれ二三日のうちに必ずとは、さても我ながら拙かりし我口舌の災難、今更ら誰を恨みん筈はなけれど、眼前に持て餘したる此菓子折なんとせんと、思案投首まご／＼して藥研堀を歩む背後より、

「おい吉田、どこへ行く」

聲に驚いて振り返れば例の上田力先生、ステツキ小脇に掻い込んで反身を横たへ曲める下駄を踏んで立ツたる面相、相も變らぬ矜羯羅童子なりけり、盲龜の浮木、地獄で佛、吉田雄藏おもはず走せ寄ツて挨拶そこ／＼、こゝに仔細を打明けて牛泣きの涙面つければ、上田先生さらに平氣の顔色

「なんだ馬鹿々々しい、經一文に價するほどの心配もないさ、よし／＼僕が、しかも僕も黒田の奴で忙しいから、かうせう、濱町まで君と同道して門前に待ツてるから、君は家中へ還入ツて人に知れないやう筆に墨たツぶりつけて其扇子と共に持ツて出るのだ、ね、そこで僕が達筆さらさ

らと立ちながら書いてやるから、なアに川上より字は僕の方が巧いよ、安心し給へ、しかし、その菓子折は貰ツて行くよ、宜いか、見付けられちやア不可ンゼ」

「お嬢様お嬢様、吉田が唯今戻ツてまゐりました、そして、あの今朝ヤツた時、川上様といふ方が御不在で、二三日かゝると御返事申上げた御扇子が貴嬢、出来てまゐりましたよ、しかし何だか、あんまり御上手でもないやうで御座いますワ、べた／＼と墨ばかり眞黒で、おほ／＼／＼ムレ

令嬢よし子は珠玉を得し心地の嬉しさ、じつと堪へて何氣もなう、わざと靜に片頬の露を滾しながら、

「清としたことが、何をいふんだね、お上手か、お下手か、お前なんぞが分らないに」

「おや／＼また失敬申しました、御免あそばせ、妾は此頃しゆツ敬ばかりしてさ」

いひつゝ差出すを受けて披けば、例の上田先生が門前に立ちながらの筆跡、絹張砂子の女持扇子を横仕しに會釋もなき墨痕まツくろ／＼、花には嵐、御用心、御用心、

たゞこれだけの文字に扇一杯、殆ど白地はなかりける、

黒田健次め、いづこ如何なる市井の穴に潜みけん、まづ差當りての目算は、固より自己が數物にすべき善なき六枚の獸皮、その行先賣場の詮議は東京十五區の皮屋といふ皮屋をたづねまはり、これほどの年輩しかく、の男と聞けど更に其甲斐なかりしかば、第二に差當りての目算は、思ひぞ出づる去年の秋の末、倉橋と我と彼奴もろとも三人が、今戸の鹽煎餅五錢づつの手土産ひつさけて、二日用意の瘦腹空腹を抱へつゝ、汐入村を押し出し、あらゆる舊來の朋友知己あはせて六十餘人を片ツ端より驚かし、議論と洒落と腕力と三拍子、あくまで大に闖入強迫食の策を恣にせし時の下宿屋、それからそれと残る方なく踏ん込めども何の手掛りなければ、七日と心に誓ひし日數も空しく五日を過ぎて残る二日の晝ごろ、ふら／＼と藥研堀に彷徨うて思はぬ吉田雄藏に逢ひ、きけば難儀の事情仔細、これぞ卸つて我ために幸ひの一興と、濱町の富田が門前まで伴うて立ちながらの拙筆に憚りもなく、花には嵐、御用心御用心の八字に金砂子の絹張扇子を横様に畢べツたりと塗り渡して、持て餘す菓子折そのまゝ小脇に立去るや否、上野公園に走せ入つて切株に腰うちかけながら、こゝしばし上田先生、力の君の世界とぞなりける、

櫻さく春には程もあれど梅は散り際の公園に、ちらほらと遊人の影を樹間々々に見渡しながら、阿彌陀かづきの破れ帽、履き曲めたる廻下駄、ステツキを腰に立て掛け、をりからの空腹これぞ甘露の凝固と、小脇に抱へし大の菓子折そのまゝに水引を捲り蓋おしあけて、みれば極々上の眞黄色なる大鼓饅頭五十ばかり、やアありがたい、騒ぐな腹の蟲ども、それ落し込むぞと眉を釣り昂げ目を皺め、さらぬも平たき獅子鼻いと無慚に押し擴げて、満面の七分は唯これ大團圓の鹽口、むしや／＼と續けさまに七個八個を頬張つたるまゝ、目を白黒にして頻りに胸を叩き腰を伸ばし、やう／＼をさまれどまた懲りずまに三個四個五個、食うては愉快と叫び、叫んでは食ひ、元來が雨風の亂戦に名を得たる上田先生、さしも五十の大鼓饅頭その半まで平げぬ、さすがに雨風雨關の乃公も五十は不可ン、残つた二十五そのまゝ持つて歸れば川上の手前、さればとて此處に棄て行かんも犬の腹を肥す業、勿體なし勿體なし、あゝ誰か我に等しき貧窮書生の風來物が二三人も來居らぬかと、はるかに見渡す前路の樹蔭より、何気なき急ぎ足に來掛るは、やア、やア、

「おゝいッ、倉橋いッ倉橋やアいッ」

倉橋幸藏が今の身に眼前の怪とするもの五事、その一は寒暑とも、朝ぼらけの隅田川邊に出でて

流水より清き我腕に諸種の思想を宿して獨り笑まるゝ心地、その二は夜更け人定まッて一穗の燈下に筆を走する時うたゝ興に驅られて鷄鳴に驚くの快、その三は浴後の五體を踏ん伸ばして大字となりつゝ無心に天井の節穴を數ふる時、その四は得意の議論を吐いて與みし易からざる川上三吉と口角の泡を飛ばす時、その五は飄然として足跡いたるところの古本屋を歩きつゝ眼光一閃の間に無代價の珠玉を見出すこと常に以上の五事をもて王侯の富貴にも代へ難き快樂とぞなしぬ。

されば今日の日曜日もふがまゝに第五の快樂をつくさんと朝のうちより汐入村を出でて神田本郷の古本屋を一軒も餘さず、店頭に立ッて仇敵の在所を覘ふに等しくかの一冊この一冊また三四冊五六冊、時には代價を問うて買ふが如く買はざるが如く、隙間あれば狡猾尻を打掛けて一瞬の盜み讀みに、其日の晝飯に得あはぬ空腹を罪の報いと心得て午後の四時頃やう／＼歸る途すがらも、不忍の池畔より上野の森を望んで、萬金の家にも得難き庭園ほしきまゝに我を迎へて容るゝと思へば、さらに身の貧しきを打忘れて紳士の招待状を受けしが如くかぎりなき清閑の樹間を悠悠として歩む折しも、いづこよりか倉橋、倉橋と呼ぶ聲に驚いて見廻せば、あなたの樹蔭に大手をあげて我を招くは上田力なりけり、さすがの彼奴も黒田をたづねめぐみて、足を空にせんより

は人の繁き公園に網を張るならんと、立寄ッて見れば大の菓子折を小脇に抱へて切株に腰うちかけ、しかも菓子折の蓋の半は開いて、唇端に黄色の粉を残し頬邊に鉛粉べた／＼と塗れたる風情、

「どうだい倉橋、素敵めッぽふ極製の太鼓饅頭だ、喰はないか、なに、なに、こりやアさる絶世の美人より乃公への贈物だよ、出所不明の怪しいもんぢやアないから安心して喰ひ給へ、なかなかうまいぞ」

いひつゝ菓子折を兩手にさゝげて目鼻の間に突き出されし倉橋幸藏、さても奇怪、さても奇妙、ふしぎふしぎと思へども晝飯を外して腹は憂から下地は大の好物、上田の顔と太鼓饅頭を七分三分に見分けながらおぼつかかなげの眉を寄せて片頬に笑を含みつゝ、

「宜いか上田、大丈夫か、何だか毒を食ふやうな心持するが、まア一個ぐらゐ」

「一個ぐらゐ、そんな吝な考を出さず両手で掴んで遣り給へ、誰が見たッて構ふものか、どし／＼大に食ふべしだ、僕ア二十五六も遣ッて少々胸に悶へて居るが、もう五個六個御陪食にあづからうか」

鏡一文を落しても血眼になつて探れども人ひとりを喪うて不知顔なる今の世に、かゝる振舞の我を見て愚とや笑はん狂とや誹らん、されど我には愚ならず狂ならぬ心の花の露として、朝の東天は烏と共に先を争うて立出で、夜は空照る星を燈火に代へて立歸りつゝ、七日といふ七日の間、さながら不具戴天の親の仇敵を覘ふが如く、四里四方の市中寸隙もなく駆け廻れども、黒田め、黒田め、どこの穴に潜みけん影さへなければ流石の上田ぬし力の君も呆れに呆れ勞れに勞れて、あゝ無効だ、しかし功はなくとも氣は濟んだ乃公の、さうとも〜成功にのみ眞實は宿らないからと、迎へて慰めしは川上三吉、御苦勞だつた、あれほどの横着野郎も他日この事を知らば君の情義に感佩すべしとは倉橋幸藏の言葉、上田は中間に挿まれて目鼻を寄せつゝ冷かに笑ひぬ、足を空にして駆け廻りし七日の疲勞も、わづか一夜と半日の枕に休めて、また元の勇氣凛々たる上田力、倉橋が新聞社にとて立出でしあとに残る川上三吉を捉へて一つ二つの雑談に聲をかしう高笑ひの折柄、破門がたびしと引き開けて庭の小石に躓きながら、戸口に入り來つて俄に捕走つたる女の聲、

「御免下さいまし、ちよいと誰様か、御免下さいまし」

川上が目あての差圖に上田力おいと答へて立出でつゝ見れば、名は知らねど顔は知る濱町の富田が下女、

「あのウ川上様は、いらつしやいますか、ちよいと御目にかゝりたら御座いました」

きくや否や上田が胸に八寸釘、しまつた、扇子の偽筆葉子折の横奪、いやはや、此奴が此奴が、わるい時に來せ居つた、まして傳へ聞く大の饒舌、さては忽ち露見の基、このまゝ追ひ返しくれんと肩を怒らし拳を握つて、さながら毒を舐めたる面相、あくまで口を尖らし目玉を斜いて睨みつけながら、あはれや聲のみ低めて頼むが如く訴ふるが如く、また泣くが如く、

「おい下女君、何の用だえ、何だ用事は、僕にまづ言ひ給へ、うまく取次いでやるから、あの川上、なか〜むづかしい男だよ」

「いえ貴方、ちき〜御目にかゝらなきやア、いけない用ですから、それにまたお嬢様から過日の御禮も御座いますの」

「なんだ、此間の禮たア扇子のことか、なアに禮なンざア入るもんか、禮をいふと却つて怒るくらゐの妙な男だよ」

上田力が寛嚴剛柔さまざまに追ひ歸しの辯をふるへども、お清大明神なか〜に納受まします

いにし

「おや、おや、いよ、怪しからぬ事、おや、おや、お清が會釋もなく喋々と饒舌り立つる勢ひに、扇子の偽筆、菓子折の横奪、いつれも忽ち露顯して、さては何者の仕業ぞと思へども、倉橋が物に大事を取る謹直、吉田が事に馴れざる質朴、居れば必ず此奴と目星の外れぬ黒田も今は去つて影なき後にこの悪戯をすべきもの上田の外になし、なるほど思ひ合はせば過ぎし夜の歸りし時、ガンがらの空腹かへて餓鬼の如く茶碗に嚙りつくべき筈を、其夜に限りて夕飯の箸も取らざるのみか、胸が悶へて苦しいと大土瓶の茶を七分まで飲み盡したる證據歴然、もはや遁るゝ道はあるまじと、川上三吉おもはず笑を含んで上田、おい上田、上田々々と二三度つゞけて呼べば、臺所の障子ぐわらりと引き開けて現はれ出でたる上田先生、おのが両手に頭を抱へながら、

「やア南無三寶、失敬、失敬、しかし僕が好んで遣つた業ぢやアない、藥研堀で吉田に逢つて、その困難の體を見るに忍びずさ、あはゝゝゝゝ時に下女君よ家へ歸つて、うまく令嬢を誤魔化してくれ給へ、たのむ、吉田の失策にならないやう、たのむぜ」

お清大明神この體を見て今更に驚き呆れ、さらぬも膨れし頬邊ぶつと膨らしながら、かたつば眼

に上田の顔じろり、

「いやです、御免蒙ります、うまく御主人を誤魔化すなんて、そんな大膽な事は妾に出来ませんから、ありのまゝに申し上げますワ、はい、ほんたうに貴方は、ひどい人ね、偽筆は罪が重う御座いますよ、それにまた、あの吉田さんも吉田さんだ、おとなしい眞面目な顔をして、こんな大それた同類になるなんて、よろしい、お嬢様に打明けた上、旦那様にも」

「なんだ罪が重い、何の罪が重いのだ、洒落に遣つて洒落に謝つてやるんだ」

「おや、洒落とは何で御座います、これは怪しからぬ、洒落に遣つて洒落に」

「だまれ下女君、いや手前なにかに君の字は勿體ない、やい下女、こら下女、富田の下々女め、濱町河岸の棒杭め、天下の豪傑に向つて無禮至極、控へろ、退れ」

「いえ退りませぬわ、なか／＼以て控へませぬわ、大事の御主人が馬鹿にされた上、あべこべに下々女なんて、誰が退りますものか」

「いや此奴は、呆れ返つた強情阿魔だ、手前の爲にならないから退れといふんだ」

「手前のためにならないから退りませぬわ、さア貴方、上田さん、どうして下さいます、おや、おやおや何ですえ、いくら御脱みなすつても怖かア御座いませぬよ、貴方の顔が怖くつちやア鬼

瓦のある物干へ上れませんから、ほゝゝゝ」
 「笑ツたな畜生、いやさ笑やアがツたな棒枕め」
 「棒枕が笑ツちやア石垣が崩れますよ、御用心なさい」
 「なんだ、こら下女、やい下女、下々の下々の大下女め」
 「御丁寧さま、さぞ御手数で在らツしやいませう、ほゝゝゝ」
 「此女、また笑ツたな」
 お清大明神と上田先生とが泡を吹いての舌戦に、さすがの川上三吉も腹を抱へて横に頭びつゝ、
 「おい止せ、二人とも止さんか、第一上田、貴様が不可ン、女を捉へて、止せッてば止さないか」
 互の舌戦まけず劣らず、果は立上ツて掴みかゝらん勢ひに、さすがの川上も持て餘して左右に引き分けつゝ、さらば改めてこの三吉が令嬢への手紙を添へんと、事の行き違ひし段々さらさら〜と書いて投げ出せば、お清は受取ツて俄の喜悅、これで妾の申譯も立ちますと、いそ〜出で行く後姿を力の君ぐツと睨みつけて、やい待て下女家に歸ツて吉田をいぢめた。曉は、これだぞ、と螺の如き拳固を振り廻せば、お清ふりかへりてホ、と笑ひながら、おや怖いこと、まだ嫁入前で御坐いますと驚に似たる出尻ひよこ〜立去りぬ、

お清と上田の喧嘩ありしより四五日の後、富田正次ふらりと汐入村の破巢をおとづれて、をりしも川上三吉たゞ一人を僥倖に、四方山の浮世がたりに時をうつせし後、おもはず膝を進めて片頬に笑を含みながら、
 「時に川上さん、實は今日、ちと御依頼があつて來ましたが」
 「わざ〜この茅屋へ、わざ〜この青二才へ御依頼たア何です、まさか生命を出せちやア御坐いますまいな、あはゝゝゝ」
 「いや、どうも、お言葉だよ、聞いて下さらないと、生命を貰ふかも知れません、あはゝゝゝ、えゝ外でもないが、かねて聞き及ぶに貴方ア御同胞が御ありなさるさうだな、お國に御舎兄が」
 「はい、まア兄が、どうなり、かうなり山家相應に遣ッて行きますから、こんな馬鹿な眞似をして、いつまで風來で居られるです、かつ再親とも幼少のころ喪ひましたから」
 「そこです、しかし談話は早いが宜い、そこで川上さん、たのみは其處ですよ」
 「どこです、どこが」
 「さう切り込まれて來ちやア困る、そこでね、どうも甚だ失敬だが、いや全體こんな事は人を以

て、倉橋さんでも中へ這入ッて貰ふが當然だが、私は露骨に云ひますよ、まことに失敬だが、定めし御不満だらうが、富田の子になッて下さらないか、この正次を、まア親のつもりにして下さらないか、不束女ですが、娘を君に貰ッていたゞきたい、是非とも」

川上三吉、おもはず腕を組んで坐を動きながら、
「いけませんな、なアに、僕は過分至極、極彩色の當世ぢやア横町の牝犬にも思ひつかれませんが、貴方のために不可ン、第一が令嬢のため、なほさら不可ン、斷じて、いけませんな、萬事この川上を買ひ過ぎておいでなさるからだ、三吉は、お望みほどの奴ぢやア御座いませんよ、あはは、その事なら、芳志を満身にうけて、生涯履歴のうちの特筆して置きますが、實行の點は、どうか再び御考へ直しを願ひたい」

川上が手紙を添へて事まづ無事に似たれども、あの下女の面魂なみくくの奴ならねば、執念ぶかくも家へ歸ッて令嬢を、咳し、左右より年少の吉田を取ッて押へて惱まさんも知れがたし、さては此上田力が一分ちよいと立たざる道理、よしおのれ、おしかけて仔細を窺うたる上、もしや其事あらば何をか容赦すべき、主人に逢うて一議論ふツかけ、忽ち吉田を引き連れて立去らんの

みと、例の兩肩を怒らして悠々と汐入村を立出で、濱町の富田の玄關より今日は一入さらに破鐘の大聲はりあげぬ、

「たのむ、たのもウ」

をりしも吉田の不在にや、また外に取次のなかりしにや、ぬツと顔を現せしは役目違ひのお清大明神

「やア手前か、吉田は」

「おや、おや、まア上田さん、何の御用で、旦那様は御不在ですよ、はア、在らッしやいませんよ、書生の吉田さんに御用なら、こゝは玄關ですから臺所へ廻ッて下さい、しかし吉田さんも不在で、お氣の毒様、お生憎様」

「なんだ、主人も吉田も、しかし下女、臺所から廻れたア誰に吐した、よく見る上田だぞ、力の君だぞ、主人とは十年來の友達だ、玄關から案内乞うたが、どゞどうした、もムンがアめし」

「おや貴方ア何ですか、喧嘩しに入らッたの、おツかない事、亂暴なると、迂に交番所が御座いますよ、そのまゝ歸しませんよ」

「畜生いち、手前の言ふ事が癪に觸る、第一その面を取替へろ、蟲の好かない面だ、出直せ下

下女め、折角の天氣が曇らア

「癪に觸ツても蟲が好かなくツても餘計な御世話さま、貴方にお給金いたゞきませンワ、はい、さようなら、しづかに御歸ンなさい、犬に吠えられない用心して」

びしやりと障子をたて、ホ、と笑へば、上田おもはず地謡輪ふんで大喝一聲、

「馬鹿ツ」

主人も吉田も不在ならば外に詮なしと、馬鹿の一言を残して立去り、舌鼓うちながら兩國の廣小路まで来かゝる横合より、砂を蹴り風を切ツて韋駄天の二人曳き、車輪は宛がら飛ぶが如き人車の上を見れば、黒の山高帽子に綾羅紗の二重外套、葉巻の煙ぶツと香氣を四邊に薫じながら、おもはず此方を振り向く紳士は、ヤツ、正しく黒田健次、ヤア、黒田め、健次め、上田力、躍り上ツて追ツ掛けながら、

「黒田、おい黒田ア、待てツ」

聲を絞ツて二聲三聲さけば、車上より振り返ツて帽子を脱ぎつゝ、また向き直ツて二人曳きの砂煙、あゝ野郎、とても度し難い奴だ、

「だめだね黒田の奴は、斷じて度しがたい俗物だな、僕ア今まで馬鹿に買ひ被ツて居たよ、なぜツて君、かうだ、聞いてくれ、實ア今日、兩國の廣小路でね、ふいと出喰はしたのさ、すると黒の山高帽子に綾羅紗の二重外套を着ヤアがツて、高臺の二人曳きで、奴、得々然と、いはゆる紳士然として駈けてゆくから、おい黒田、黒田々々と二三度も吐鳴ツて追ツ掛けると、車上から振り返ツて帽子を脱いだばかり、そのまゝまた向き直ツて、畜生、もはや僕には再び追ツ掛ける勇氣がないね、どうしても足が進まなかつたよ、ちヤアないか君、たとひ一朝一夕の友にも自己が名を呼ばれたら、車を止めて何とか挨拶すべき筈を畜生、ふさけた奴だ、十年の苦樂、由來の知己、一月あとも瘦腹かゝへて難行を共にした僕を、僕と知りつゝ實に言語に絶した奴だ、彼奴が無斷で出奔した時にもさ、理論から言ヤア飼猫一疋を失つたほどの利害もないが、さて風雨寒暑の幾年月を互に抱き合ツて、この破れ果の床の上に今日までも凌いで来た友達と思ツてさ、一片の熱腸いたづらに七日間も四里四方を駈け廻つた上田力を、奴、もはや忘れたのだ、うぬ、今に見ろ、コンど逢ツたら車上から引き摺り下して、彼奴の面が降けるか僕のステツキが折れるか、なアに構ふものか、人情で行かず道理で無効な奴には腕力の制裁より外にないから」

正路一徹に身を忘れて眞實を思ふだけ、また醜ツて敵とすれば眞向を覗うて一步も退かぬ上田

力が、眼中に血筋を含んで拳を握る勢ひに、倉橋幸藏も言葉添へて憤怒の面色、
「なるほど、いかにも薄情むざんの奴だ、こゝに至つては黒田健次、もはや人にあらずだ、怪し
からん奴だ」

しきりに左右より怒りの聲を振り立つれば、川上三吉おもむろに膝を進めて、

「いや道理だ、そりやア黒田が不可ん、いかんどころぢやアない既に毀物だ、しかし上田倉橋、
まだ君達の喜怒は早過ぎるよ、たとへばさ、よし黒田を極悪人にもしろ、わづか獸皮六枚を荷い
で、あの風俗で出奔してより一月あまりの今日、忽然きくが如きの紳士面えらい奴だよ、なアに
俗物と俗物にあらざるは別問題として、野郎なか／＼の奴だぜ、そこで上田にいふがね、そもそ
も十年苦樂の我々を一朝に捨て、遁げた彼奴が、僅々數十日の間に紳士となつて、その君に呼び
止められて帽子を脱いだばかり、さらに一語を交へず自己が手柄話もしなかつた處は、おい、與
みし易からん彼奴の本色だよ、君達ア奴を買ひ被つて居たといふが、この三吉は今日はじめ彼
奴の代價を認めたね、む、儲に買ひ上げたよ、だから打棄つておけ、奴が奴だけの業を成した後
は眞實の黒田となつて、きつと再び我々を訪うて来るから、其時に段々の無禮を辯ずるだけの論
を以て来る奴だから」

其 九

濱町の富田正次より汐入村の三人に宛て、一書到来、別段さしたる儀に無之候へども、聊か一家
の心祝ひ御坐候まゝ、御差支なくば半日の閑を拙宅に賜はりたく、御來車のほど待ち入り候との
文意に、さらば往け行かう、一碗の飯も一滴の酒も返る目的なうては振舞はぬ當世に、いはゞ不
遺掠奪の我々貧生を愛するの人、その芳志を無にせんは禮にあらざるのみか、たま／＼此瘦腹を
肥すに足んらと、笑ひながら三人うち揃うて悠々と汐入村の古巢を押し出しぬ、
濱町の富田家には豫て設けの席に破れ布子きたる斯三人を迎へて、あくまで慰勸の待遇、及ぶか
ぎりに山海の美味、主客うちとけて互の興に我を忘るゝころ、川上三吉おもむろに盃をおいて
主人に向ひつつ、

「茶食の貧生いづれも案外の御馳走に逢うて、此處ちと狼狽の體です、あはゝゝゝ、それがた
めに伺ひ後れて、何だか妙ですが、え、今日わざ／＼御書面の、御心祝儀とは」

問はれて主人の正次なとやら當惑の顔色、たゞ満面の笑を浮かべながら坐を動かして、
「いや、それは此方から挨拶すべき筈ですがね、まア宜いさ、私の心に何か吉事があつたと思つ

て、どうか十二分に酔うて下さい、髭の生えた人間や金氣一色の俗物ばかりに交際して居るから、たまに斯うして君達の天真爛漫に接しないと早く死ぬよ」

「なるほど、すると我々が牛飲馬食の無禮は却つて貴君の名薬になる譯ですな、これは面白い、我々また斯る珍味に逢うては延年の仙薬も同然、いはゞ御互様で、あはゝゝゝゝね倉橋、あ

あ承った上は今日に限らず、爾後をりゝ名薬進上に罷り出ようぢやないか」

さすがに謙直の倉橋幸藏も思はず吹き出して、氣の毒げに主人の顔を見ながら、

「どうも、かういふ徒輩で殆ど死物狂ひの男ですから、迂濶に物を仰しやると堪りません、よほど御用心なさらんと、すぐに切り込みますから」

三人の物語、雨となるも風となるも更に關せず、おのれ一人こゝに膝前なる臍部を引つ構へて、

獨酌の鯨飲、雨を欺く亂筆の大荒食、むしろと餓鬼の如く喰らふ上田力も、此時やうゝ顔をあけて、あまり無言の手持無沙汰に何をか言ひ出づると思へば、兩眼むき出し坐中を見廻しながら、

「やアなかゝの御馳走だ、實に美味い近來の快だ、時に主人公に伺ひますが、御當家に清といふ下女が御座いますな、あの下女ちよいと此席へ御呼び下さいませんか」

川上倉橋の二人おもはず振り返つて目を敬てながら、

「これ上田、よせつてば、どうも君は小兒で不可ン、困るよ、止せゝ」

「いや止さない、彼奴この乃公を馬鹿にして、例の扇子以來、怒し難い怨恨があるんだ、是非よんで貰ひたい」

あまりの美酒佳肴に腹加減を損じけん、上田先生どうやら巻き始めける、